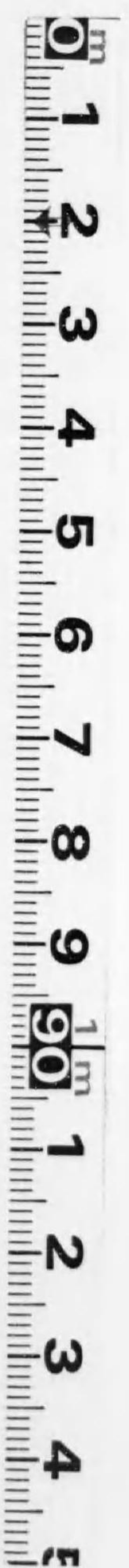
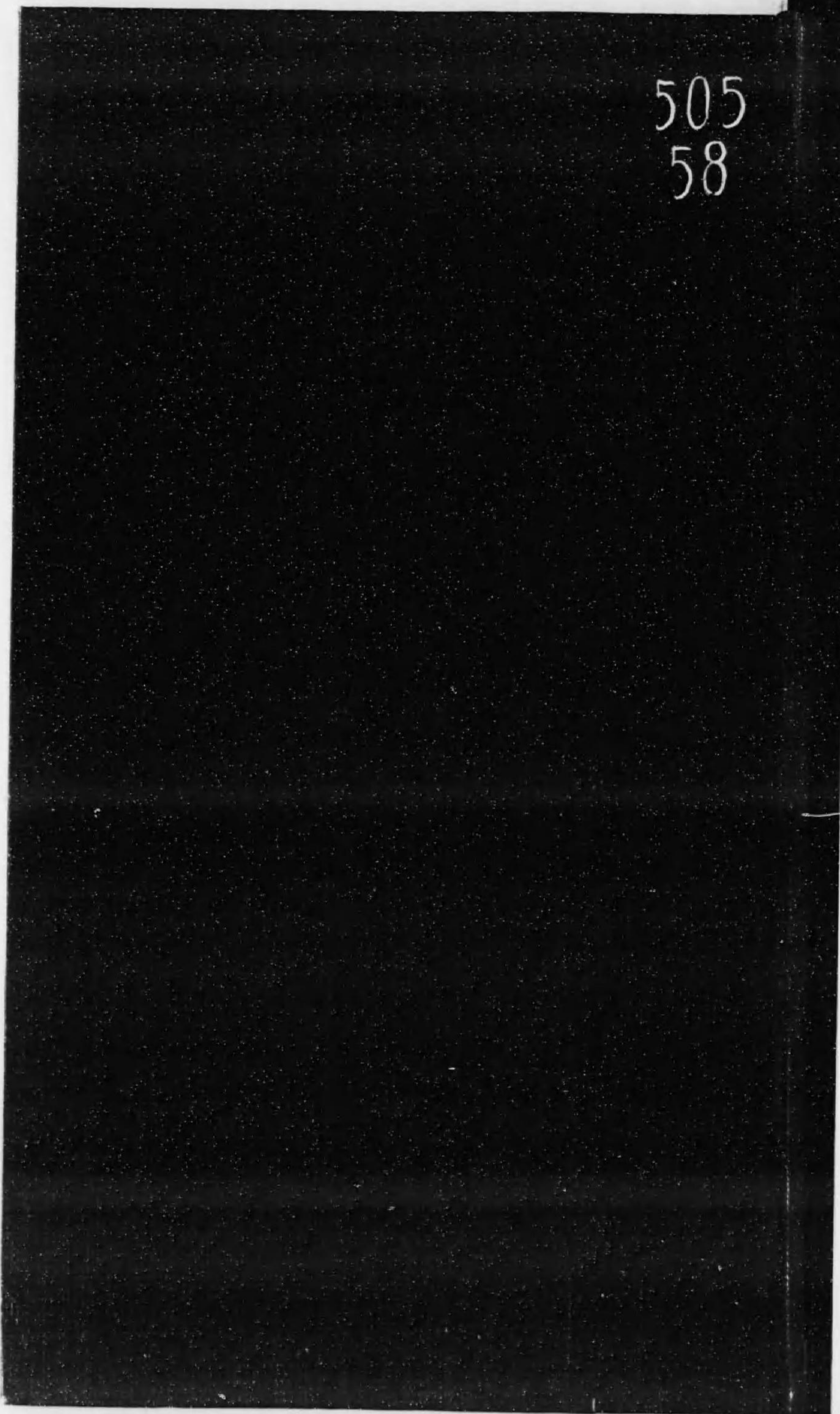


始



505
58



505-58



高野聖蹟山

黒木勲蔵

校訂

第七卷

松門
在野全集

表陽堂發行



のあつたのを當込んだものと見るべく、随つて此の時の作と推定してよからうと思ふ。
又大經師昔曆も同じく外題年鑑には寶永三年九月の上場となつてゐるが、校訂者は正徳五年の作と考定して、その年次に編入した。その理由は序巻にある。附けていふ、戀八卦柱曆及び貞享元年情柱曆は共に此の作の外題替である。

大正十二年二月

校訂者しるす

近松門左衛門全集

第七卷目次

一 天 神 記 (淨瑠璃)	正徳三年刊)	一
二 礫 靜 胎 内 裙 (同上)	同 年 刊)	六〇
三 相 模 入 道 千 疋 犬 (同上)	正徳四年刊)	三三
四 娥 歌 が る た (同上)	同 年 刊)	一八四
五 嵯 峨 天 皇 甘 露 雨 (同上)	同 年 刊)	二四一
六 大 經 師 昔 曆 (同上)	正徳五年刊)	三〇一
七 持 統 天 皇 歌 軍 法 (同上)	同 年 刊)	三三八
八 生 玉 心 中 (同上)	同 年 刊)	四〇六

九 國性爺合戰 (淨瑠璃)
 一〇 國性爺後日合戰 (同上)
 一一 鍵の権三重帷子 (同上)

正徳五年刊……………四三
 享保二年刊……………五〇
 同 年刊……………六一



繪挿(題收戰合日後爺性國)談軍日後爺性國

一〇 國性爺後日合戰 (同上)
 一一 鐘の權三重帷子 (同上)

正徳五年刊 四三、
 享保二年刊 五〇、
 同 年刊 五二、

天神記 其松岡家作
 宣化坊のわらん森の中へ
 今更なるんはとくにむすむる由
 客の対馬の文一と云ふかた梅
 方か妻も夫の海神の御法も
 明しん家の名を記すかたは



天神記

(七行八十六丁木十二行廿七丁本参照)
近松門左衛門作

序 宣風坊の北。新に栽ゆる所千金の吟二葉より馨しく。仁壽殿の西曲宴の時。王佐の文一
 天に輝き。梅が香ふかき菅原や。天満神の威徳こそ。オロシムかしこき國の。守りなれ。地古へ
 の聖代に臣五人あつて天下大いに治るとや。今秋津洲に一人の臣魏々たるかな君たること。唐
 堯に准へ奉れば民また舜の民の門。明行く春の壽も上に習ひて道しある。喜びを延べし年號
 に。延喜の帝の御代の春。フシ雲井の。庭ぞゆたかなる。地爰に唐土照宣皇帝の使表文籍と云ふ
 者。來朝によつて木内に召さるれば。今を盛りの一木の梅。瑠璃の盤に移し植る南階に捧げ。
 表文籍謹んで。隣國會盟の悦を奏し。抑此の梅は唐の帝の御宇。天下文學盛んにて萬民太平
 を稱へし時。諸木に勝れ花の色香を増したる故好文木と名付け。夫より國家文學起る代には。
 花も色濃く匂もふかく。文學廢る代には色香を失ひ。博學の人の植ゆる種は芽を出し。不學の
 記 人の植ゆる種は土の底に朽果て。君子の徳を備へし名木。地然るに日本の大臣和漢の學に貫通

し。此の梅深く所望の由我が帝是を感じ。萬里の波路を渡されたり。彼の大臣立出で、フシ請取り給へと述べにける。本院の左大臣藤原の時平公陣の座をつゝと立ち。日本の大臣とは我が事。扱は我が學力異國にも隠れなく。好文木を渡されしな。菅丞相などが儒學の家で候とて。位に登りいきれども文盲不學の位盗人。誠の學者とは此の時平道に心ざす人々。我が門弟子となつて學問あれとぞ仰せける。裴文籍顔をながめ。いや日本の大臣とて一人には限るまじ。去年の春唐土に渡り好文木を望まれしを。宮中に召し詩文を觀覽。則ち我が國の裝束を賜りし。其の覺え有る大臣。請取り給へといひければ。地時平を始め諸卿の面々去年異國へ渡りしとは。公家の内には覺えなし。如何なる異國の謀かとフシ各。眉をぞ顰めらる。地君も不思議の叢慮にて。左大臣一人の計ひも如何なり。菅丞相を召すべしとオクリやがて、勅使を立てらる。地君に應じて菅丞相いつに變りし御裝束。冠にあらぬ給綿巾深衣の裳飄々と。金華の沓引きならし南殿に立ち給へば。家の子俱利加羅太郎春綱其の丈七尺六寸。無雙の骨柄勇力萬人に勝れし故。日本今樊噲と異名せられ御供に従ひしは。古への照烈帝にフシ、關羽が添うたる如くなり。地裴文籍禮をなし珍しや大臣。我こそ照宣皇帝の學士裴文籍よも見忘れ給ふまじ。是ぞ所望の好文木

植置きて文學の。色香を國に添へ給へと述べければ。菅丞相聞召し。不思議の人に逢ふことよ。臣常々好文木を慕ひ。幾春過ぎし思ひ寢の夢路は遠き唐土船。唐帝の王宮に到り。裴文籍と云ふ臣下に筆談し長篇の詩を奏し。裝束を賜つて着すると思へば。夢覺めて枕を見れば此の裝束。誰が置きしとも不思議とも人にも語らず過ぎつるに。地只今逢ふは夢に見し裴文籍。聲も面も違はずと語り給へば横手を打ち。地扱は夢の魂我が國に渡り詩を作り給ふかや。凡人ならぬ大臣と退つて敬ひ尊めば。君を始め百司百官フシ暫し。感じて在します。地時平の大臣嘲笑ひ。夢に魂通ふなどは女童の俗説。學者の口から云はぬ事。莊子が夢中に無何有の郷に遊び。胡蝶と成つて牡丹花に戯れしなどは。皆虛誕の寓言とて。佛法に云ふ方便の偽り。聖人に夢なし不學者の口ずさみ。事可笑やと云ひければ。菅相聞きもあへ給はず。ム、聖人に夢なしとは何れの書に出でたるぞ。あればこそ孔子も夢にだも周公を見ずと宣へり。夢の中に華胥の國に到り。天下を治め給ひし黃帝は聖人ならずや。地我が朝の聖德太子身は夢殿にありながら。唐土天台山に到り。前生の法華を將來し給ふ。是等は如何なる義理やらん。學力ある時平公に承らんと宣へば。一句にはつたと詰められテ、。地非學者論に負けず御邊などと論は

せず。これ此の好文木學者が植ゆれば色香をまし。不學者には花凋むと云ふ屈竟の證據。地植
 るて時平が智惠の花。咲かせて見せんと立寄れば。地風も吹かぬにはらくらくと。一輪も残
 らず散る花に不學のしるし顯れて。各どつと笑はるれば時平は面目失ひながら。邊を睨んで居
 たりけり。地菅相可笑しく思召しいで某も一枝折り。宿の古木に接應して咲くや咲かずや試み
 んと。楚を手折り差しかざし袖ぐくみに持つて立ち給へば。不思議や此の枝蕾を生じ爛漫と花
 開け。匂ひ四方に芬々たる菅丞相の文學。和漢に秀でし才智ぞと花も物云ふばかりなり。堂上
 堂下あつとばかりフシ奇異の思ひをなし給ふ。地叡感猶も淺からず。斯る不思議を末の世に残さ
 んと。忝くも宸筆にて菅丞相の畫像を寫され。御簾に掲げ給ひける扱こそ渡唐の天神と。末世
 に仰ぐぞ有難き。地重ねて宣旨有りけるは唐土の使表文籍。暫く都に止め置き右近の馬場にて。
 小弓の勝負曲馬を乗らせて慰めよ。時平の大臣菅丞相兩人是を響應すべしと。珠簾ふかく入御
 なれば梅が枝うたふ宮人の。梅の笠附前句附。連歌俳諧此の神にさかうる。御代の三重春な
 れや。フシ柳櫻の。地唐錦唐使の宿は鴻臚館時平の大臣の馳走として。我に親しき物かはの宰相
 定國。藤原の菅根の朝臣を馳走人に附置き。毎日鶏豚猪を持運び朝夕の膳部にも。長崎よ

り唐人流の料理人を呼び寄せ。鶏飯羊粥家の焼皮。熊の掌狸の澤渡猿の木取。菓子に取つて
 は鼈羹羊羹かすてらぼるてら。砂糖羊羹驢腸羹。伏兔曲の煎餅。饅頭菓子麵笋羊羹。名も聞馴
 れぬ食物何れも豚の油あけ。ちんた泡盛覆盆酒無量の名酒名菓を以て。色をかへ品をかへ馳
 走を以て抱込めば。裴文籍も傾きて。何事なりとも此の返禮。時平公の御用ならばフシ聞きた
 き色目見えけるが。地定國菅根兩人を招き。詞今度某が來朝は。菅丞相一人の爲なるに。本人
 の菅丞相は無馳走して却つて時平公。御兩人を附置き眞實見えたる御馳走。我が身の面目本土
 に還つての物語。此の御禮は詞を以ても謝し難し。異國人の某に御用とても有るまじきが。若
 し相應の御用もあらば隔てなく。承らんと打解けてこそ申しけれ。兩人すはや仕濟せしと近
 く寄つて小聲になり。總じて菅丞相己れが學問を鼻にあて。人を輕しめ侮つて唐の天子の勅使
 をさへ。斯様に龜相の接待是にて萬事を推量あれ。時平公無念をおさへ鬱憤更に止む事なし。
 御身時平公に與し菅丞相逆心を起し。唐土を頼み日本を覆へす謀ありとの。一通の書翰を認
 め見せ給は。それを以て謀叛人と奏聞し。菅丞相を刑戮の罪に沈むべし。よい仕合で流罪は
 必定。地時には時平公より貴殿に黄金千兩。引出物せらるべしと豫て用意の五百兩五包。二人

が兩の袖より出し。残る五百兩は成就の上の事。先づさきへ渡すを日本にては手付けと申す。是を取つては違背ならず。首尾能く頼み存ずるとフシ退引させず談すれば。地唐土に稀なる黄金に一心迷ひて打領うちうりょうき。甚事某に任されよ。近日右近の馬場とやらんにて小弓の勝負せらるゝ由。それ屈竟の時節其の内時平公に對談し。諜しめし合せて思ふ儘に本望遂げさせ申すべし。ヲ、大慶大慶先づ時平公に相達し。悦ばせ申さん互に隱密おんみつ々々と。座敷を立ちしが。ヤ詞疑ふにてはなけれども。時平公への念の爲御誓言ごせいごんあれかしと云ひければ。尤の御念ごねんさりながら。日本の誓文に。申し下す神々の名を知らず教へ給へ。いや唐人の誓文に日本の神は。地詞しごも驗しるしもあるべからず。唐の誓文を立てられよと云ひければ。地斐文籍手を合せ。オンにゐつうゝ。すのこ君ちりゝあう。かますなふぐたかんちうらい。こほとこふんでれあほとこけべいる。ほこちよんともしひにや。ふやらのふやらのふうゝあう。フシてれんゝと言ひければ。地扱異國には珍しいてれんの神も在ますか。からせんしやうの御神と。一體分身いつたいふんじんなるべしと笑うて。立つや 三重みへの春霞はるかすみ。フシ菅丞相の。花園は。一條大路いちじょうだいろを出はなれて。フシ内野うちのに續く薄霞うすがすみ。梅の品々植ゑられて。スエテ盛りになれば都人。袖をつらね裳もすそを。染めて色めく有様に。江戸地紅梅殿こうばいどのと名

付しも。分きて一木の紅梅のフシ花に愛でての名なるべし。フシ今日は日影も。長閑のどけしと。御臺所の花見の酒宴さけうげん。小オクこおく。薰かほ片敷かたしく花庭はなばやし。女房達の出立ばえ。暮の御紋ごもんの梅鉢も。フシともに色香や染めぬらん。地幕まくらしほらせて御臺所。あれゝあの紅梅に。南へさしたる一枝の白梅は。彼の唐土たうとの好文木かうぶんぼの接穂つぎほなるが。一夜の中に彼の如く枝繁えぢり。花も一度に紅梅の。地焦あせるゝ中に白梅の雪と見る迄咲分けしは。何に似たるぞ譬たとへへて見や自らが見立みだてには。詞誰たがが新あらたけかけし。兩面の紅絹べにぬいの小袖こそでに白妙しろたへの。綿わたをふくむとフシいはまほし。何れもいかにと宣へば。地女房達にんなばうだちとどりに是は優やさしき御見立。又私は白齒しろはの娘むすめが口紅くちべにさして。笑めるが如しと云ふも有り社の朱あけの玉垣たまがきに。白木綿しろわたかけしと見立つれば。地お仲居なかつの下女したごが末座すえざにて。お辨當しるべの膳立ぜんたち仕乍しなら申し。私の見立には朱椀しゆわんの定器じやうきに上白じやうはくの飯い。盛つた様など見立も心一杯とフシ笑うて興に入り給ふ。地あれゝ梅の木の下うめに赤子あかこの泣く聲こゑ。何やら見ゆるが捨子すてこさうな。慈悲じを守る世の中に邪見よこしまの者は絶えぬかと。宣ふ所に十八九なる女房の。袖は鹿子かのこの金糸きんし入後いりご結びの染帶そめおびも。地内裡うちりにはやる中巾ちゆうはぎや中色ちゆうしき入れて地白染ぢしろぞめ。帽子ぼうしの額氣ひたひだか高くも。長地ながぢ花の木蔭はなに彷徨さまよひて手に持つ笠かさをかざしにてスエテ花見顔はなみかほでしをゝと。捨子すてこ見る目にこぼるゝは。歌梅うたうめの露つゆやら涙なみだやら。フシ行き

やらで獨り佇めば。地あれはあの子が母さうなどうするぞ見届けよと。下す簾や幔幕のうち鑽まりて在します。地女邊を見廻し泣子の側に走り寄り。いとしや母を尋ねしか乳欲しいかと抱きよせ。口に含めて我が身をも。共に根笹の苦楚。子持むしろと添乳して。フシ擦り賺すぞ哀なる。サア地人の來ぬ間に乳首放して寝ねしやと。そつと退けばわつと泣く又立寄つて乳を含め。すかし寝せても寝入らねば。オクリ懐に抱締め。ゆり上げ立て。歌寝んねこせ。寝んねこ寝んねこ。音せでおよれ犬の子。目だに覺めたら背にきつと背負うて。神様へ参らう。神様の土産にはでん。太鼓に笙の笛。お山人形に花織りきせて打ちきせて。きせて雉子のめん鳥。ほろりつとおといて。しよのしよのおいとしよの。詞ハアね。したさうな。今の間にも拾はれば。地そなたは果報。母は是が名残ぞと泣く。そつと下し置き。地立歸らんとせし所をそれ逃すなと幕の内より女房達。むら。と走り出でこれ徒者。詞捨てる程なら産まぬがよい。子が嫌ならば男にあふ時から其の。さし引きしたが善いわいの。跡先知らずきほひ口に孕んで。此處を何處と思やる菅丞相様のお花畑。私生兒捨つる所ぢやないぞ。地あた見苦しい持つて往にやと叱られて涙を流し。御咎めは理ながら可愛さに捨つる此の子なれば。

お慈悲深き菅丞相様木蔭を頼みに捨てさふらふ。詞我等は大内踏歌の節會の役人。十六夜と申す舞姫なるが。時平の大臣の御内秦の兼竹と申す。御隨身の侍と人知れず馴れ染め。地忍び逢ふ夜の數重なり身も重くなりけるを傍輩達の介抱にて身二つにはなりしかど。大内の局にても育て難く。地殊に夫兼竹の主君。時平の大臣世に情なき氣質なれば。洩聞えては夫の身。地如何なる崇り咎めもやと産まぬ先の氣遣より。産落しての心苦し餘り詮方なき儘に。地お慈悲深き菅丞相様哀れお目にも懸れかし。鳥類畜類迄も御憐み深ければ。よもや酷うはなされまじと。お情頼む此の捨子。親は浮世の名残の霜花は凋みて消ゆるとも。このみを拾ひ。助けさせたび給へとスエテ語りも敢ず泣きもたり。地御臺不便の御涙自らも子を持つて。いとしき思ひフシ知られたり。地殊に我が夫菅丞相様元父もなく母もなく。是善卿の御庭の梅の木蔭に天降り給ふと聞き。其の因縁もあるなれば心安かれ拾ひ取り。お乳を附けて育つべしさりながら。詞時平の大臣は常々我が夫の菅丞相を。妬みそねみて中惡し。其の家來の隠し子を拾ひしと聞えなば。禍の基必ず。沙汰しやるな。女房達も其の心得サア人目有り。はや歸りやと宣へば。地有難いお情あの子一人と申しながら。夫婦諸共三人の。命お助けなされし同然。詞生中お禮

申すも恐れがまし。お腰元衆お執成し頼み上げます。地かまへてく、何れも戀をなさるゝとも。孕まぬ様に諸事萬事。ひかへめに遊ぜせ。フシ先づお暇と立歸る。御臺所も御輕口子を儲けては母と云ふ。夫婦中よく幾人も子をむめか、よ梅が香に。縁あらば又逢ふべしと興じて。歸らせ。三重、給ひけり。地頃は正月十八日。右近の馬場に平張うたせ。コハリ客位の座には表文籍中官下官相隨へ。樂器を調へ旗鉾飾り立てさせ。日本の射藝さぞあらんと見物す。主位の座には菅丞相衣冠正しく。左右の兵衛近衛司袖をつらねてナホス並み居たり。本朝の弓はほこ長く半弓好む。地異國人の饗應しに適ふべからず。三々九の勝負にて楊弓を射らるべしと。矢落には錦の幔幕釣的に響きを着け。矢通りの日覆ひに。作り花を以て葺きたれば右近の馬場の松櫻。冴えかへる雪に花を見せ。矢取の翁が白髪迄。フシ若やぎてこそ見えにけれ。地射手の役は菅丞相の若君。菅秀才敦茂君十二歳。菊綴したる柏の装束浮紋の小袴踏みしだき。弓矢手挟み出で給ふ大人氣なくも時平の大臣。髭くひそらし肘を張り射つけてくれんす其の氣色。互に色代一禮終り一番に菅秀才作法進退しをらしく弓と矢番ひ。虹形に引絞り暫したもつて目當の狙ひ。御父を始め諸見物息を詰めたる其の内に。切つて放せば的の真中くわつしと當つて鈴の聲。當

りと答ふる矢取が聲。いやくどつと響むる聲。フシ暫く鳴も鎖らず。時平最初にけぢめを取られ大きに急ぎ。地あの的射割つて替へさせんと思ふ圖に引詰め。忘るゝ計り狙ひ詰め切つて放せば的を越し。棒に當つてどんと鳴り。フシさながらどんと見えにける。地是を勝負の始めにて童子二人左右に立ち。當りには金の采外るゝ矢には白紙の采。唐土人は糸竹を調べ。其の争は君子なる。小弓の勝負を。三重、挑みあふフシ三々九をば。地繰りかへし矢數數多に及べども菅秀才は空矢もなく。時平の大臣の當り矢は二本ならではなかりけり。時平も今は血眼になつてこれ悴。汝も我も残る矢は一本づつ。地今迄射たるを捨てにして。此の一本が今日の勝負サア射てまはせ。調承ると引つくはへ暫し狙ひて切つて放つに過またず。的のきり穴貫いてこそ立つたりけれ。時平は身を揉み牙を嚙んで腹を立て。地管込に射てくれんと。よつ引きかため狙ひすまして放つ矢が。地すつと外れて矢取の翁が小鬢先。烏帽子を懸けてぐつと立ち涙も朱の面抱へ。あ痛くと逃けて入る。唐土人都人菅秀才を響むる聲。時平の大臣を笑ふ聲。フシ邊も響くばかりなり。地表文籍座を立て。地大いなるかな菅丞相の徳たる事。孔孟の道を學んで白樂天が詩風をうつし。韓退之歐陽子が文にも恥ぢず。六藝一つも缺けざる事賞じても餘りあ

り。是ぞ唐の天子の契約の繪旨靜かに拜見せられよと。錦の袋より一つの箱を取出し。渡さんとする所を時平飛びかゝりひつたくり。詞これ菅丞相。御邊日本の臣下として異國の帝より。契約の繪旨とは心得がたし。披見して糺さんと。封捻切つてさつと開き一々讀終り。扱こそく是を見よ。唐の帝に一味し主従の證に。唐土の裝束を與へられ日本を傾け。此の時平を始め和國の忠臣を滅さんとの文章。地是ぞ後日の證據と懐中し。サア菅丞相が逆心顯れたり搦め取れ承ると。時平が郎等我もくと馳集る。詞裴文籍大聲上げ。ヤア愚なり時平。菅丞相は唐土へ隨ひ。我が國の味方なり。地しやぐはんども時平を討取り菅丞相を大將にて。内裡へ押寄せ日本の帝を生捕れと。中官下官鉾おつ取り兩陣戦ふふりにして。日本人も唐人も透間を見て菅丞相を。討たんくと狙ひ寄る元より自在を得給へば。若君を小脇に搦込み飛鳥の如くひらりと外し。エ、あさましや時平。某を無實の罪に沈めんとて。此の間異國人を語りひ。巧み置きたる謀とは鏡にかけて知られたり。地日月物は言はねども四季の時を違へず。草木花實を顯せば眞の道は明かなり。菅丞相が罪なきも汝等が悪逆も。天の鏡に照すべしとはつたと睨み付け給ふ。兩眼の恐ろしさ軍兵思はず威に押され。手さす者もあらざれば靜々と還御なる。フシ

御有様こそゆゝしけれ。地斯る所に俱利加羅太郎夜叉の荒れたる如くにて。宙を飛んで駈來り。日本人唐人の是非を云はせず。鐵の棒なぐり立てく微塵になれと打立つれば。地四方へばつと逃散つたりつゝと入つて裴文籍が。胴骨搦んでくるくと持つて廻り。大地にどつと打付け頭を踏まへて。詞ヤイ唐人め。我を誰とか思ふ唐にも今は珍しい。菅丞相の御内俱利加羅太郎今樊噲。エ、下鄙たさもしい唐人め。此の頃毎日時平が馳走心得ずと思ひしに。喰物に絆され。時平と一味して唐の帝の繪旨を作り。我が君を罪に沈めんとは巧みしな。最早唐へも戻さぬ。是から直に地冥土へうせうと。頭の鉢も割れて退け。砕けよ割れよと踏む程に。目鼻より血を流しフシうめき悲み泣き居たり。詞コリヤ豚の油揚に砂糖つけて喰うたと。此の旨さと喰ひくらべ。打殺すは易けれども後日の證據助くると。地ひつ搦んでゑいやつと十間ばかり投付けしは手玉を取るが如くなり。時平の大臣下知をなし。食事の爲に飼置きし熊猪綱を切り。関を作つて兩方より喚き叫んでかけたたりけり。俱利加羅にこく打笑ひ。詞ホ、本樊噲は虎と組む今樊噲には熊猪。縦へ熊でも狼でも我等が心は矮狗犬子。地こいこくと呼びかくる猪も熊も氣力に恐れ。鼻を鳴らし猛りをかき透間を窺ひ飛びかゝる。丁ど飛越えはつたと當て。ひらりと

乗つてはむんすと締め。劔の怒毛刃の牙。石を蹴割り木の根を穿ち組んづ解いつ 三重もみ合ひし。フシ流石の猛獸。地息切れて弱る所を引寄せく。尾筒を擱んで岩角に續けさま二三十。ばつたくくと打付ければ。骨は碎けて皮袋。小石を詰めたる如くにて。フシ微塵になつて失せてけり。地サア唐人様お料理出来賞。甌あれと。群がる中へ投込んでのつさくと立歸る。君は名に負ふ誠の道文學好む梅の花。郎等が武勇の道敵を見て逸ること。まつ先懸けて早咲梅いかなる悪鬼惡神も。やつて鎗梅とがり梅。眞甲碎く拳梅山梅野梅すばい梅手なみも腕の力をも。知る人ぞしる梅鉢の御紋の。屋形に歸りけり。

第二

地 蓼の蟲の董葵をさるは苦きに馴れて苦きを知らず。君として遠ざくべきは辯佞の臣なり。時を移さず時平の大臣裴文籍に繩をかけ。遽しく參内し。詞扱も菅丞相夢の魂唐土へ通ひしとは跡形もなき偽り。數年異國の大王に内通し。勿體なくも君を失ひ奉り。臣が如き忠ある者を滅し忝くも天照太神の御神孫受嗣がせ給ふ大日本を切取り。唐土の夷國に隨はんとの一味契約の手合せに。好文木に事寄せ。彼奴が來朝彼の内通の書翰を奪ひ。裴文籍を生捕り候。彼奴めを

早くほつ歸し。惡逆無道の朝敵菅丞相一家の奴輩。五刑の罪科に行はるべし。證據の一通是に候と御前にさし出す。地 君甚だ驚かせ給ひ。御簾高くあけさせ叡覽あれば。紛ふ方なき唐の帝の朱印。日本征伐の約諾なり。叡慮猶も疑はしく。詞不思議やな菅丞相は。天の穂日の命の嫡孫。累代學問を以て家業とし。地 朕七歳の時より物讀み習ひし博士なれば。師匠は親と尊み位は右大臣の右大將迄登せしに。何の恨不足にか異國に與し。我が國を傾けんは心得ず。詞 先づ其の裴文籍を拷問し。落ちずば死罪に行へと宣旨あり。時平の大臣南無三寶。巧みの讒言顯れては悪かりなんと。ハツア宣旨にては候へども。菅丞相が科をさし置き。彼を糺明せられんは異國の聞え事を好むに似たり。命を助け追歸し申さん誰かある。地 武官のともがら博多の地迄送り届け。もと舟に乗せて追歸せと御庭に飛んで下り。詞 裴文籍が繩引つちぎり手を取つて。装束の袖の陰本望遠けし萬の禮。地 口でそれとは云はねども金が物云ふ舌のなり。そつと渡せば唐人も通事いらすに聞きとるや。耳を數へて五百兩懐中におし隠し。フシはふく本土に歸りけり。かねて時平に心を合せし物かはの宰相定國。藤原の菅根の朝臣折こそよけれと詞を揃へ。詞 菅丞相が逆心の證據一つに限らず。己れが領分河内の國佐田の里に屋形を造り。諸神諸

佛を勸請し君を調伏仕る是一つ。洛中公家武家は申すに及ばず。町人土民の子供迄手習學問に事寄せ。懐け親み候故其の親々子に迷ひ。勅命は背くとも菅丞相が爲には。命を捨てんと申す程諸人を睥け候。上へ對しての無禮是二つ。今樊噲と申し強力の郎等。人を痛め苦しめ洛中を騒がし威を振ふ。名こそ多けれ樊噲を象る事。唐土を重んじて日本を侮る證。是をも忍ぶべくんば何れをか忍ばざらん。佞臣とも逆臣とも詞に及ばぬ菅丞相。助け置かるゝものならば國破れ民疲れ。御位を簞はれ給はん事目前に候と。兩三人が詞を巧み。引きそへ取りそへ數へ上けたる讒言に。君賢王とは申せども月日の光をむら雲の。覆ひ隠すが如くにて誠と聞召されたるスエテ。叡慮の程こそうたてけれ。かゝる惡逆不忠の臣と知らで過ぎしは朕が誤り。急ぎ菅丞相が官祿を止め。殿上の札を削つて筑紫太宰府へ流し遣すべし。妻子どもは別々に引放ち。五畿内を追拂へ。今樊噲とやらんが手足の筋を切つて嚴しく獄屋に繋ぎ置けと。以ての外の逆鱗にてフシ御簾さつとぞ下りたりける。地時平は二人に領合せ。サア仕濟ました。數年の本望我が胸の中はらりつと夜の明けた心地する。地先づ菅丞相を是へ召しよせ衣冠を剥ぎ。直に配所へ送るべし。其の間に兩人は大勢引具し彼が屋形を打ち毀ち。妻子どもを追拂ひ今樊噲を搦め捕ら

れよ。調尼が崎大物が浦迄は籠輿。それより舟路流人舟の沙汰せられよ。某が家來どもはあらざるか。追立の官人ども用意せよと群いて。地菅丞相の御方へは。急ぎ參内あるべしとフシしきつて使を立てにける。地時平が執權笠見の藏人景村。御隨身秦の兼竹車舎に控へしが。調宮中にて御家來と召され候は。何事の御用もやとぞ伺ひける。テ、菅丞相が日頃の惡逆顯れ。筑紫太宰府へ流罪仰付らるゝ。大物の浦の舟場まで。汝等兩人籠輿の警固せよ。地妻子眷屬は云ふに及ばずいかなる重縁たりとも。籠輿の傍人を拂ひ少しもく勞はるな。調扱又別して云ふ事ありと小聲になり。縦へ遠國に流されても。存らへあらば後日の仇。流人舟大物の湊を二三里も漕離るゝ時分。早舟にてほつ詰め兵庫和田の岬邊。海賊の體にて菅丞相を海へ切つて切流せば。地跡に何の氣遣ひなく寢覺も安き寶舟。時平が一生の年越し汝等頼むと云ひければ。笠見の藏人につこと笑ひ。調御心やすう思召せ。常々菅丞相己れが才智あるまゝに。天下の政道手に握り。君はあつてなし物鹽辛い目を見せんと。常々齒ぎしみ致せしに。時節來つて流人とは目出度しく。地兼竹と兩人心を合せ。沖中にて讀人知れず討つて捨てんに何事か候べき。何と兼竹さうでないかと云ひけれども。兼竹は十六夜と忍び寢に儲けし子を。菅丞相の御臺所に預け

置き浮名を包みし御情。御恩の程を忘れかね。スエテ差俯向いて居たりしが。調勅諛なれば流罪の警固は畏つて候へども。沖中にて密に討ち奉れとは。私の御計らひ天に口なしと申せども。地人の口則ち天の口なり。菅丞相は古今の學者。朝廷鹽梅の臣下なり。一旦の逆鱗にて流罪せらるゝとも。重ねて召還さるゝ時。詞舟路にて時平の大臣が討つて棄てさせたりと沙汰あつて。其の罪又其の身の上に来る時いかゞ償ひ給ふべき。尼が崎迄厳しく送つて舟に乗せ。藏人と某は。罷り歸り候はんと云ひもあへぬに藏人ヤア謂れざる人の差圖、御邊歸らば氣儘にせよ。此の藏人は御意に任せ。尼が崎まで屹度送つて舟に乗せ。又早舟にて追つかけ水底へ切つてほつばめん何の怖い事かある。但し御邊は怖いか。サ、サ口では人も切りよい物。地菅丞相には情を蒙り恩を受けし者多く。名残を惜み陸地舟路餘所ながら。見送る者多かるべし。是等がきよろりと見物して菅丞相を討たせ御邊を生けて置かうか。調どうぞ無事で歸つて見よとあざ笑へば時平の大臣。ア、く聲高に云はぬ事。兼竹めが氣の弱さで討つ事叶ふまじ。陸地の警固は兩人。討手は藏人一人心得せよと云ふ所に。地菅丞相參内のよし披露する。對面しては事むつかし役々の官人。油断あるなと云ひすて、フシ記録所に。隠れ入りにけり。地天運命をかゆる時

は博識の智者も其の身を知らず。御悼しや菅丞相。俄の召は何事と衣冠更め參内有る。待設けたる檢非違使大判事。此處彼等よりむらゝと走懸つて兩の御手を引つぱり。御冠を打落す。是はいかにと宣ふ所に。詞小槻の宿禰宣命をさし上げ。菅丞相勅勘によつて遠流せらる。配所は九州太宰府と高らかに讀上ぐれば。地はつとばかりの御涙スエテ貫く珠の如くなり。地我初冠の旦より天恩を重んじ。禮を以て上に仕へ仁を以て下を恵み。朝廷に私なしとは思へども。譬へば晝の螢にて身にある。非をば知りがたし。地君は天なり罪を天に得たれば祈るべき天もなし。詞文宣王は陽虎なりとて捕はれ。周の文王は姜里の獄屋に入り給ふ。地それは對する敵あり菅丞相には敵もなく。身に犯せる罪もなし皆讒言の無實の罪。あはれ法皇の御代ならば讒者の舌は爛るゝとも。御聞入れはあるまじき恨めしの時代やあさましの運命やと。御身を啣ち世を恨みスエテ盡きせぬ。今の御涙。地一首の御詠ぞ哀れなる流れゆく。筏は波に沈むとも。君節となりて止めよ。御序あるならば法皇へ斯く奏聞せよと。引かれ出でさせ給ふ所に京中の童ども。十二三を頭にて總角稚子二三百。手々に梅が枝小松を捧げ御門にわつと泣叫び。なう悲しやお師匠様。流しものになり給ふか。名残惜しやおいとしやと。泣叫ぶを官人ども追ひちらす

杖の下。打たれても叩かれても厭はず縋り歎きしは。さながら孤兒の親を慕ふが如くにて。フシ目もあてられぬ風情なり。菅相猶も御涙しほらしや汝等に一字教へし者ならねど。我が手ぶりを學ぶ故。師匠と慕ふかフシ優しさよ。縦へ我配所にて死するとも。魂は止まつて手習學問の守りの神となるべきぞ。我がなき跡にも我頼め。無實の難を遁るべし是ぞ我が記念ぞや。さらばく都人誠の道を神もうけ。若しも天の冥理に叶ひ又もや歸洛を松が枝に。曇る涙や梅の雨追立の武士に。ひつ立てられてしをくくと。しをれ出でさせ給ひける御有。様ぞ三重いたはしき。地笠見の藏人景村。御隨身秦の兼竹警護殿しく邊を拂ひ。はや大物の磯の波移し乗せ參らす。舟の屋形に蜘蛛手をゆひ。目板をうつつて釘付けにし息出しの物見より。僅かに洩る。月日の影耳に觸る。物とては。沖の鷗や磯千鳥夢現ともうつほ舟。今宵舟出と夕波に。フシ汐待ちしてぞ居たりける。地御臺はせめて此の世の名殘詞なりとも交さんと。悲しき中にも拾ひ子を肌を抱きしめ只一人。道行く人に道問へば。流人ははや二三里も行過ぎたりと聞くに付け。地目くれ涙にしほたる。尼が崎まで走り着き。尋ねん方も波打ち際に鎗長刀すさまじく。見るもいぶせき籠舟に。鳥獸の生捕か人間の身のそもやそも。あられう物か悼しやと。

駈寄り給へば兼竹藏人。調寄るまいく大事の囚人傍へ寄らば撲殺すと。杖ふりあけてぞ咎めける。ヲ、殺すとて厭はうか。地我が夫の菅丞相に何科あつて囚人とは申すぞ。君の爲には御師匠宮仕へに私なく。道を守りし菅丞相理非も糺さず流人となし。屋形へは菅根の朝臣定國などが踏込み。頼み切つたる郎等の今焚喰を搦め取り。數多の子供もちりぐに。年にも足らぬ菅秀才敦茂をも。地遠き東へ追遣られ親子夫婦が四鳥の別れ。武士よ武士も物の哀れを知るならば。一目逢はせてくれよとて。濱邊にどうど伏轉び聲も。惜まず泣き給ふ。恩を受けし兼竹見る目に堪へかね。何とがなと思へども主命といひ相役の。藏人が氣を兼竹がフシ心の。内ぞやるせなき。地藏人眼に角を立て。菅丞相の子供は大人童に限らず。皆別々に引分けよとの仰なるに。懐に抱きしはいかに嬰孩なればとて。ならぬことく。地いで受取らんと立寄れば。御臺わつと逃迷ひ慘や辛や情なや。是ばかりは許してたべもと自らが子にてはなく。地紅梅殿にて拾ひしが親たるもの。習ひにて。湯とも水とも分き難く。まだ胎内にあるうちさへ何ほう愛憐き故にこそ。地十月の苦み苦みならず。此の世あの世の境を見て産み落したる大事の子。榮耀にも慰みにも捨つる親のあるべきか。よくくの事あればこそ。所も多きに我が花園に捨

てたるは拾ひ上げ。育て、くれよと云はぬばかりの自らが。頼む木蔭に、フシ洩る雨の。振放して憂目を見せ本の親が聞及び。かひない者に拾はせしと。悔み悲む歎きといひ馴るれば我が子も同じこと。死ぬとも此の子を抱き乍ら。殺さば殺せ放さぬぞと。スエテ口説立てて泣き給へば。兼竹扱は十六夜と我が中の子なりしと。思へば不便さ懐しさ。御臺所の身に替へて御情の希さ。主命だに思はずば身を捨て、も勞はり。情の恩を報ぜん物を此の厚恩を送らぬは。畜類に劣りし我が身やな奉公の身のはかなやと。思へば胸も塞がりて。洩る、涙を包みかね、フシ目もくら闇となりけり。地情知らずの藏人。詞ム、拾ひ子と云うたらば宥免せうと思つてか。よい手な事いふまいと引つたくらんと縋り付く。地いや放さぬくと。抱きしめ給ふ御手を取つて捻ぢあぐる。兼竹も堪まりかね先づ暫くと漸々押分けて涙をうかめ。地某は時平の大臣の御隨身秦の兼竹と申す者。扱有難き御慈悲心。あの子を捨てし本の親何所にあると申すとも。あだ疎かにも存すまじ。殊に此の子ゆる御身を苦め給ふ體。實の親が見聞きなば死ぬるばかりの悲み。地御慈悲却つて仇なれば是非御渡しと勸むれば。詞ム、聞及ぶ兼竹が。御身ならば渡すべし其の代りには情を以て我が夫に。一目逢はせて給はれと手を合せ給へば。なうそれが叶ふ

程なれば兼竹に如才あるべきかと。詞に含む涙の體。御臺所は是迄の。頼みも力も落ちはて、人目も。わかす泣き給ふ心の。内ぞ哀れなる。地エなまぬるし其の餓鬼是へと藏人片手にひつ掴み。狗兒などを棄つる如く。草村にどうど投付くるは、フシ傍若無人といひつべし。地漸々時ぞと夕潮のさしくる波に舟子ども。はや纜をとくくと櫓権おし立て漕出す。地御臺所は聲を上げ。是なう暫し舟人なう。我をも共に流せよと呼べど。招けど叫べども。フシかひも渚の松の風かの。松浦佐用姫が石と成つたる憂き思ひ。石ともなれ木ともなれ一足も此處は動かじと。立つて見居て見伏轉びフシ悶え。焦れて。泣き給ふ。地兼竹様々介抱しこれ藏人。詞我々は陸地の警固ばかりなれば最早歸るが。御分は如何にと云ひければ。ヲ、勝手次第。此の藏人は大事の御用承る。地己れ舟が追つつかずば。二町や三町は遠矢にも射てくれんと。弓矢手挟みフシ磯邊に添うてぞ走りける。地十六夜もやる方なく御跡慕ひ來りしが。詞なう御臺様かおいとしやと縋り付いて泣く所を。詞ア、是々泣いて居る所でなし。藏人めが早舟にて追つかけ討ち奉る手筈なり。某は御臺様を海士の苦屋になりとも預け置き。立歸つて藏人を防ぎ止むべし。地汝も此の子を片付け。御臺所の御先途見よと指添渡せば。詞ヲ、心得た此の度御恩を地送ら

ねば。夫婦の者は人でなし屍を此處に曝す覺悟。ヲ、いふにや及ぶ命も身をも擲つと。御臺所を肩にかけ東西。へこそ 三重へ別れけれ。フシ月も出汐に。地十六夜は海上を見れば小船一艘。藏人は舳先に立ち機取がゑいゝ聲。しどろ拍子に波を切りフシ十町ばかりぞ漕出でたる。關南無三寶兼竹殿は何として遅きぞや。菅丞相を藏人めに闇々と討たせては。夫婦の者が義は立たず。地よしゝ千尋八千尋の底もかづきの尼が崎。かひなき女なればとて命を捨てば易かりなんと。抱帯を解いて我が子を背中に確かと締め付け。海士のたく繩ゆふ襷。小太刀を抜いて差かざし。磯打つ波に飛入つてフシ足立つ程と渡り行く。地海松布藻屑に纏はれて足は遅くて汐早く。次第に深き青海波腰より乳を打越して。肩も浸れば是迄と。太刀を口にひつくはへ逆手をうつてぞ泳ぎけるフシ頃は二月。地春風も肌には寒き海の面搔分け。乗りわけさらゝゝ。さつゝゝとフシ亂れて散るは。水玉水の泡。コハリ末も果なくそことなく漫々たる海原。さしも女の念力のやたけ心の撓みなく。勇みて泳ぐ白波は。フシ花を分行く如くにて。地藏人が早舟に三反計りぞ近付きける。地夫の兼竹立歸り遙かに見れば夕陽の。影は残つて紅の海を泳ぐは妻の十六夜。しかも子を負ひながら。ア、危し我も泳ぎおつ付かんと身拵へする所

25
に。藏人跡を振歸り。ヤア太刀を銜へて女の海を泳ぐは。地必定我に敵する奴。命知らずいで物見せんと弓と矢つがひ。暫し固めてかなぐりばなしかつきと放せば。過たず十六夜が咽吭より脊骨を縫うて。負うたる子の胸板かけてすつぱと立ち。うんとばかりにのり返り浮いつ。沈んづ二三度四五度。苦む聲や磯千鳥。磯の方を懐しけに我が夫なうをと。最期の詞血汐に染めて紅のフシ波に死骸ぞ揺られ行く。地兼竹今は堪られず恩の敵我が子の敵。目前妻の敵いつ迄助け置くべきと。海へざんぶと飛入つて一反計り泳ぎしが。地いやゝゝ弓矢を持ったれば。又射られては無念の上の恥辱なり。底を潜つて追付かんと水練は心得たり。波間にかつぱと沈んだり。藏人大聲あけ。地あれゝ船頭泳ぎだして陥つて死んだ狼狽者。女房に劣つたり。鶴の眞似する烏やと。地航たゝいて一度にどつとぞ笑ひける。地兼竹はやすゝと水底潜つて藏人が乗つたる舳先にぬつと顯れ出でければ。地ハア是へお出でなされたか。地眞平お助けゝとフシ身を縮めてぞ顛ひける。地すかさずひらりと乗り移り取つて押へて。地いかに主命なればとて悪事と知らば。諫めもせず情しらす道しらす。我が朝の聖人たる菅丞相を。害せんとせし其の天罰。妻子を殺せし其の報い。思ひ知れと眞逆さまにひつ攔んで。舟ばりに打付けゝゝ

とさし上げ。渦巻く波の真中へだんぶとこそは打込んだれ。地水を喰つてあぶくと浮上れば権を持つて。打込みく叩き込み。突流されて敢なくも、フシ底の水屑となりにけり。船頭も櫂取も一時の同類と。取つては投込み摺んでは打ち込み。舟差廻り十六夜が死骸は何所と尋ぬれども。はや引汐に。誘はれて其の行き方はなかりけり。鮫や鯨の餌食となつて屍は波に晒さば晒せ。出来したく古今獨歩の菅丞相。道ある君に奉る命は天地に奉る。八大龍王天龍八部感應納受の誓の舟。龍女が成佛汝にあり。風神水神力を合せ。菅丞相の在します、筑紫の浦へ寄せよく寄せ来る波に舵取り直し。櫓拍子踏んで跡は難波津梅の濱。梅に縁ある菅原の君を慕ひて行く舟にほう。く。ほう法ほけ経よむ驚やたゞ飛ぶ。鳥の如くなり。

第三

歌 筑紫宰府がヨヤヨヤヨ。巾着ならばハリノ。博多小梅を。腰づけにトヨエ。いよ腰づけに。博多小梅が引く牛も、フシをなご牛とて。けなものや。人を突かすば何に成る。角に小竹筒のフシ瓢箪ぶらり。地 八十一にて目の疎き父親乗せて孝行の。春の濱邊の野遊びに海の面も風ぎわたり。山は霞の暖かに。小オクリ日向へほこそ壽命の薬。永き日脚のべらくと。フシ己が得ものと。

牛の聲。地もう氣を晴し面白や。娘の小梅牛引きとめ。詞これ父様。左の方は箱崎の松原。春は一しほ青み立ちわつさりとしてそれはく好い景色。右の方には安樂寺の塔の軒端。櫻がやうく火を點せば。梅がちらく散る風情どうも云はれぬ景なれど。お目が疎うて花も柳もへんてつもないこと。地まそつと先で下しまし慰めませうと云ひければ。父白太夫機嫌よく。詞いやく此處で一杯したらば善うおりやろ。八十年住んだ在所。どこに石が幾つあるも覚えて居る。一三年目は疎けれど皆式盲目の様にまし。箱崎の若松も安樂寺の櫻も。梅が香もこれ。此の鼻で匂ひをかぐが慰みぢや。ム、く面白父様。鼻で聞いて樂むとはそれが本のはな見ぢやと。輕口いへばこりや出来した。鼻でかぐによつて花見。鼻でかぐ。はなで。くワツハ、ア、く、く、地笑ひこけて牛の背よりころく。とんと落つればハアおとまじや。どこも痛みはしませぬかと。腰を擦り膝を揉む。いやく氣遣ひめさるな何ともない。盃々吸筒と骨も堅ちの堅親父。流石岩木にあらざれば。足手弱くも立居して。所は濱邊の瓢箪酒。フシ幸ひ打身の薬なる。さいつさ、れつ親子の酒宴。白太夫微醉ながら涙ぐみ。詞扱々和御寮は奇特にも兄めと違うて孝行な。其の心を十分一あの兄の荒藤太に。煎じてなりとも吸はせたい。

胤腹たねはら一つの兄弟が誰に似てあの根性こんじやう。彼奴あいつが悪あくを苦くに病やんで。死しんだ母の命日に精進しやうじんでもする事ことか。立居たちゐに親を遣やり込め妹をせめこめ。大分の田地海山たいたいまでほで戯たがに仕失ししなひ。地ち皆人の物になし漸々やうやくと残つた隠居屋敷。二反たん足らず是をも早はやう譲れくと責めはたる。詞ことば第一だいいちに悲かなしいは此所の流人菅丞相りゅうじんかんさう。勿體なや悼いたはしや。殖生はこがの小屋の雨露あめつゆに打たれ。都よりの定めにて島中として一日に手一合の養やしなひ。地ち智者といひ高位といひかゝるお方を勞いたはるは。佛を供養くわうやうし神を祭まつる道理。こちらの隠居を清め折々の御座所。煎じ茶でも濃こう入れて慰なぐさめませんと用意よういすれば。詞ことば大悪人おほあくにんめが邪魔じゃまを入れ流人りゅうじん養やしなふ飯米はんまいを。博奕はくちの元手もとてに入れたがよい茶一煎ひとじ米一粒つぶでも與あへぬ。所の弊つひえの菅丞相。いつそ殺して退のけうとぬかす。地ち腹はらが立つやら悲かなしいやら二十若あひつくば彼奴あいつめを。踏殺ふみころしてくれうものと無念むねんなやら悪にくいやら。五色の涙なみだがこぼるゝぞや。地ち此の上の孝行かうかうに今日けふの内にも男おとこを持ち。隠居の家督いんごのけとくを嗣ついででたも。それでは兄の荒藤太あらいとうが我が儘ままが叶かはぬ。和御寮わごりやうが好このいた男おとこなら何者なにものでも構かまはぬ。木竹きちくの身みではあるまいし惚ほれた男おとこもある筈はず。地ちサア誰たれぢやく。地ち當世たうせいの娘むすめは十四五しよごから男欲おとこほしがりどこもかも。卯月半うづきはんばの時鳥ときどりッシな名乗なつて聞きかしゃといひければ。なに戯たがなことばかり尼にになつて父母ふぼの。跡あと弔なぐさふ心こころ入れ一代男いちだいおとこは持ちま

せぬ。さりながら兄様のあの氣きでは便たよりないもお道理。京の姉様あねさま呼び下し聲こゑを取つて。隠居いんごの世取よとになされませ。詞ことばいやく京へ上あした姉あねの小松こまつは。いかなる冥加みやがに叶かひしか大内おほうちへ御奉公ごほうこうに出いで。十六夜じゅうろくやといふ名なを下くだされ。内裡うちぢやうらふ上臈じやうらふになつたるよし。相應あうおうの縁付えんづきも都人みやこびとと結むすんで出世しゅっせこそさせたけれ。いかに生なれ故郷こきやうとて筑紫ちくしの果はへ呼び戻かへし。海上うみは三百里さんぱくり我が歳としは八十一はちじゅういち。地ち登のぼり詰つめたる老おきなの坂末さかすまは一里いちりか半里はんりか。待合まちあせうにも追付おっつけうにも今いまをも知らぬ命いのちにて。杖柱じやうちゆうとも一人ひとりのそなた一期いちき寡婦かふめで暮くさうとは。樂たのみもない浮世うきよの中なか兄あにめが常々じやうじやう娑婆しやば塞さいけと。ぬかすも道理道理死しんで退のけうと地ち牛うしの引綱ひきづなたぐり寄せ。首くびに纏まとうて締しめんとするをのう悲かなしや勿體なない。詞ことば今いまの間まにどうぞ才覺さいかくして。地ちいかに男おとこ持ちませう。死しんでばし下くださるなとスエテ綱奪づなひとり泣なきるたる。詞ことばム、男おとこをもつてくれるか。嬉うれしうおじやる忝かたじけない。悦よろこびにどれ盃さか。地ちそれでは酒さけも一倍いちばい旨うまいいと引受ひきうけく。是こゝ男おとこの吟味ぎんみ召まさるとも。身代みんだいも心こころも何なににも構かまはぬ。何をいふも愛憐あいれんさそなたの勝手かたてによい頃ころな。花はなを見立てて持つてたもとッシなとろく居眠いねり臥ふしにけり。寢顔ねがほを見るみるにもおいとしゃ子故こに苦勞くろうなさるゝな。男おとこ持つてお心が休やすめたいと思おもふ折せから。爰こゝへ見みゆるは香椎村かすいむらの新介しんけい氣きの輕かろい心こころよし。結むすぶの神かみのあてがひとはいへ何なにといひ掛かけう。女房にようばうに持

つて下されとは藪から棒の異な物なり。調ハアてんほのかは。地厚う出ましよと道中に。横にころりと道芝の。露も觸らば落ちぬべきフシ仕掛を見せて待ち居たり。地それとも知らず行き懸り。調ヤア白太夫の娘御か。ちとお神酒があがつたか退いて貰はう。但し跨けて通らうか。ハテ通りたくは抱き起して通つたがよいわいの。エ、小むつかしい。やあゑいと。地抱起す身に抱付いて。今日の内に男持たねば親孝行の道立たず。大切にたんといとしがろ。女夫ぢややいのと呟けば。いや此方に先がある疾からさうはいひもせで。まちつと是は遅蒔の麥島の轉寢の。其のあら麥に馴染めてお腹に小麥が芽作つた。こいつに心中立つる故外の女に逢ふ時は。ちやつとあちら向きやすと、フシなぶつて振切り通りけり。フシ同じ在所の。地勘作が忙がしげに来る袖を控へ。これ勘作殿たんとそもじに戀草の。根も葉も互に知つたどし。媒いらすの祝言。盃なしの口盃結ぶまいかとほのめけば。調忝いが近い頃。宰府の町へ入聲。恪氣深い女にてすは口が綻びて。吐す事皆横島の。宰府の町を追出されて此の有様。地されどもいまだ手はきれず底振うて締括り。埒明けて談合致さんとフシ是も振切り行過ぎる。地あの頭巾着て来るは醫者殿さうなど。すれ寄つてなうお醫者様。私が持病にて獨寢すれば氣が悪し。今からとんと夫婦にな

り晝は外の療治して。夜は女房のヒ加減お情あれと寄り添へば。調いや醫者でない身は外座女にすんど懲りた者。召使の飯炊の。疝膏藥に戯れしに吸付いて放れず。男があるともがられ練つてく練りつめ。錢膏藥で扱うて其の借錢のおどまりが。やうく此の頃いえ膏藥。地女子の傍はちり膏藥ねぶと腫物。さはつても下さるなとオクリ足早にこそ通りけれ。地御隨身兼竹は風に任する海士小舟。浦々島々經廻りて宰府の濱邊に着きけるが。爰ぞ菅丞相の配所いかにもして足をとめ。先途を見届け奉らんと舟さし捨つるみなれ棹。見馴れぬ筑紫の人心何といひよる便もなく。知邊も波の磯馴松フシ蔭に休らひ居たりけり。地白太夫が總領荒藤太濱傳ひに大聲上げ。妹々と呼びかけ。調汝は兄にも知らせず親父を方々連歩き。悪性根を吹き込むな。これ目を覺ましやと引起す。たつた今寢入りばな休ませまして下されと。縋りつくを突退け。胸ぐら攔んでこれ死損ひ。今の聲が耳へ入らぬか狸寢入り古いぞや。此の荒藤太が怖いか。それ程怖い子なせ持ちやつた。隠居屋敷の謔状はどうぢやいの。總領に譲らいで誰に譲る。火屋へ片足踏込んで來世へ持つて行かるゝか。地菅丞相とやら寒雀とやらいふ。流人めを勞はるとて表がへの腰張のどうで銀を持つてぢや。調是程身代しもつれて田地に放れ。家質にせがまれ

狼狽る子を見捨て。流人を養育む無得心親と云ふも腹が立つ。サア、地老耆隠居屋敷の屋財家財。釜の下の灰迄譲るといふ判をしや。いやと云ふとそれ切ると捻上げ。くせつちやうす白太夫齒嚙をして。詞ヤイ不孝者。日本の阿闍世太子とは己れが事。受けた譲りを忘れたか八町と云ふ田地。山ばかりも一里四方鹽焼場から網曳場。二年も立たぬに棒にふりせめても残つた隠居屋敷。京にも己れが妹あり目の前のあの小梅。何で世を渡らうぞ妹どもがどもこもせば。己れに薦はかづかせまいと末の末の隅々まで。地心を配る親の慈悲罰あたりめ業人め。殺さば殺せ隠居屋敷己れに指もさゝせぬ。エ、小梅早う男を持つてくれ。聲があらば此の腕を縛り上げて置かうもの。エ、無念なと泣叫ぶ。其の聲々が聞きともない腕を縛れば足はないか。臍骨強う生みつけたのは和御寮の業。鹽梅見よとどう引伏せ。踏まんとするを妹すがつて。兄様是は狂氣か親を踏む其の足がちぎれて落つるが合點か。地ヲ、身が臍がちぎれるかうぬが胸がちぎるゝか。是見をれとはつたと蹴倒し。肩も腰も砕けよとさんぐに踏付くる。父が覆ひ重なれば拳を上けてちやうど打ち。ふんづた、いつ泣きわめく、フシ極悪見る目も忌々し。地兼竹傍から堪へられず。笠引断り裾端折りつゝと入つて荒藤太が。兩腕捻上げ濱の眞砂地七八寸かつばと投げ込

み。親子を引立て後に圍ひ氣色こうでぞ立つたりける。藤太砂まびれになつておき上り。うぬは何處の養蟲なればかけも構はぬ。親子喧嘩に出しやばつて。此の足が戴きたいかと踏みにかゝる。蹠つかんで尻居にどうど突伏せ。かけも構はぬとは疎々しい色を見て枝を折り。脈を見て五臓をしる歌人は居ながら名所を知る。参りかゝつて一家の次第詞の下に推察した。御邊は隠居の跡を欲しが。親父は聲をほしが。娘は男を欲しが其の色を見て。當分ちよつと出来合の此の花聲。女房を土足にかけさせ舅を打擲させて聲がのめく見て居ようか小舅殿の初見參。引出物も持合せ舅の喧嘩を申し受け。舅のもので小舅もてなす賞翫せよと。地すはと抜いて打ちかくればわつとばかりに逃足の。砂に踏込み漂ふ所をすかさず背打砂煙。眼も眩み臍よるゝ。起きつ轉んづ歸りしはフシ心地よかりし有様なり。地親子は勇み悦びて。ア、何方なれば有難い危ない所を忝や。お侍の御一言直に私が殿御ぢや。ヲ、いかにも聲に取つたぞと踊り跳ねて取違へ。娘は親に抱付くやら親は娘を拜むやら。撫でつ擦つゝ煽ぎ立て。フシ悦びあふぞ道理なる。地我等は上方よるべもなき素浪人。當所は猶も無縁なりお情あれといひければ。ハテ聲といふから親子なり我は命もない者。こいつが姉も候へども海山隔てし京住居。

34 偏に御不便頼み入る。本名はともあれ白太夫が一字を譲り。白國と名乗られよ。若い時の袴肩
 衣手も通さぬ小袖もあり。悪人の兄めに侮らすな。年よつて気が忙しなし。サア〜歸つて今
 日の中親子夫婦の盃。侍の舅になるからは今日より我も侍と。牛引寄すれば抱きかへ乗せて
 夫婦が兩口取れば。牛も忽ち馬になり山の薯は饅になる。喧嘩の支人聲になり結ぶ。縁こそ
 三重 M 不思議なれ。地菅丞相を設けの爲。座敷の疊あさ緑。壁の腰張白太夫が掣取祝ふ老心。
 手づから庭の松竹梅の臺の土器小娘が。新鐵漿の口ふれて流石に掣は包めども。二世と契りし
 十六夜が藏人が矢先にかゝり。大物の浦波の水屑と消えて五十日。立つや立たずに掣入とは歎
 きの上の悲みの。そゝろに涙は浮めども。此の屋に足を留めてこそ菅丞相の御先途の御役にも
 と氣を取直し。ざんざんさ謠へば雁鳴出入の者が鞆袴。伸して張上げ濱松の音。三國一とぞ謠
 ひける。地や、盃も涙み流る、蠟燭の火のちらつく風に。誘ひて聞ゆる女の聲。妹々小梅々々
 と表の方に幽かなり。詞ハア、今のは健京の姉様の聲。やれ〜お懐しやと走り出で。ヤア本
 に姉様。何としてお下りお息災な顔見とお嬉しや。地父様も御無事にて明暮懐しが。いかう
 お色が悪う顔に寝れも見るがお氣合でも悪いか。親の内へ案内所か。ッ先づお通りと云ひけれ

35 ば。長の舟路を鹽風に揉れて何の色も善からうぞ。詞知らぬ人もあるさうな。地父様ちよつと
 呼出してたもやとて。スエテ悄悄々として立ち居たり。地此の聲に白太夫京の姉が下つたけな。嬉
 しいことが重ると蹠蹠ひ〜表に出で。顔に目をつき付けて。詞ヤレ小松かよい所へおじやつ
 たなう。脇も詰めたか今は名も替つて。出世の奉公めさる身が。軽々しい下り様。此の頃は打
 續いて夢に見る。二十日ばかり以前に其方が死んだと云ふ夢を見て。なんほう氣に懸つたを。
 夢は逆夢と心で祝ひ咒うたれど。起きても寝ても氣遣した。地先づ息災で嬉しい小梅にも掣を
 取り。今祝言の最中妹聲にも逢うてたも。なぜ浮々とも召されぬと言へども猶勇みなく。海山
 隔てし悲しさは母様の死目も見ず。親子は一世の父の顔。見たい〜の念力一つで下りしが。
 私が死んだとの夢を見てさへ左程に案じ給ふもの。誠に死んだと聞き給は、よもお命はあるま
 いと。悲しいは是一つとスエテさめ〜と泣きけるが。詞なうそれにつき道すがら。あさましい
 悲しい物を見たるぞや。年頃は二十餘りの女子の死骸。背中に産子を負ひながら。雁股の大矢
 にて咽吭を射通され。負うたる子迄貫かれ髪は藻屑に搔亂れ。體は波に漂ひて汐引く時は日に
 照され。汐さす時は浮み出で。浮きぬ沈みぬ揺られ来て今此の濱の岩波に。地打寄せられしあさ

まじさ如何なる人の死骸ぞと。見れば映る水鏡の。我が顔と死骸の顔と打並び。詞扱もよう似たること面差髪のかゝりより。小袖の模様に至る迄。地父上の御覽せば姉が死骸か悲しやと。縋り付いての御愁歎思ひやられて悲しさに。斯くは知らせ申すぞとよ。地妾は無事で居ると思ひ必ず歎かせ給ふなよ。詞あの死骸を引上げさせ。矢幹を抜いて子を引分け二筋の煙となし。地跡弔ひて經念佛の一遍も。回向なして給はらば其の死骸の成佛は。皆自らが功德にて。親兄弟のフシ利益ぞや。地お年寄られし父上に。久し振りにて娘の便り善い事も聞かせませぬ。許して下され父上とスエテ語りも。敢へず泣きければ。父も涙に曇り聲。詞どうやら其方の物語は。胸に應へて無上に悲しうなつてくる。望みの通り死骸も上げて弔はせう。妹が一世の祝言機嫌よう妹婿に逢うてたも。ア、鞞殿にも逢ひたいが此の顔見せんも恥かし。地先づ母様のお位牌が拜みたし死骸を早う上げてたべ。頼みますると泣きければ。ヲ、心得た出入の者。若い衆雇うて死骸を上げ。姉が望みを叶へてくれ持佛堂に火を點さう。つゞくり普請はしたれども。勝手は前に替らぬ草鞋ぬいで奥へおじや。位牌拜んで緩りつと祝うて雑煮もすわつてたも。小梅姉が下つて嬉しいか我も嬉しいくと。妹打連れ奥に入る今は此の世になき人とも。白髪頭を

打振つて フシ悦ぶ親ぞ哀れなる。地兼竹耳を敬て聞けば聞くほど死骸と云ふは。妻の十六夜やさしくも。此の屋の姉は餘所の歎きを憐むかと。差覗けば似る迄もなく十六夜なり。はつとばかりに表に出で近付き寄れば其の姿フシ搔消し。見えすなりにけり。地兼竹は茫然と扱は我が戀しと思ふ心に映る。幻か。さもあれ姉御の姿もなし是は如何なることやらんとスエテ暫し途方に暮れけるが。アツア詞思ひ當つたり京に居る姉娘とは十六夜がことなりけるか。地不思議の縁の廻りやに矢先にかゝりし親子の死骸。未來の苦患を遁れん爲親兄弟には形を見せ。正しく詞を交せしかや夫に何の恨あり。暫しの詞も交はさぬぞ。懐しの女房や。せめて稻妻石打火の影程なりとも見えてくれ。何所へ消えて失せけるぞ露と消えば草葉に残れ。霧や霞とならば暫しは空に棚曳けと。天に仰ぎ地に轉び草を搔分けく。やれ十六夜よ女房よと。塵芥の中までもフシ捜し泣くこそはかなけれ。地夫の歎きに亡魂も憧れ出でて。なう兼竹殿くと。元の座敷に顯る。ハア其處にかと走り入り縋らんとするに便りなく。有るか無きかに手は障らず。又伏沈むばかりなり。地敢なき聲にて目には見ゆれど形はなく。影の如くの我が身なれば構へて寄添ひ給ひそよ。夫の戀しさゆかしさは親兄弟に勝れども。我死したりと宣は父の歎きのい

とほしさ。暫しは隠れ参らせし幽霊の身なりとは親兄弟に隠してたべ。女の身の矢鏃にかゝり産子諸共死したるは。もちごもりも同じ事八寒の大海に浮き沈むうき思ひ。今にも死骸を見給は。水にほとびて色變り髪も飾りも抜散りあさましくもいぶせくも。戀しゆかしは引替へて愛想盡きん情なや。思へばく何事も昔ぞやと掻口説き泣きければ。なう愛想が盡きんとは曲もなし。詞うるさい形にならばなれ。今一度身體に魂立返り。夫よ妻よといふ事はなるまいか。地いやなう廿四時過ぎぬれば。守り本尊の壽命の札を削られて冥官の帳に載る故に。再び娑婆へ歸られず歎きの聲の奥へ聞え。父に斯と知られては親子の羈にからまれ影も形も消えうせて最早詞もかはされず。聲ばし立てて下さるな泣いてばし下さるなと。いへば夫も歎くまじ。聲立てまじと兩袖に。口を塞げば噎返り五體を。悶えあこがるゝ心ぞ。思ひやられたる。斯る所に在所の者死骸を上げて候と。戸板ながら昇入る。父も妹も出向ひ。扱痛はしや何處の誰かは知らねども。姉に似たる此の死骸身にしみんと悲しきは。他生の縁こそありつらめ。詞なう聲殿御不祥ながら。お侍の役あの矢を抜いて。母と子の體を分けてたべといへば。地侍の役と云ふ詞に心を恥ぢしめあつと答へてつゝと寄り。見れば我が子我が妻の。形はあれども

魂なれば物いはず。魂は傍に立添ひて物はいへども形なし。親兄弟はそは知らず知つたる者は我ばかり。知つて夫とも明かされず。こはそも如何なる因果ぞと。目もくれ心亂るれど。叶はぬ物と矢幹を掴み。引いてもくしやくつても潮に矢の根鏃付いて。皮肉纏うて抜けばこそ。骨に觸る苦みの魂にや徹へけん。捻ぢ廻せば身を悶え。捻ぢて引けば身を締め。身を顔はせば我が手もふるひ腕の力も弱りしが。歎きに眩む目を塞ぎ南無阿彌陀佛と引抜けば。親子の體さつと分れ。含みし潮疵の口より流るゝは。何に譬へん秋の田の井手を切つたる濁り水。涙は寛の如くにして。目も當てられず哀れなり。兼竹包むに包まれず。二人の死骸に抱付きわつと叫び伏しけるが大聲上げて。詞何を隠さんは我が子我が女房。もと某は時平の大臣の御隨身奏の兼竹と申す者。妻は大内舞姫なりしが。忍び寝に此の子を儲け障りあつて捨てけるを。菅丞相の御臺所拾ひ育て給ひたる。情の御恩の菅丞相を配所の道にて害すべしと。傍輩笠見の藏人本命を蒙つて。早舟にて追断くる。かひなくしくも此の女藏人を防がんと此の姿にて海に飛入り。餘さじ遣らじと追断くる。放逸無慚の藏人よつ引いてはたと射る。矢は此の矢體は是矢幹も體も目に見れども。地心は人目に見えざるか無慚や可愛や心の中。いか計り悲しかり

つらんと。涙に暮れて幽霊の貌を泣くく見上ぐれば、なう其の時の心とて身の悲しさは数ならず。共に射られし子のいとしさ。名残惜しきは取分けて。一人は父一人は夫せめて最期の念佛も。潮に咽び絶入つて海は三途の川波と。漂ふ體も斯くいふも。今は世になき十六夜ぞや。名残惜しの人々やとかつばと轉び泣きければ。扱は我が子か姉上かと抱付けば目に見えず。ばつと消えて後に有り。夫が縋れば爰に消え。父が寄れば彼處に立ち見えつ。隠れつ妄執のフシ雲に。隠れて失せければ。地聲も舅も妹も敢なき死骸にひしくと。抱付きく。聲を限りの叫び泣き物の。哀れを止めける。地白太夫足すりしてやれく可愛い事をした。詞答む花を先立て此の七十八の長生は何事ぞ。めでたい壽命あやかり者と人のいふも偽り。子を先立てて目出度いか。地聲目を見よとの長生か。死したる母は果報者。残りし父は業人神にも僻事佛にも恨あり。罪なき娘を殺さんより罪業深き此の親など取殺し給はぬと。前後不覺に取亂しフシ啣ち歎くぞ道理なる。地兼竹思ひにくれながら老人の氣を勇めん爲。わざと聲を荒らけ。詞エエ詮なき歎きかな。子を先立てしは御身ばかりか。十六夜ばかりが娘にて妹は子ならずや。殊に菅丞相御身代り同然の死に。何不足か候ふべき。見苦しき二つの死骸はや葬るこそ亡者の爲

地そこ退き給へと在所の人々語りひて。兎角しつらふ無常の門出夫婦一期の名残ぞと。共に手を添へ肩を添へ見返る我も見送る親も。互の心恥ぢらひて。目にはこぼさぬ胸の中一村雨と搔曇り降るは涙や。南無阿彌陀。發菩提心往生は安樂。寺へと三重送り行く地誰かは知らせ參らせけん遽しけに菅丞相。御來臨ましとやあく白太夫。詞汝が娘は我故命を取られしとや。時平の大臣一人の讒心より。數多の人を損ふ事恨みても餘りあり。我此の讒を報ぜん爲。天帝に祈誓し大威徳明王の法を修し時平を滅す大願あり。地汝が娘の敵をも共に取つて得さすべし。不便の者の有様やと。御袖を顔に押當て、御落。涙は堰き敢ず。地はつとばかりに白太夫頭を地に着け。詞冥加に餘る御弔ひ娘が命を捨てすんば。賤しき我等が此の耳に御直の御意を聞くべきか。ヤレ小梅歎くまい地悲しむまい是皆姉がお蔭ごと。フシそやろに涙を流せしが。暫しも爰は穢れたり何かな清めの御座所と。舟の碇の大綱をたぐり丸めて圓座となし。仰ぎ請じ奉る末代に至つても綱敷の天神とは此の御姿を寫すなり。地か、つし所に荒藤太。厄神の荒れたる如き面魂。草刈鎌を提げつかくと入つて。詞ヤア菅丞相のしくと落着いて居らるゝな。是親父。今日は妹に掣取りざんざが有ると聞き。祝うて此の手樽腥物には經節の代りに。摺

拳持參致せしに掣は見えず菅丞相。昨日の掣は間に合ひにて本の掣は丞相が。昨日の間に合ひめに善う背打ちに打たしめたなあ。地刀脇指賣喰うて譲りの刃物は鎌一本是を頼むでなければどもサア。丞相出てうせう。但し是で元首薙つてくれうかと。フシ鎌閃かしどよみける。地菅相驚く御色なく。愚人に向ふ刃もなく答ふべき詞もなし。一首の歌にて汝等が。太刀も矢先きも受けとむるを見よと。しづくと庭におり。枯木の下に立寄りて東風吹かば。匂おこせよ梅の花。主なしとて春なわすれそ。サア斬つて見よ討つて見よと宣ふ所を心得たりと。打つて懸れば不思議やな。コハリ俄に東風かぜ枯木に落ちて百千の枝々に。白梅一度にはらりと開け菅丞相の御姿何處に有りともナホス白雪に。埋むが如く引き包みフシそれとも。見えすなり給ふ。地藤太呆れて彼奴は魔法を行ふかと。持つたる鎌を投付ければ二つに折れてぞ散つたりける。地所詮恨みは父めにあり踏殺して埒明けんと飛びかゝる。詞妹の小梅わゝり付きエ、畜生め。喰付いてくれう物としがみ付くを片手に掴んで床柱にはたと打ちつくる。地其の際に白太夫むくむくと起上り。エ、口惜しや子は三人持つたれども。男子は汝一人子は生まいで敵を生んだか。とてもうぬに殺さるゝ唯は死ぬまい。一組みくんで死んでくれう。サアうせうと手を廣げて待

ちかゝる。地藤太かツらくと笑ひ。ヤアしやらな蚊の臍ほきく折つて棄てんすと。手ぐすね引いてぞ懸りける。地父を悲む十六夜が魂親の頭を守つて。百人力の孝行力不孝の眼に見えばこそ。小指の先と侮つて持つて来るを地ヤこれわいな。突いてくれれば。ヤまつかせ地どつこい割木の様な腕節掴んで引廻せばくるくく。小山の様な大男瘦骨親父が大腰に引懸られてたぢくく。エ、口惜しい年寄骨に負けうかと。汗を流して力瘤忍いくくくとぞッレ揉合ひける。地人界離れし。地勇猛力に天地の加護力加つて。何かは以て堪るべき雲雀の様なる腕先に。大の男が眞仰向に地響き打つて打倒され。胸板に乗懸るは大磐石にて壓さるゝ如く。フシ足を悶くぞ心地よき。地やれ小梅刀よ太刀よと喚けども。折節邊に刃物なく是はくくと騒ぐ所に。十六夜形を現して藤太が響むんづと取り。我が身は足を逆まに雲を踏んで引上ぐるはフシ天より釣つたる如くなり。地御隨身兼竹涙ながらに立歸り。斯くと見るより走り寄り勸善懲惡殺生なしと。太刀抜き放し飛上りく。づたくに切つて切り落せば。屍は散つて十六夜がありし姿はさらばとばかり消えんとして失せてけり。地梅花開けて菅丞相晏然として顯れ給ひ。地悔むな恨むな人々よ。忠孝は天地の味方。不孝不忠は日月の大敵なれば。罰利生外より

來る所もなし。我が身は爰に有明の月の都に現れて。誠の道を照すを見よと教へノノて還御なる草木心なけれども。三十一字に飛梅は誠の。道のしるしなり。

第四 御臺所道行

世の常にフシ世に言ひ觸れし。世の中の。浮世の憂さに彌増して。我が身一つの浮世とは。スエテ何と筆にも詞にも。思ひを述べん菅筵。菅原の御臺所。御子秀才敦茂君。父の歸洛をいつかはと。待つにつれなき初雁の。フシ故國の空の。遙けきもオクリ通へば。通ふ旅衣下部の賤がびそなき。賤機帯のかた結び。フシ人目を包む朝霞。東寺四塚鳥羽噺。淀の川瀬に。着き給ふ一とせ我が夫の。讃岐の任の下り舟錦の。纜蘭の楫。桂の棹の舟歌に。歌やらんやら目出たいな枝も。榮ゆるのんゑいゝ木の葉も。繁るは夢よ水の泡。フシオクリ淀みつ流れつ。行末に。何の頼みの有つて行く。此の身ならねど水無瀬川。命ぞせめて。寶寺鶴殿の。葦のほの見ゆる。フシ江口の里の假枕。かりの契りの憂きふしに。夕べは今朝のふるごとと。長柄の橋も名のみにて難波のうらみ數々は。筆にもいかで住吉の。岸打つ波の。己れのみ。フシ碎けて物を。思へとや末は蘆屋の。浦傳ひ海士の。漁火ちらくくと。星か螢か影うすく。月にぞ早く鳴尾崎。和

田の岬の車舟浮世をめぐる例かや。おりるる雲はおりもせで。それより落つる瀧の糸たが布引と名付けしや。フシ生田の川に。身を捨てし。髻髪乙女が名のしるし。問へば涙も我が袖に。もりの露草秋とたに吹き敢へぬ風に色かへて。ぬれて妻戀ふ小牡鹿のつゝ松原。フシ蔭暗く。暮れぬ先よりまづ暮れて昆陽のあしぶき。宿もなき。我をば呼ばで誰をかも。ア、呼子鳥覺束な。關吹き越ゆると詠じけん。ウタヒ須磨の鹽屋に心なき。海士も慰む月花の。鹽木に櫻折り残し月洩れとてや板庇。やさしふきさし。まばら成るらん名所々々を。書寫し。一目に見よとゑじまが崎。淡路島山島がくれ今も名残りのほのくくと。スエテ明石の浦の朝霧に。山もと遠き印南野や室は人目も繁しとて。播磨の國飾磨の浦よりお舟にめされて。豊前の小倉に着き給ふ是より陸路に打靡くオクリ。柳が浦の柳がみ我が黒。髪も。結びもせず。とかぬ櫛田の神ならば人の辛さも知らぬ火の。地筑紫の果に迷ひてもあればある世の命とていきの松原打過ぐる。宇佐八幡に世の憂さを告げて。守れと伏拜み。渚の濱の浦千鳥葦邊の。田鶴も子を思ひ妻を思は。我が夫子。我が友鶴と引きつれて共に千歳を松浦川。何思ひがは染川や朝倉山や木の丸殿。苺萱の關門司が關越えつ。渡りつ渡りつ越えつ。フシ此の日の本の。國の果唐土もはや程近しと。

聞けば心もくれかゝる入日の影を知邊にて戀しき人にあふ迄の。齡を玉手箱崎や太宰。府にこそ三重

天づくし

地抑筑前の國天拜山は九州一の高山。巖峙つて鋭き劔の如く。道めぐつて羊の腸に似たり。峯には老松枝聳えて朝一片の雲にむせび。谷には瀑川石流れて夜孤輪の月を碎く。空飛ぶ鳥木傳ふ猿の聲もなければ。まして樵夫柴人の行通ふべき道もなく。平地を離るゝこと遠く。天に近き心地なればフシ天拜山とは名付けたり。フシ御悼しや菅丞相。地今に於て歸洛の勅諭なかりしかば。御憤り骨髓に徹し。罪なき趣を梵天帝釋に訴へ。鳴雷の神となり。讒者時平を蹴殺さんと。一通の告文を書いて文杖に差挟み。湯水も更に斷食の天拜山の頂に。足を爪立て三七日夜眠らぬ兩眼魚の如く。天に向つて大音上げ。スエテ肝膽碎き御祈誓ある。それ。世界未だ開けざる始は。渾々沌々として鳥の卵の如く。重く濁れる物はつゞき塊りて國となる。軽く清める物は棚曳き上つてフシ天となり。欲界の六欲天。大毘沙門天持國天。增長廣目國土の惡鬼天の邪鬼。各二鬼をふみ隨へて。フシ四王天に立ち給ふ。兜率天には四十九院。色界の十八天。

梵衆。梵輔大梵天。少光清淨無量天。無雲天には雲もな。く。無煩天には煩なく。無熱天は熱からず。是天人の住家にて。善現善見色究竟。有宗の十六經部の十八。三十三天見行し給へ。千早振。神は自在の徳を現じ。雨ともなり風ともなり。春は八雲や八重霞。フシ柳は綠花は紅。皆初春の。神姿。青帝と號して東方の天に立ち給ふ。夏の神は炎帝とて。民を養ふ天の河を早苗の水に堰き下し。國を賑はし悦び祝ひ給ふ故に。祝融神とも申して。南方の天に立ち給ふ。秋は少昊西天の御神。冬の神は。北方の天に立ち給ひ。元英神と申すとかや。フシ雲井はるけき。高天が原にまします小オクリ真如。常住實相中道の御神體。天の御中主のフシ尊と申し。奉り。月よみ日よみ。風の神雪よ霞よ。扱は露霜又雨の神。フシ雷稻妻電。神明和光正直の。人を照して壽福諸願満足すと聞くからは。天心疑ふ所なし。コハリ偽り曲れる讒者時平がたゞ中に。神罰の鏡矢一筋放ち給へ。なかんづく鳴雷の神は是。伊弉諾尊八束の御劔を提げ。火の神軻遇突智を切り給ひし時。顯れ出でし雷の神。今菅丞相が無實の罪に沈んで恨みの念力。切々刺々として切るが如く。刺すが如し。抑。八種の雷といつば。頭にあるを大雷胸にあるを火の雷。腹にあるを土の雷背にあるを稚雷。隠にあるを黒雷。手にあるを山雷。足にあるを

野の雷。陰にあるを。フシ裂雷。我が命今日に限れり。五體髮膚此の儘に。八色の雷となつて。十六萬八千の眷屬を進退し。とゞろ／＼と九重の。八重立つ雲を踏みとゞろかし。フシ鳴渡り。讒者時平が水にも入れ。土をも潜れ頭の上に落ちかゝり。掴んで三段に引つさき棄て。我に憂かりし卿相雲客一々讐を報すべし。天傾かず地破れず。乾坤是誠あり。コハリ我が心偽りなし。感應誤り給ふな菅原の道眞。謹み。謹み敬つて申すと。三重天に響けと。ハ奏せらる。フシ梵天帝釋納受にや。異香薫じて白雲一村渦巻下ると見えけるが。願文を巻取つて九天高くぞ上りける。扱は大願成就と御悦の其の中にも。年月配所の御物思ひ三七日の斷食に。心身疲れ果て給ひ結迦趺座して眠るが如く。延喜三年二月二十五日。御年五十九歳にて左遷の雪と消え給ふ悼はしかりける次第なり。地白太夫親子兼竹御臺若君案内し。天拜山に攀登り巖高く見上げ給へば。坐せるが如くましませども早御色も面變り。生とも死とも見え分かず悼はしの我が夫や。懐しの父上やと登らんとすれど便りなく。二十餘丈鐵を削つて立たてる如くにて。神變ならでは登り得ず。せめて故郷の妻子かと詞を交させ給はぬかと。スエテ人目も分かず泣き給へば。兼竹夫婦白太夫我が身の御恩は申すに及ばず。君は世界の寶なり。今一度御歸洛の時節をも待ち

給はず。鳥も通はぬ岩の上に。食事を絶つて敢なく終り給ふかや。天下の鏡曇るかと五人の人々狂氣の如く。巖を叩き岩根を巡り。息をばかりに泣き叫ぶ。フシ道理。とこそ聞えけれ。地斯る所に俱利加羅太郎今樊噲。獄屋を通れ夜晝分かす走り付き。見るより早くこは何事ぞあさましや。身の筋を抜かれ獄屋の憂目を凌ぎしも無駄事か。エ、言ひがひなき御有様。いで抱下し奉つて都に歸り直奏申し。叶はぬ時は御供して唐土に渡り。唐の軍兵を以て攻寄せ。時平はおろか延喜の帝にも泡吹かせんと。登らんとすれども手がかりなく苦を踏めば足迂り。葛を掴めば根も切る。詮方涙に樊噲も。エ、情なき我が君やとスエテどうど。伏してぞ泣き居たる。地荒人神の靈なれば御目を開き立ち上り。珍しや方々。我罪なき趣を奏するは易けれども。君の誤りを臣として糺すに似たり。詞されども一念雷となつて讒者の恨を散すべし。其の後秀才敦茂儒業をついで菅家を興せ。地我都を出でし時京童に契約あり。天が下の稚き者。手習學問詩歌の道の守り神。身の憂き。フシ數に較べて。我を信する輩は無實の難は遁るべし。さらばくと宣ふ御息。赤白二つの虹の棧橋オクリ雲にハ飛び。フシ入りうせ給ふ。地人々は有難さ。名残惜しさも彌増に空を仰ぎてわつとばかりスエテ泣くより外の事ぞなき。詞俱利加羅太郎涙を啜つ

て。雷となつて時平めを掴み殺さんとは心地よし。今樊噲ともいはれし身が雲の上にて。主君のどろ／＼なり給ふを。下人の身にて桑原いうても居られまじ。地我も一念眷屬の雷となつて。讒者の一類掴み殺し蹴殺さんと突立つて。岩角に頭を振つてこう／＼くわん／＼ひつし／＼と打付くれば。脳も鉢も打碎けかつぱと伏して死しけるが。コハリ俄に山鳴り谷叫び車輪の様なる光り物。胸の中より舞出でて。都の。空へぞ飛去りける。地歎きながらも若君も斯る奇特を見るからは。猶御遺誠違へまじ。文學の道勵まんと安樂寺に標を立て。人々伴ひ都路に思ひ、立ちけり三重 謠サシ女 秋に後る、老葉は。風なきに散り易く。愁を弔ふ涙は。問はざる袖に先づ脆く。ナホス 鉢タ、キ 落ちて流れて三瀬川。沈み果てにし泡沫のあはれ女の果敢なきは。今生に響を晴らさねば。死して五障の雲厚く我は無明に。フシ迷ひながら。地叩く扉は法性坊の軒端に白き月影も。我が名も十六夜と名乗るとも人知らじ。只物申さんとぞ訪る。僧正されば此の法性坊の僧正は延暦寺の座主。菅相承の御師範にて知行尊く在せしが。西坂本の別業に九識の窓の前。十乗の床のほとり瑜伽の法水をたへて。三密の月はさせども軒の戸を敲くべき人も覺えぬに。松吹く風の響かと。フシ戸を開き見給へば。地女いや四方に風なき浦波の。音にも聞き給

ふらん。菅相承の御恩を受け御身代りにたつか弓。矢さきに命を失ひし。十六夜が魂魄是迄顯れフシ來りたり。地恨みは時平に荒人神の君 雷となる神の。我も眷屬にならんとは思へども。生を變へても女の身は天に到ること叶はず。地變成男子の法力にて。男の現果をステ得させてたばせ給へとよ。僧正詞あら怪しからずや。變成男子は成佛の法。雷も魔障なり魔道に導く法力なし。地はや立ち去れと夕紅の。女緋色の衣引きとめて。僧正絶れば拂ふ露の間も。女語るな聞かじ。僧正忌はしと。二人あひの妻戸をはたと瑣し無人聲とて音もせず。女フシ女は恨みの顔面にて。あらうたての御僧や。若作障碍即有一佛魔境と説けり。雷も魔障も何佛法の外ならん。佛法の力にて雷になりがたくば。大天狗となるべきがそれも女は叶はぬか。地恨めしやつれなき聖に咎められつ。おのれ果敢なき祈り加持して物怪退くるは世の常に我が。苦しみは大比叡や横川の杉の梢に栖みて。御法の敵と身はなりて。今此の聖も同じ恨みにコハリ苦患を見せんと思ひ込む。思ひの外に怨念積みて魔道に沈まん苦しきと。云ふかと思へば更行く横川。いふかと思へば更行く横川の。ナホス 杉の嵐に立ち。紛てぞれ失せにける。丞相地猶深更の丑の時又も扉に音するは。窓うつ雨の音にもあらず以前の女性の來るよと。空寝入りして聞き捨つれば。顔

に敲く月下の門。僧正山影門に入つて押せども出でず。丞相月光地に敷いて拂へども又生ず。二人横の板戸を押開けば過ぎにし如月や。末の五日に筑紫宰府にて世を早う去り給ひし。スエテ菅承相にて在します。僧正地怪しながらも此方へと請じ入れ奉り。深夜の御光臨何事にかはと有りければ。丞相菅相答へて宣はく。君暗からずと申せども濁れる世に生れて。無實の讒言。フシ力なし。地讒臣の讒を報ぜん爲。鳴る雷となり内裡に飛入り。我に憂かりし奴原を蹴殺すべし。其の時僧正召の勅使立つとも構へて参内候な。此のこと頼み申すなり。僧正詞御頼み切なれば假令宣旨下るとも。一二度は参り候まじ。丞相地いやく。宣旨度々重なるとも。必ず参内在ますな。僧正詞叶はぬことな宣ひそ。如何なる勅使なりとも二度迄は参るまじ。地勅使三度に及ば。普天の下牽土の内。王土にあらずといふ事なし。フシ違背はあらじとありければ。丞相菅承相は怒の氣色折節本尊に。柘榴を手向け置きたるを押取り口に含んではらくと嚙碎き。妻戸にはつと吐懸け給へば柘榴忽ち火焰となつて。フシ三尺計り燃上る。僧正コハリ僧正騒がす洒水の印を結んで鐵字の明を修し給へば。フシ火焰は。其の儘消えてゆり。丞相恨みは世をも人をも思ひ思はず。もとは師弟の契を捨て。現世の望み空しくば未來の引導頼みがたの、かりそめながら。恐れて

七尺去るは師の影。女去らで其の儘有明の。十六夜爰にと。フシ又現れて。あら物々しいかに僧正。詞今更何の觀念をかなせる。地我は師弟にあらざれば。何の好みかあら恨めしや。生けて此の世に置かばこそ。内裡に召さるゝ恐れあれ。我が境界の友鳥。同じ間路に來れや來れ我が玉葛くるくく。くくるくくしき亂れ髪ハツミ風に。吹き散る菅原や。丞相菅承相の忿怒の相好。さも凄じき眼は日月。梅花は輝く星の三光。僧正僧正護法の數珠の水晶降魔の利劍。丞相此處にひらめき。女彼處にちらめきばつと消えては。三人地ばつと現れと。く。と。く。く。なるは川音瀧のこゑ。東風ふく風に東を見れば山王權現。女南に八幡石清水。丞相西に松の尾。僧正北には加茂の。三人山風神風さつ。く。さらく。さら。く。さらく。さつと吹き拂はれて。ナホス晴るゝ横雲。フシ八聲の鳥に。恨みはつきじといふ聲ばかり。影も姿も夏の夜や残るは法の燈火に。空ほのくくと明けにける末世の今に至る迄。比叡山に止まつて法性坊の焼妻戸。佛法不思議の大行力神は自在の神通力。扱こそ柘榴天神と仰ぐも。法の奇特なる。

第五

地頃は延喜五年六月二十五日北野の方より。黒雲起り内裡の上に覆ふと等しく。電光天地に霹

震して世界も滅する大雷鳴。丑の刻より巳の刻迄刹那も止まず鳴りはためく。帝を始め百官男女の別ちなく此處に轉び彼處にころび。耳を塞げば電光眼に燒鐵さす如く。聲を力に桑原々々雲雷鼓撃電念彼觀音。臍を隠せと泣きわめく。フシ前代未聞の天變なり。地天文の博士三善の清行召さるれば。地大床に易をひらき乾は元にして亨る。貞に利ありと繰出せばびつしやり。詞乾兌離震巽子丑寅と繰出せば。地ごろくく。そりやこそと耳塞ぎ。聲もふるひ手もふるひ震ふは震の卦。雷百里を動かすと八卦やらもつけやら。性根のあるはなかりけり。詞大膽不敵の時平の大臣少しも騒がぬ風情にて。こりや狼狽へたか清行。鳴らぬ物が鳴るにこそ陰陽相迫つて雷も鳴るが役。博士は是を占ふ役胸を据ゑて考へよと。地睨めつくる眼の光いなびかりより恐ろしく。心を鎮め一々に占ひ考へて横手を打ち。詞今日の雷は乾の卦に當つて候。九五は帝上九は師匠の位。當時帝の御師匠は菅丞相。上に立つべき天子の師匠を流罪せられ。配所にてうせ給ひし其の靈魂雷となつて。祟りをなし給ふ所疑なし。是を宥められんには又菅丞相の御師匠。法性坊の僧正を召して加持せられ候は。如何に憤り深き菅丞相の靈魂なりとも。師匠に背き給ふべきか早疾々とぞ奏しける。地君甚だ驚かせ給ひ。右中辨希世宣旨を蒙り急ぎ

勅使を立てらるる。雷は猶鳴りやます洛中洛外。四方の空は晴れ渡り只内裡の上ばかり。フシ雷動するこそ不思議なれ。地程なく希世立歸り。詞法性坊に宣旨の趣相述べ候といへども。存する旨あるによつて今日の参内は。御免あれとの勅答なりと。云ひも敢ぬに電光希世の上にはためきかゝり。五體燻り死し給ふ時平彌々慌て騒ぎ。詞エ、其の法師めぞんざい者。御免と云ふもことによる御祈禱料の寺領のと。下さるゝは何の爲。重ねて屹度召さるべしと。地大納言清行に言含め。フシ又こそ勅使立ちにけれ。地時は數刻に及べども空晴れねば日影も知らず。一日一夜の雷電に卿相雲客氣を失ひ。法力頼む計りにて法性坊の参内を。今やくと待つ所に大納言馳歸り。詞勅説の通りいか様に申しても。風雨の中に老僧の身是非に参内御免あれと。地固く辭退に候と申す詞も終らぬに。電光ひらめき落ちかゝつて。あつと計りの一聲に。フシ焦れ死するぞ不思議なる。地時平怒つて齒嚙をなし菅根はなきか。定國々々と呼びければ。物の隅より兩人ふるひく立出づる。詞法性坊の僧正二度の勅使を背く條。奇怪千萬此の上は兩人召の勅使として。随分賺して同道あれ。若し三度の宣旨を背きなば。出家といはずな繩を懸けて引立つべし。地はや急がれよ早うくとせり立つれば。こはくながら兩人は。フシ西坂本

へぞ急ぎける。地博士も我が身空恐ろしく料紙四枚の札に認め。會陀摩尼。須陀光。阿伽多。利帝魯と書きしるし。是ぞ祕密の御守御座の四方に押し給は。雷の恐れ候はずなほく私宅にて。丹精こらし申さんと捨て罷立ちければ。上藤達殿上人悦びいた。き是さへあれば。法性坊にも及ばすと御殿の匠方に貼付ければ。以前に増さる雷神。フシ詮方なうぞ見えにける。地定國菅根勢ひか。つて馳歸り。法性坊只今是へと云ひければ。上から下まで力を得オクリ法座をへ構へて待ち給ふ。フシかくて僧正。地辭退申せば勅に背く參内すれば。菅丞相師弟の情知らぬに似たり。二つの境を佛意になけ打ち。紫宸殿に坐し給ひ。コハリ數珠さらりと押し揉んで眞讀の普門品。千手の陀羅尼を繰掛けく祈らる。雷雲間に顯れ見えて御殿も揺ぐ大音にて。あらく愚かの僧正や。我を見放し給ふ上は。僧正とても恐るまじ時平が虎口の讒言にて。無實の罪に沈んだる。怒は更に晴れやらす。時平を取つて掴み裂き定國菅根を蹴殺し。我に憂かりし奴原に報いを思ひ知らすべし。僧正の身の上は除けんくと思へども。眷屬の雷神多ければ過ちして恨み給ふなど。眷屬引きつれ雲を巻き。フシ内裡の四方を鳴巡る。詞いや僧正が命を取らるるとも。祈り鎮めて置くべきかと。猶も揉みかけ祈らる。實にも師弟の禮儀とて。地僧正の在

する座は恐れて鳴らぬぞ不思議なる。紫宸殿に僧正あれば弘徽殿にかみなりする。弘徽殿に移り給へば清涼殿にいかづち鳴る。清涼殿に移り給へば梨壺梅壺。夜の御殿晝の御座行違ひ行巡り。震動雷電稻光法力我劣らじと。祈るは僧正鳴るは雷揉合く。鳴つつ祈つつ揉合ひ給へば。地流石の時平怖ぢわなき。肝魂も身に添はず命限りと逃げまはる。定國菅根は腰抜けてよろりくくと這ひまはるオクリ恐ろし。なんども愚なり。地二人は逃ぐる力も盡き東西の階隱に。身を屈め居たりしが二つの雷。孫庇に落ちか。り二人が上にどうど落ち。すんくに掴み裂きフシ雲中に駈り入りにけり。地時平は我が身一人に迫り詰めたる報いの業。許させ給へ菅丞相と天を禮し拜しても。何處に遁れん様はなし俄に土にも入らればこそ。なう恐ろしや如何せんと。呆れ慄き立つたりしが。詞エ、思ひ付いたり。あの桐壺の井のとは神泉苑迄堀抜きに。水の通ふ抜道あり。是を潜つて土の底に三日も五日もあるならば。如何なる雷も敵ふまじ。地命の親の井戸様やと井筒に手を掛け飛入つて。こぞ一世の大事ごと水筋に任せ。土を潜つて逃げて行く雲は是に従つて。虚空に布を引く如く。七八町も追駈けしと見ゆれば稻妻火焰を巻き。鳴動頼りに落ちか。り大地を二つに蹴破つて。難なく時平をひつ掴み雲を凌ぎて

三重へ上りける。フシ時平は宙にて。地手足を張り呻き苦み手を合せ。泣き悲む所を兩足擱んで。二つにさつと擱み裂き雲井遙に入り給ひ。終に還着於本人の敵は亡び失せにけり。地黒雲さつと晴れ渡り日輪光り明けき。地帝は菅家の一家を召され御悦ある所に。雷神形を顯して昨日は北關に。悲しみを蒙る士となり。今日は西都に恥を清むる屍となる。生きての恨み死しての悦び共に我をいかん今須く。皇基を守るべしとの給ふ息は金色に。南無天滿大自在天神と。九字の文字に顯れ異香花降り光りを放ち。音樂天に響きけり。ヨハリ雲は錦の帳と覆ひ。文字は則ち東帶の。御正體尊くも老松。飛梅。色香を添へ。三重生けるが如くに。拜まる、フシ右と左に。地眷屬の雷火變じて燈明の。影も曇らぬ神と君。正一位太政大臣の。贈位贈官目出たくも北野に一夜の千本松。一本に千年づつ數へ重ねて萬々歳。威を増し智を増し齡を増し。地壽福ますます太平國。御子孫繁昌家繁昌五穀豐饒の國民と守る。神こそめでたけれ。

七行大字直之正本とあざむく類板世に有といへども又うつしなる故節章の長短墨譜の甲

乙上下あやまり甚すくなからず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直之正本にあらず故に今此の本は山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫て直の正本のしるしを糺せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左の如し

竹本 筑後 掾 竹本 教博

大阪高麗町壹丁目

正本屋 山本九兵衛版
山本九右衛門版

胎内拮

(七行八十丁本)

近松門左衛門作

序詞 子の燕居せるとき申々如たり天々如たりと云々。明主は默座して徳を八極に布く事。日月の求めずして光を施し。一陽來つて萬木の色香を含む鎌倉山。右幕下頼朝文武に富み。居ながら四海を見そなはずオロシ賞罰こそは。目出たけれ。御舍弟九郎判官義經。平家の大将宗盛を生捕り下向ありしを。梶原平三讒言を構へ。義經罪なうして腰越に追返され。生捕ばかり鎌倉にひかれ元暦元年五月下旬。源二位御對顔あるべしとて。二棟の殿に出で給へば昵近外様の諸大名。侍所判官代我もく〜と出仕ある。生捕ながらも内大臣禮儀を紊るべからずと。櫻網の深縁。フシ茵を對座に設けらる。昨日は平家の棟梁十善天子の御外戚。蓮府槐門の位に登り。上見ぬ驚と時めきしも今日は胡國の囚と。汐風に瘦せ黒み淨衣の上に立烏帽子。雜色二人兩手をひつ張り茵にするまるすれば。痛はしや宗盛公頼朝卿を一目見て。詞ハア是は憚千萬と。地茵をすべり額を疊につけらる。大名小名指ざしして。未練やないかに詔ひ給ひても。

命助かる身の上かはあの大将の心故。平家一時に亡びしと。目引き袖引き笑はる。ッシ恥がましくこそ聞えけれ。地二位殿御説ありけるは。詞抑去んぬる平治の亂頼朝若年の昔。故入道相國に助けられしかばゆめく私の宿意候はず。されども朝敵となり給へば。急ぎ追討致せとの院宣背きがたく。軍兵をさし向け平族を塵にし。貴公を是迄迎へしも天理の然らしむる所なり。地然るに八島院宣の請文に。頼朝昔の厚恩を忘れ。浪瀛の身を以て猥に蜂起の亂を致すなり。口に任せ筆に任せ惡口せられしは。頼朝にいかなる非義か候承らんと宣へば。詞宗盛恐入りたる氣色にてふるひく。勿體なや何しに某源君を惡口致すべき。それは皆叔父平大納言時忠が所業。然のみならず院宣の御使。御坪の召次花形が額に燒金あて。神璽寶劍内侍所を携へ。地鬼界高麗天竺震旦へ渡り。日本の神寶を異國の寶と爲さんなどと申せしを。宗盛抑へ止め候。大惡逆といひ源氏の敵は時忠一人。なれども九郎判官殿彼の娘に絆され。婿舅の縁に因つて罪を許され我等は却つて斯様の體。遂には首を召さるべき生中大將と生れし因果。一門の科を宗盛が一身に引受けしは迷惑至極。御料簡仰ぎ奉ると。卑怯無益の言譯は。ッシ見苦しくもまた痛はしし。地頼朝大きに驚かせ給ひ。九郎が驕我が儘千萬殊に平大納言時忠の婚に成りた

るとは。頼朝に敵する兆顯れ逆心に紛れなし。大軍をさし向けば宇治瀬田の橋を引き、帝都の騷穩なるまじ。詞二階堂の土佐坊昌俊物詣の體にて上洛し。すかし寄せ討つて來れ。地猶豫するな土佐坊と物騒がぬ御大將。常に變つてせき給へば土佐坊も辭し難く。御請を申し罷立ちフシ直に京都に打立ちけり。地伺候の面々呶き合ひ。さもしや宗盛我が命。助からんと追從梶原が讒言の。上塗したる壁訴訟とフシ憎まぬ人こそなかりけれ。地宗盛なほも輕薄顔。嚴しき源氏の御政道天下治るも道理なれ。某が兄小松の重盛仁義だてして平家の政道なまぬるく。我々斯様に亡び果て今生の望候はず。御慈悲に一命を助けられれば警切り出家して。菩提に入りたう候と。手を合せ涙ぐみスエテ思ひ入りてぞ見えにける。詞頼朝をかしく思召せども。近頃殊勝に候。出家とは三界火宅の宿を出で。寂光無上の安樂國土に到る故。家を出づると書き候。只今此の娑婆の家を出で。是にて出家し給はんやと宣へば。地宗盛悦び有難しく。命だに助からば假令俗の剃刀でも。何方にても頼み入ると烏帽子かなぐり合掌し。戒文稱へて待ち給ふ比企藤四郎能員。豫て仰を蒙り直垂の露括り上げて控へしを。それく頭を拂へと御説の中よりつと寄り。太刀振上ぐると見えけるがフシ首は前へぞ落ちにける。頼朝重ねていかに方々。

詞かゝる不覺人覺悟してはよも討たれじ。さすが平家の大將軍最期取亂し。臆病の悪名末代に止めんこと。頼朝が本意にあらすさてこそ能員に内々申含めしなり。地只今是にて誅せし事必ず隱密たるべし。宗盛は道中にて九郎が討つて棄てたりと。面々家の記録にも記し置かれよ。侍も大將も弓矢取る身は互の恥。異國の猛き虎だにも山にありては人を喰ひ。鎖に繋ぎとられては尾を振つて餌を求むとかや。猛將勇士も運は心の器物。器に随つて變るは心のならひなりかまへて嘲るべからずと近きを慎み遠き世を。慮ある源の流も長き白旗に靡く。御代こそ三重久方のフシ雲井の都。西東。北に北野の神社。貴賤男女の伊達參りオクリ袖の紅葉に打紛れ烏帽子堅しと編笠や。フシ直垂ぬぎて染羽織。地九郎判官義經公忍詣の忍ぶれど。人は指さす武藏坊鷲尾熊井御供にて。心靜かにしづくと。靜御前と手を引きあうて。フシ歌に和らぐ神心。和光のちりめん。東風吹かば。地梅もとびさや紋縮子。裾は鹿子に散縫紺に淺黄に紅檜皮。右近の馬場の並木の錦フシともに。幣とも成りぬべし。地義經神前に三拜あり。この御神の誓あまねその中にも。わきて無實讒言の罪を護らんとの御誓願。あやまたず義經が虎口の罪を免れ實の道を開き給へ南無天滿大自在天神と。御本地大威徳明王の呪文を唱へましますば。靜御

前は胎内の御子變成男子。鷲尾熊井は君の御武運長久と。フシ暫く丹誠淺からず。地辨慶後より大欠伸して。詞さつても長い禮拜。神は見通し胸の中はいはいでも。神の心にあを梅あなたが粹ぢや。好い加減に拜んで仕舞ひ。提重でも取寄せ酒天神となされぬか。地我等がお腹は板天神といひければ静もふつと噴出し。義経も笑はせ給ひ是は武藏がいふ通り。神木の梅は紅葉しても静といふ花もある。一獻酌んで樂まん兎も角も武藏坊辨當はからひ候へと。戯れ給へばそこをぬからず申付けしといふ中に。七軒茶屋より花筵四季の眺を盃に。情をこめて組看フシ既に御酒宴はじまれり。地静もやや興に入り此處で御酒とはお物好。あの繪馬の色々名所もあり故事もあり。月花にも劣らぬ眺中にもこの繪馬は。長刀持つたる法師武者唐輪の稚兒に切伏せられ。後傷負うて逃ぐる體。是は何の形ぞエ、それく合點。殿様の昔牛若様の時。五條の橋の千人斬。武藏殿と主従の御契約の事を。今橋辨慶とて扇團扇の繪にかきて持囃す。地それぢやく橋辨慶。武藏殿切りつけられて逃げさんす所ぢやと。いへば鷲尾熊井太郎常々武藏の咄と違ひ。逃けたりくよつほど脊中をしてやられたと。笑へば辨慶ヤア阿房らしい高笑ひ。詞この武藏がいつ逃けた。その時は君も我も對々なれどさすが源氏の威に押され長刀を取りおとし。太刀

の柄で抑へられたばつかり。あの繪をよう見よ橋辨慶でなければこそ。地橋が無いといひければ鷲尾熊井聲々に。詞ヲ、橋より脇へ逃けた所。その筈くといへば辨慶彌腹を立て。いやいや千も萬もいらぬ。サア我が君武藏が逃けたか逃げぬか御意なされ。地有様に承らんと詰めかかる。義経をかしく思召し猶意地悪く。地されば年久しくて忘れたり。さり乍ら神前の繪馬に書くからは。神は正直世間の口が本なれば。逃けたもので有らう迄と宣へばエ、辛氣な。地よい逃げるか逃げぬか今此處で。ま一度橋辨慶仕直さん我が君御座れと。太刀の柄に手をかくる靜抑へて。詞是つがもない。繪空事は有る習ひどう書いたら大事か。地その代に殿様と酒飲合ひ盃の勝負で。あつかひませんとありければ彼の底拔殿と飲合ひ。又辨慶に負けさせんとや。地所詮繪馬の願主にいひ分あり。打割つて捨てんと飛付かんとする所を義経すがつて引止め。先づ待て辨慶。あの稚兒は義経が昔の姿。法師武者は汝にあらず仔細を語らん先づ暫しと。やや御落涙ありけるが。あれこそ我が母常盤御前を害し剝取つたる。強盜の大將熊坂の長範なり。口惜しや悼はしや我が母の東路にて。熊坂に殺され給ひしは。フシ世上に知らぬ人もなし。我是を討つべしと。思ひこつたる孝心天にや通じけん。金賣吉次が冠者となり遂には廻り青墓の。

金の高荷に心をかけ熊坂に相従ふ。河内のかくぢやう磨針太郎。浅生の松若三國の九郎。三條の衛門壬生の小猿七十人與力して。皆我先にと亂入る某妻戸を小楯にとり。小太刀を抜いて待ちかくる。いらつて熊坂早速を踏み。鐵壁も通れとつく長刀を。はつしと打つて左手へこせば。追つかけすかさずこむ長刀に。ひらりと乗れば又向きになし。しさつてひけば地右手へ越すを。フシ押取り直してちやうど切り。地攻め戦へばさしもの奴ばら同じ枕に十三人。熊坂も深手を負ひ逃ぐる所を追つ詰め。母の敵をあのかく討ちおほせたる有様を。詞傳へて繪にも顯したり。父義朝の御敵平家一門は根を絶つて葉を枯す。母の敵の盗人等子孫も残り有るべし。壬生の小猿といひし小盗人はその時逃けて討ち漏す。地あはれ頼朝の不興を許され。今一度天下を廣く熊坂が眷屬の。末が末迄絶さんと思ふ心も徒に。月日を送る口惜しやと御涙スエテせき敢させ給はねば。御道理ことわりと。フシ皆々袖をぞ濡しける。地静も涙を押し止め。御無念は御尤さりながら。仇は恩と申す事假令存らへあるとて。賤しき山賊強盜慈悲の上にも御慈悲あれ。この胎内の御子の爲ともなるならば。詞常盤様には御孫御御追善ともなりやせん。ヤよしな御酒の興さまし。地武藏殿からお盃更め給へとありければ。詞然らば好いお肴。あれく

神樂堂の蔭給馬の長範によう似た奴。出頂頭巾で顔隠し此方を見ぬ風にて眼を放さず。鳥居の蔭末社の邊離れぬは曲者。ひつ擱んでお肴とつと立つて走りより。是面を見んこちら向けと引廻して。ヤア二階堂の土佐坊か。御邊はいつ上京した先づ。堀河殿へ参る筈。最前より我が君が眼に見えぬか。地言譯あらば御前で申せと頸窩ひつ擱めば。詞いやは武藏殿。早々参る筈なれども。地道より持病といはせも果てずヤア御邊が持病は作病々々と。狗兒提けたる如くに。御前にこそひつ据ゑけれ。詞判官少も驚き給はずム、ウ珍し、土佐坊。和主は九郎が討手に上りしな。見事義經とかけ合の軍せんするか。妻子どもに今生の暇乞して上りしか。勢は如何程持つたるぞと宣へば。ハツア思ひもよらぬ御説候。鎌倉殿の御願につき。熊野の御代参を蒙り夜前京着仕る。地君は今日この御社参と承り。御跡慕ひ御目見えを願ひあれに控へ候と。さもありさうに陳する所に伊勢の三郎息をきつて馳せ参じ。詞土佐坊昌俊熊野詣に事よせ。我が君の討手として五條油の小路に宿を取り候が。地手勢百騎計り兜の緒をしめ弓押張り。馬よ鞍よとひしめき只今打寄せん體候。詞ヤ土佐坊是にかそいつ討取り。残る奴原逆寄にして。一時に踏みちらし候はんとぞ申しける。土佐坊涙をはらくと流し。地あはれ人の口はさがなきもの。御

兄弟の仲いづれか主にてましまさずや。熊野の道は山賊多しと例の若者どもが血氣に任せ。馬
 物具と用意致すで候らん。天満宮も照覽あれ野心とは勿體なや。詞この上にいかなる起請文を
 も仕らん。社に神はおはせぬか。地祈らずとも神や守らんと御歌は偽りか。誠ある土佐坊
 めが心を照し給へと空泣にスエテ目をすり赤めて申しける。詞辨慶たまらず神返もなし。辨慶が
 手にかけて首打落し胸たち割り。地誠の心顯さんと。飛びかゝれば判官しばしと止め給ひ。詞さ
 しも鎌倉殿こゝはと選んで上されしを濫に討つも愛想なし。地起請を致せ許すべしそれ〱と。
 社僧にたよつて硯牛王とり賄ひ。土佐が前におかるれば昌俊臆する氣色なく。地コハリ梵天帝釋
 堅牢地神伊勢兩宮石清水。熊野三所大權現八百萬神七千餘座。五大明王四大薩埵三十七尊過去
 七佛。冥道を請じ驚し奉り。子孫末孫未來際現罰冥罰被るべしと。眉間より血を濺ぎ灰に焼い
 て地飲みたりしはフシ身の毛もよだつてすさまじし。地この上は御疑も候まじ。先づ御暇と立た
 んとす辨慶聲をかけ待て〱〱。詞己れの方から御暇とはさし心得たる奴めやと。ひん抱へ
 てさし上げ。サア御暇下さるゝ罷歸れと。地二三間どうど投付くる。起直つて萬事御免と一禮
 し。心の中には間があつてこそ起請の罰。今夜の中は過さじとつぶやき〱松蔭に。隠しおき

たる供人にフシとり包まれてぞ歸りける。地日も傾けば武藏坊。彼奴が起請は千枚書いても反
 古なり。今夜は御所に皆々相詰め用心すべし。はやお歸りと勸むれば判官打笑み。詞チ、ウ何
 程の事か仕出さん。今夜は面々宿所に歸つて。ゆる〱休息あれと宣へば。いや〱油断なさ
 るゝ所でなしと申せども。はて萬一の事あるならば我一人に任せよ。土佐奴づれに討たるゝ程
 の義經が運ならば。用心はおろか鐵壁の城廓に籠つても詮なしと。地悠々たる御顔ばせ辨慶あ
 きて。詞皆御座れいざ歸らう。あの様な不敵者には憎さも憎し。地少懲りさせたが好い氣味
 と。拗ねたる松に梅が香の。清き心を神垣や祈りを。こめて三重〱行く駒のフシ土佐坊昌俊。
 地當座のがれ七枚起請の烏を驚うそは軍のならとひぞ直に夜討の百五十騎。堀河表の總門に打
 寄せ関をどつとぞあけにける。地御所には其の夜武藏を始め龜井片岡宵より御暇賜つて。宗徒
 の待一人もなく君は醉臥しおはせしが。靜さかしき女にて長刀かたけ只一人。御所の周圍を夜
 廻して関の聲に驚き。見れば軍兵堀端にさゝへたり。扱こそな土佐坊奴が寄せくさつた。詞か
 う有らうと思つた事。詞侍衆は皆留守なり殿は御酒の寢入端。褰にも晴にも喜三太と自ら。エ
 イ儘よ此の腕と長刀の續く程は切死。いで殿を起さんと小門よりつゝと入る。其の際に喜三太

物具して大門さつと押開き。詞ヤア法も知らぬ坂東の土佐坊主。侍の手にかくる迄もなし。御
 厩うまやの喜三太に踏散らせとの御詫なり。一人も餘さじと面おもてもふらず切つて入る。馬も人もきらひ
 なく。隈なき月に小夜風。フシこのみ果實を落す如くなり。地案内知らずの關東勢辻小路せうじに行惑ゆきまどひ。二
 十餘人斬伏せられ四五町さつとぞ引いたりける。靜御前かひくしく着背長投せながなかけ奉れば。
 義經大庭に出で給ひ。詞土佐坊づれには喜三太こそ相應の相手。彼奴やつよもや仕損すまじ。爰な
 女子むすめ少たしなめ。地けうとく起して目は未だ醒めぬと。大欠伸して立ち給ふフシ御有様ぞ不敵な
 る。地関せきの聲を聞付けく。龜井片岡伊勢駿河。熊井太郎源八兵衛物具固め我もくと馳せ參る。
 判官御覽じやさしい土佐奴が寄せたるわ。さしも辨慶が討つて棄てよと勸めしを。起請おこしに免
 じ助けおき。盜人坊主ぬすびとめが馬の足立てさせしこそ安からね。詞ヤ辨慶は駈付けぬか。ム、ウ聞
 えた意見も用ひず助けおき。用心もせず皆宿々へ返せしを。ざれ深き辨慶一擲ひとすねすねて義經にあ
 ぐませ笑はん爲な。地憎にくさにもくし拗者うしろめが來ぬ先に。土佐坊を生捕いけつて辨慶に鼻明かせ慰ま
 れよ。承るといふ所に土佐が大勢取つて返し。たゞ一擲ひとすねと亂入る待設けたる味方の人々。切先
 揃へてわつて入り。四方八面切立てく息をもつがせず三重さんじゅう立たつる地靜あせつてエ、悪い時

の身持みもちや。せめて三月四月でもある事か。こぼれる様な此のお腹で鎧も着られず。ア、辛氣や
 と振返れば大宮口の中門に。み山の様な鎧武者一丈餘りの棒かい込み。すつくと立つたる影
 法師ほうしすは痴者しれものと長刀取延べ。詞ヤア一騎駈抜け踏込みし推參者。土佐が子供か郎等か名乗れ名
 乗れと有りければ。ヲ、事も愚かや大織冠おほしよくわん鎌足の後胤こういん。熊野の別當辨眞べんしんが一子。西塔さいたふの武藏坊
 辨慶べんけいといふ者。詞エ、小面憎こつらにくう此の騒動が目に見えぬか。遅う來てまだ戲謔てんがくあれ。土佐坊生捕
 れとの御意ぢや。サア捉へて御座んせといへば。詞武藏口を失らし。ぬけくとしたうその皮。
 辨慶が來ぬ先に土佐坊生捕り。鼻明かせて笑へとの御意とうからあれで聞いて居た。いはれ
 ぬ事して御機嫌損じて入らぬもの。地罷歸ると駈出づるなう武藏殿辨慶殿。頼みます是坊様上
 人様じんさまと。呼べどもいやく五條の橋で逃けた弱みその橋辨慶。そやしは食べぬとフシ逸散いつさんに飛
 んで歸りけり。地味方は名に負ふ一騎當千。一時餘りに夜討の大勢駈散らし。龜井片岡備前の
 平四郎喜三太に至る迄。首二つ三つ提ひきけく立歸る。土佐が一族相摸の八郎あねはの平次。土
 佐の太郎伊方いがたの五郎残らず討取り。詞大將昌俊河原を北へ逃ぐる所を。七八町追駈けしが我々
 は徒歩立駿足だちじんゆまぐに乗つたる土佐奴。見失ひて討洩らし無念至極と申しける。判官大きにせかせ給

ひ。蟲同然の願人坊主のめくくと生け返し。鎌倉の聞えといひ。例の武藏に悪口いはれてなぶられんもやかまし。地義經直に追駈けん續けや者どもと打出でんとし給ふ所に。大手口より武藏坊土佐を鞍にとつて引据る。主は三頭に後乗りして廣庭に乗入り。詞なんと方々。辨慶が來ぬ先に。土佐坊生捕り此の武藏に。鼻明かせうとの仕組どれどこに鼻明いた。此の儘直に此の土佐坊鎌倉へ連下り。頼朝へかへして我が君始め各に。大鼻明かせて笑はんと乗出す。詞また強洒落か誤つた詫言ぢや。地止めくとありければ土佐坊わなく顔ひながら。是辨慶老。よしか詫言聞かしやんな鎌倉へ連れていて。頼朝公へ手渡ししてあの衆に鼻明かさつしやれと。言はせも果てすひらりと飛下り。土佐を攔んで引下し。是我が君。餘りのぶとく用心もなされぬ故。彼奴等風情に此の騒動少是に懲り給へ。地さり乍ら無念やな。判官殿の討手には關八州の軍勢が。向つても不足の敵。人數ならぬ土佐坊づれ我が君の討手とは。鎌倉殿にかくばかり侮られ給ひたる。御運の程の口惜しやと。満月の如き兩眼にステテ涙をはらくとぞ流しける。詞土佐も共に涙を流し御尤々々。數ならぬ此の法師首召されても詮なき事。地命助かる御執成頼入ると泣く處を。戯言吐かすな暇をくれよ承ると伊勢の三郎。走りかゝつて引直し拔討に討つ

て棄てけり。地判官御機嫌麗しくいかに方々。詞蟻は五日の雨を知り名將は百里の敵をはかるとかや。時もうつさず鎌倉より大軍向ふは必定。和田か小山か北條か土肥佐々木畠山。地日本國が向ふとも物の數にはあらねども。逆心なき義經が鎌倉殿に怨の矢。何かひくべき弓張月の西國に押下り。梶原が行末見て時節をまつ鶴岡正八幡の擁護の驗。夜討に勝つたる祝ひの酒西國の門出酒。花の都の名残りの酒辨慶三獻我も三獻。靜も三獻飲めや謠へや三々九郎判官が。酒のてなみも三國一と御盃。こそ巡りけれ。

第一

地源の義經土佐坊昌俊を刑罰あり。都を開き給ふよし鎌倉に聞えしかば。頼朝いよ御氣色安からず。梶原源太景季上意を受けて行く月の。都六波羅の館に着きけるが。詞先づ鞍馬山東光坊へしきつて使者を立てければ。地異議に及ばず蓮忍阿闍梨六波羅に入り給ふ。其の態八十有餘眉に暮山の雪を戴き。鳩の杖によるほひながら。おめす臆せず梶原が。左の上座に直られしはッシ興醒めてこそ見えにけれ。詞景季きつと見ム、御坊は聞及ぶ。鞍馬の東光坊蓮忍阿闍梨候な。是迄迎へし段餘の儀にあらず。扱も九郎判官逆心によつて。二階堂の土佐坊を討手と

して向けられしに。親兄の禮儀を背き。鎌倉殿の代官たる土佐坊を縛首討つて棄て。洛中を蹴散らし筑紫とやらんへ逐電せらる。然れば白拍子靜が胎内に。義經の一子懐妊のよし。末々の御敵。靜を搜出し男子誕生に於ては。當座に討つて棄てよとの仰によつて此の度某上洛す。御坊とは牛若の昔より誼深く。正しく判官に頼まれ靜を匿はれしは必定。問拷問なき先に白狀せられよ。さなくば命無きのみか。一山の滅亡ならんとさも憎體に罵つたり。阿闍梨仰天の色もなく。いやはや傍痛き事を聞いて候よ。當代鎌倉殿の勦氣を受けし人の思者を。ぬつくりと匿はんと思ふ程の心ならば。梶原は愚か鎌倉中の大名が。百萬年かゝつても上げつおとしつ責めたりとて。やはか實をいはんずる。まして知らぬ事は知らぬといふより外の白狀なし。何條梶原如きが口につけ。九郎判官逆心などとてざはくいきつて駈廻るは。地驚の立つたる其の後に雀の羽叩きするに同じ。御邊が様なる過言人にと教化申さん慥に聞かれよ。詞そもそも判官殿治承四年の秋の頃。奥州より馬の腹筋はせきつて。駿州浮島が原にて兄弟の御對面。平家追討の大將軍をうけ給ひしより。一張の弓を脇に挟み三尺の劍を佩き。西海の波に漂ひ所所の軍に命を捨て。攻戦ひ給ひてこそ平家は脆く亡び失せ。右大將殿は手も濡らさずうまく

と天下を取り給ふ。地弟ながら九郎殿はよつく厚恩の人ならずや。其の恩を忘れいひがひなき奴原が讒言を吐けばとて。分別もなく不和になり給ふ鎌倉殿こそ親兄の禮知らず。其の上摩利支天の變化たる義經公。御内には鷲尾熊井源八兵衛。備前平四郎武藏坊辨慶など。雷をも取拉ぐ剛の者が集つたる真中へ。土佐坊づれの瘦法師を討手として向けられしは。蛇の穴へ蛙を投込む譬に似て。昌俊が縛首を討たれたるは。鎌倉殿の御物好。さのみお腹も立たぬ筈。その後關東勢が向ふと聞き。道を守る義經正しき兄に弓ひかんこと。罪なきに罪を招くに同じ。詞暫く何方へも影を隠し。身に曇りなき旨追つて申開かんと。扱こそ堀河の御所を立退き給ふとは聞きしに。案に相違の御邊の上洛とても判官は手におへず。靜なりとも生捕り胎内の水子を害し恩賞を貪らんとは其方には似合ひしが。詞それも命あつての沙汰地御無用く今にもあれ。判官主従すは梶原と聞傳へ。取つてかへしたらば六波羅中に人種はあるまじ。身に疵つかぬを幸にとく鎌倉へ歸られよ。あら笑止の長詮議と。フシをらうそ。ぶいておはします。詞梶原腹に据ゑかねヤア死損の古入道。さ程のぶとき心からは。靜はおるか判官共に匿ひしも知れ難し。地所詮鞍馬へ押寄せ寺打毀つて詮議せん。誰かある此の法師ひつ立て、案内させよ。縛れよ括

れと大きに怒つて嚇しける。詞阿闍梨膝立てなほしからくと笑ひ。御分が詮議までもなし。判官殿昔の誼に我が山へ御入りあり頼むと仰せあれかし。地物其の數にはあらずとも一山の衆徒を集め。岩根を枕に討死と思ひ定むるものならば。しや何萬騎寄せたりとも難所に待ちかけ上る所を。大石枯木投げかけく僧正が谷底へ。眞逆様にかけて落し案内知らぬ鎌倉勢が。泣顔して迷惑ふを木蔭より見物して。興ある大笑ひせんものを残念や本意なやな。いかなれば判官殿古へ師弟の誼ある。我が山へはおはせずして住みなれ給はぬ田舎の果。何處の波の上にか漂ひ給はん武運の末の痛はしやと。老の眼に怒の涙スエテ衣の袖をぞ絞らる。詞やあつて振仰向き。エ、年寄のいはれぬ力味立てに。なう腰痛や退屈や。いで我が古巢へ歸らう。必ず今日の遺恨ばし胸に持たれそ。折々山へも御出やれ。何も馳走はおりない毘布に鞍馬の山椒の皮。よい茶をまうそ地いづれもおさらば。さらばくと座を立つてフシさも悠々と出で給ふ。地物に恐れぬ名僧の行徳にやおされけん。追の梶原うつとりと。詞今の物いひ狐めであつたもの。係蹄かけくれんもの。近頃こんくわい千萬とフシ秀句に紛らし居たりけり。地梶原が横目役犬間源藏進み出で。地承れば靜が母磯の禪師が舞の弟子。祇王祇女姉妹の女尼となり。今北嵯峨に

引籠りあるよし。然れば靜とも師弟の誼候へば。祇王祇女が庵室御詮議もやといひければ。地景季悦びそれこそ屈竟。扱は靜は北嵯峨に隠れ居るに極つたり。時刻移さず庵に踏込み家探し。若しも靜がなきに於ては祇王祇女をからめとり。水責にしても詮議せん急げやと者どもと。勇む梶原小笹原嵯峨野をさして三重行水にフシ數かくよりも。頼りなき。心もかれて難波江の。あし手に馴れぬ杖草鞋。フシ行先とてもしら拍子の。靜御前は義經公。地落人の御身にて女連る。は世の誹と取り残されし木守の此の身一つの置き所。鞍馬山へと志し。フシ露かきわくる小笹原。嵯峨野の奥に。日も暮れて。知らぬ野山の物凄く。涙乍らに彷徨ひしが。向の藪の忍竹。五加木交の籬。や念佛哀れに鉦の音。燈火幽に見えたるは誰が住む軒の葛葛。つたふ細道分入つて。スエテ竹の編戸をさし覗けば。可愛らしけに美しく。地賤しからざる尼兩人年は十九か二十でも。あられう物か此の住居世に捨てられたか捨てたのか由あり。けにぞ住みなせる。地靜庵に立寄り。詞行暮れたる旅の女。連はなし日は暮る。地立寄らん蔭とてもなれくしき事ながら何處ぞ御庭の片隅にも。一夜を明かさせ給はれかし正眞の御情とフシ世にしをくといひ入る。二人の尼念佛をやめ。詞峯の松風岩漏る水つま戀ふ鹿の聲ならで。

誰が音づれぞと戸を開き。ム、今の案内こな様か。いとほしや姫御前の獨旅。さぞ便なう思すらん易い事ノ。一夜が二夜がとめましたい物ながら。詞ちと夜更けては内證に人に包む障りあり。きつしくらしい事言ふも嫌なれど。地外の人には見せともないしなくお宿はどうも申されず。ア、おいとしや何とせんと二人は目と目を見合せ氣の毒さうな顔付を。靜つくく打ちまもりム、是はあぢな事。詞夜更けて障りのある故に宿かす事がならぬとや。尼御兩人の此の庵に障りといふ字は曲者。尤々ほんに揃うた御器量様。地當世顔の丸作ちよほく口の兩鬘のとりわき目許のしたるさ尼御で見てさへぞつとする。髪があつたら能い物か日本國に人種は御座んすまい。此の色ばつた世界に俗も跣足の尼御をたゞは通さぬ筈の事。夜更けて障りのかた様とはどんな顔ぢや見たいまで。尼御の血を狂はすは蝟樂師の出家衆か。但は俗衆か誰にもせよあんまりな。鼠衣に喰ひつくとは猫同然の身持かな。廣い野原に只一軒合借屋の遠慮はなし。場晴れた詮議であらうものおいとしいは佛壇の佛様。蓮華の上からまじくと其の爲體を見さんしたら。小腹が立つて身が燃えて抹香も鼻へは入るまいと。宿かる騙のざれかよりッシくつくく笑うて立ち居たる。二人の尼も興醒め顔ア、つがもない。詞そんな氣元のある程なら

身を墨に染めうか。人の悪性詮議するそもじのお腹はどうぞいの。此の月か來月か富士の山抱へた程大さうな身を持つて。嵯峨野三界夜夜中宿借りにありくとは。地夫婦喧嘩のやら腹立男にすねての家出か。但し親御の許もなき忍寢一度はまよ二度はまよ。まよよくがかうじて繼母御の目にかより。お腹の詮議まちくの町屋住居のものうさと。あてもない駆落かいづれにも無分別。親男に説言しても女子の身は恥ならず。我を立つるこそ恥の種まだ夜も更けぬ一足も。早う往なしやれム、小徒な目許ぢやと。言ひ返して入らんとす靜なほも衣にすがり涙を浮め。うたてやな男に拗ね親に拗ね家出するとは榮耀の沙汰。仔細あつて我が殿御都を立退き給ふ故。虎伏す野山鯨寄る浦迄も同じ道にと付き添ひしに。詞行先は波風荒き舟路の旅。女をつれては足まとひ心變るとな思ひそと。地互に如才なみだの別れいつそに飽いて去られたら。一思ひに死にもせう。復逢ふ事のありもやと死ぬるにも死なれず生きるにも生きられぬ。こんな因果はお經には何と説いて御座んすぞ。憐み給へ尼御様とッシかきくど。きてぞ泣き居たる。地扱はさうした譯かいの我が身の昔は覺えもあり。飽かれぬ中の生別れは死別れより辛いもの。この哀れは見捨て難し障りもまよよ草枕。ッシ一夜は是にと手をとれば。コハ忝し有難し何

とお禮申さうやら。詞ア、何のいの禮うける馳走はなし。地落葉燃して一煎じはながを花の持成に。夜ととも憂さを語らんと。三人打連れ柴の戸にオクリ入相告ぐる鐘の音ッシいと申しんと物寂びて。地名聞離れしこの住居羨しや殊勝やと。佛壇を伏拜み香花手向けし位牌の数々。誰がなき後の印ぞと火影にすかせばこはいかに。平家の大将清盛をはじめ。宗盛知盛能登守その外一門の戒名俗名。讀みも終らずはつと驚きなう主様。詞このお位牌は皆平家の一門衆。扱は其のおゆかりか。いやなう全く左様の者ならず。恥かしながら我々は磯の禪師が舞の弟子。地祇王祇女とよばれし姉妹の白拍子が身のなるはてと。いふより靜も扱は我に好あり。是ぞ娘の靜と名乗らんとせしがイヤくく。飛鳥川の人心とそしらぬ顔にて。詞ム、扱は聞及びし。お前は祇王あなたは祇女。そのお兩人は清盛には恨みつらみもある筈。却つて弔ひ給ふこといぶかしさよと言ひければ。ア、世にある人こそ仇も恨もあるべけれ。佛の道に入るからは何の隔のあるべきぞ。清盛の辛からずば罪業深き白拍子。何とて菩提に赴くべき。詞我々が善智識暫が間もお主と頼みし御恩といひ。地一門の人々まで朝夕後世を弔ふぞとよ。一夜の宿も他生の縁ッシ回向を頼みまゐらす。詞ヤアよしなき懺悔物語に夜もいたう更過ぎぬ。マア先

へお休み。我々は勤めしまうて後からと。地二人手づから紙衾蒲團の裏も次の間へ。寢所敷けばア、勿體ないやはりおいて下さんせ。ほんにならぬ旅疲とろく睡氣がきた枕。南を足のかた思ひオクリ丸寢の夢や結ぶらん。地二人の尼は。地佛壇の燈火かき立て鉦打鳴らし。南無一門の幽靈頓證菩提。南無阿彌陀南無阿彌陀佛。南無阿彌陀編戸にさつと音するは。嵐にあらであら怖ろしや。庵俄に震動し位牌火焰に燃上ると。思へばわつと二人の尼。煙に噎んでかつばと伏しッシその儘息は絶えてけり。地靜驚き是はマア正體ない。詞氣合でも惡しいか背中でも擦らうかと。地抱起せばあら凄じや。見しにもあらぬ容顏變つて血の涙をはらくと流し。二十餘年の装は實に權花一日の榮。壽永の秋の葉とちりの浮世の芥川。惡業深き修羅の苦患思ひぞ出づる浦波の。地聲をしるべに出舟の。知盛が沈みし其の有様を。知らずや白拍子の體をかりの墨の袖。心は甲冑弓箭の。昔の劍今此處に思ひしらせん思ひしれと。地靜が髻くるくく。兩手に攔んでひつ立て。ひつ伏せ向ふへかつばと突倒せは。詞チ、コハなんぢやの寢入ばな引越して。惡あがきも事による胎兒に怪我でもあつたら。こな様生んでくださるか。地寢酒が過ぎた物さうな此方な尼御ちと意見して下んせ。なう起きさんせ。これなうくと搖起

せば祇王すつくと立上り。チ、哀知らずや淡路瀧。阿波の鳴戸の泡雪と。消えても消えぬ平家の一門。あらく／＼怨ありや恨の数は千鳥の聲も我が袖も。ともに濡れたる磯枕。同じ奈落に伴はん。フシ急げや急げとゆふ闇に。地亂れひかる、絲柳嵐に誘ふもかくやらん。扱は平家の死靈かや鎌倉殿判官殿。御兄弟の源氏にこそいかなる仇もあるべきに。數ならぬこの靜に恨は如何なる恨ぞや。身にはさら／＼覺えなし死してたべと泣き叫ぶ。二人はなほも怒の容顔。ア、愚とよその胎内には義經が。情の胤をこほれ梅子は子なりけり鶯の。うきねに啼くとも悔むとも取殺さでおくべきか。我は重衡是は忠度清經致盛。ウタヒ因果は此處に。廻合ひたり敵はそれぞ餘すなとて。彼方へ追立て此方へ追詰めこゝにナホス響くは。フシ関の聲。彼處に轟く。攻鼓引潮差潮波の音。波にたゆたふ鶯鶯も紅葉踏分け鳴く鹿も。妹脊の哀しら旗のフシ源氏に内裏追つ立てられ。平家の運命悉く月の都に引きかへて。須磨や明石の苦筵轉寝枕睦言の。妹脊々々のうき別れ戀慕の敵は皆。義經にありそ海の。深き妬をしらせん物を腹立や無念やと。コハリ左右に引つ立てくる／＼／＼くるりくる／＼はた／＼／＼。ちやう／＼／＼と現か夢か幻か。それかあらぬかあれ／＼／＼苦しや堪へがたやなあ。又修羅道にをちこちの／＼。たつきは敵雨は

箭先。土は精劍山は鐵城。驕慢の劔を揃へ打つは波引くは潮。西海四海の因果はこゝに。是迄なりやナホスこれ迄ぞと。フシいふ聲ばかりは夢現。醒むるともなき兩人の寢姿。元の如く松風ばかりや靜御前。フシたゞ茫然となり給ふ。地かゝる處へ御厩の喜三太太息ついて馳來り。庵の竹戸あらけなく敲いて。詞祇王祇女の庵室は是か。粗忽ながら物申さんと。地案内の聲に靜も氣を取直し。見れば二人は前後も知らず臥したる姿。ぞつと身の毛もさし足にふるひ／＼表に駈出で。誰とも分かす喜三太が袖の下に顔さし入れ。詞なう我等は旅の女。この庵の祇王祇女は氣が違ひ。搦付きむしりつき我が身も命とらる。地密と逃して下され頼みますると泣叫ぶ。その聲に祇王祇女も漸と夢醒めて。詞是大事な逃ける事ではないわいのと。地駈出でて取付けば。ヤア怖や又出たもう堪へて下さんせと。フシ顛うて譯はなかりけり。地祇王暫く涙にくれ。詞チ、怖れ給ふは理ながら。夜な／＼の夢の迷ひ障といひしはこの事。地死靈の告にお名を聞けば靜御前様とや。かす／＼好の我々隔てず語り給へといへば。詞喜三太扱はと心付き朧月に互の顔ヤア靜様か。詞喜三太か。そなたは此處へ何としてされば／＼。詞君より鞍馬へお使に參る折柄。梶原源太御身を尋ね搜すと聞き。二人の尼御は磯の禪師に師弟の誼。もしやと尋ねく

る所に御奇特く。地サアこの所にも長居は無益。一先づ鞍馬へ御供し阿闍梨の坊に預置かん。いざさせ給へといふ所へ。向の森に矢筈の提燈星の如くにちらつく體。あれく梶原が夜廻りに極つたり。後は山前は川細道一筋。エ、何とせんヲ、思付いたり。庵に駈入り佛壇の本尊香爐卓机引下し。静二人の尼諸共その内に忍ばせおき。左右の扉ひつしと立て我が身は祇王が衣うちかけ。花の帽子に月代かくし。壁に向つて結跏趺坐。フシ坐禪の顔して居たりけり。地程なく大勢にておつ取巻き。詞ヤアくこの庵は祇王祇女が住家よな。まさしく静をかまくまふらん。鎌倉殿の上意をうけ梶原詮議に向つたり。早々出せと聲々に罵つたり。地喜三太ちつとも騒がず九年面壁達磨大師の教をうけ。坐禪の床に本来の面目を悟る折柄。什麼生か迷の凡夫。詞悟つても六十棒悟らidem六十棒。竹篋のむね打くはんより。早去れくといひければ。ヤア仔細らし、捨坊主。よしく彼奴には構ふな込入つて詮議せよ。地承つてどつと寄る喜三太今は堪りかね。坐禪を破る大悪魔片端暇とらすべし。念佛申せ南無をみ豆腐油揚。蒟蒻椎茸嵯峨竹の子精進料理水臭くば。腰にさいたる太刀魚の鹽梅見せんとすりると抜き。二面八角十文字。將棊倒に確立てく松原さして三重追うて行く。フシ景季主従。地隙間を窺ひ取

つて返し庵に込入り。障子戸襖蹴放し。残りなく尋ぬれど。フシ静が行方は知れざりけり。地景季目早き男にて。詞待てく者ども佛壇はありながら木佛香爐外にあるは心得ず。地探して見んと扉開けば。あつとばかりに駈出づるを景季すかさず飛びかゝり。彼奴一人に骨折つたりと静を小脇にしつかと抱き飛んで出づれば祇王祇女なう悲しやと取付くを。左手右手へ蹴散らして。フシ一散にこそ走りけれ。詞景季が郎等大間の源藏喜三太に追立られ。逃足迷つてもとの庵に走込み。佛壇に駈入つて内より扉。地はたとさし。フシ隠れ居るこそ愚なれ。地喜三太大汗になつて馳歸れば。二人の尼聲々に情なや静御前は。はや梶原に奪れたり如何せんと泣叫ぶ。南無三寶しなしたり雲を分けて追うたりとも。敵は大勢我は一人エ、口惜し、無念なりと。齒嚙をなして立つたりしが。詞佛壇の中に人の音。ヤア甘い事少開帳致さんと。詞扉を開けばわつというて逃出づる。どつこいと取つて押へ一締しめて。地おのれ締殺すは易けれども死骸の三盃酢むつかしと。地兩足の骨腕の骨。ほつきくと押折りく。サアうせうと追放せば。立つも立たれぬ羽拔鳥よろほひながら口へらず。詞仕返しするは合點なれど男はあたつて碎ける心。地身うちが碎けていぬまの源藏それで宿へはいぬまの源藏。貴様は骨折々と輕口ゆふ顔

をめぬ顔。鹽にひる顔朝顔も咲くやさが野の朝ほらけ。まだほの暗き鞍馬山飛ぶが。如くに急ぎけり。

第三

地 鳩照や矢橋の浦の渡舟。名にしあふみの八景を眺めわたせる勢田の橋。廻る三里の艾より足の薬と旅人の。一里の渡しこぞり乗り伊勢や日向の物語。見ぬ京咄 嘘咄 後からはける比良の雪。跡の白波漣や フシ浮世のしかをのせて行く。地 舟人もこがれ出づらん 船頭心よい男。調扱仕合な乗手衆。この湖は横波ことに舟は丸作。比叡の山嵐強ければ播磨灘より大事の所。今日のどかの長閑さ疊の上も同然。我等は大津松本の者。志の佛彼岸に當り。一錢も運賃とらず其の上其の如く女房どもに煎じ茶入れさせ。旅人衆に攝待致すにつき。地 回向を頼む法の人御出家もあるからは。力をいかで惜むべきおし立て、疾い事。飛ぶが如くと武夫の。弓に矢橋の渡守フシいき筋張りてぞ漕ぎにける。調 乗合の順禮ム、船頭のお内儀か。結構な善根極楽というて遠うはない。皆現世にあること兎角世の中が大事。隠れもない九郎判官殿。渡邊福島の難風に梶原が逆櫓の争ひ言ひ伏せ乗りふせ。平家の大勢攻亡し給へども。梶原が舌三寸讒訴の難風に

は。地 櫓權も立たず落人となり靜御前も鎌倉より。搦め取り給ふとやら凌ぎ難きは娑婆の荒海。順禮みね打つ波は。三熊野の。那智のお山の。地 南無觀世音大菩薩と。拜めば側に乗合の鹿島の事觸烏帽子ふり立て。調 それと申すも判官殿。信心の無い故。御神の御託宣に偽りは御座ない。十二釜の御湯をあけ十二の燈明十二の神酒。信心ある氏は火難水難劍難病難口説の難を拂ひのけんとの御託宣。神は正直の頭に血の多いまかせ脇ひら見すの猪武者。判官殿の地 過 フシあやまつて申すといひければ。地 舟底に臥したる猿使むつくと起き。地 ヤイ事觸奴おのれが口から過とは。忝くも判官殿は向齒反つて猿眼。智慧はしかく梢を傳ふ輕業早業。異國本朝誰あつて。地 まさる目出たき春の駒籠踏張り召したる體。あつばれ。地 大將やと譽めたる君。おのれが口から推參千萬。頼けた搔きむしつてくれんといへば乗合ども聲々に。調 是は事觸殿不調法。詭言召されと制せられ。けにく口の過ぎるは事觸故何事も御堪忍。是や此方へ御免ならうと地 どつと笑ふも世の營。常いひなれし口すさみ フシ旅の疲を晴しける。調 舳に乗つたる修行の僧笠を取つて。地 船頭殿は大津松本の人とや。然らば松本に大津二郎といふ人ばしあるかと言へば。女房聞きもあへずア、其の大津二郎とは。地 こちらの人と言はんとするを

船頭。詞ヲ、くくいかにもく女房どもが申す通り。大津二郎は我等が懇何のため御尋ねぞやといひければ。されば愚僧は諸國行脚の律僧此の度加賀の白山に登りしに。大津松本にて大津二郎と尋ね。事傳届けくれよと頼まれし事どもあり。先づ其の二郎といふ人の先祖は何人只今の渡世は何。詳しく聞きたき仔細ありと懇にこそ尋ねけれ。船頭夫婦顔見合せ涙を浮め。地噂の様には候へどもその人の懺悔の爲。又は人々に善を勧むる爲此の舟の着く間。彼の大津二郎が身の因果物語語つて聞かせ申すべし。詞二郎が親はこの近江の國に隠れなき。磨針太郎と申して熊坂の長範が手下の盗人。數萬の人を切り取り致せし中。判官殿の御母常盤御前東下りの流浪の旅。美濃國山中宿にてあへなく切捨て剝取つたり。その時二郎は十三歳壬生の小猿と申せし小盗人。その後長範牛若君に殺され親も討死致せしより二郎は先非を悔いかへし悪念をふつと切り。今は大津松本に旅人を宿す旅籠の營致し。家子被官も數多召使ひ今津海津の舟も持ち。何に乏しからねども喃世の中の。桃の種は桃となり梅の種は梅となる。善惡の報程悲しき物は候はず。連添ふ女は京の者十餘年馴染し中。子は三度迄悦びしが一人も育たず産聲上げず。産屋の水の泡となる。地勿體なくも源氏の大將義經公の御母を。盜賊の手に

かけたる咎めやらん。常盤御前を害せしは仁安三年八月五日。女房が産月の三度が三度八月に當りしこそ。天罰報いの證なれ又只今も懷妊にて。即ち當月此の八月が十月目なれば。生れぬ先よりなきものと思ひ極めし二郎夫婦が心の中。いかばかりとか思召す子のなきは是非もなし。現世さへこの報ひ死したる親の地獄の苦患。さこそと思ひやらるゝとて常々夫婦泣き悲しむ。不便ともあさましとも彼等が心の苦しきは。地獄の火焰に劣るまじ御出家と申し何とやら用ありけなる御尋ね。思し合する事あらば二郎親子が現世未來。助け給へと船頭夫婦。かき口説きたる涙につれ、フシ舟こぞりてぞ泣きにける。詞ヤ長物語に舟の着くをも地しら波の。打出の溜よと飛下りく。暫しの乗合是も御縁。さらばくといひ捨て、オクリ皆散り、くくに別れ行く。地船頭修行者の袖をひかへ。詞只今の物語人の上にてあらばこそ。大津二郎とは夫婦が事何故のお尋ねぞや聞かさせ給へといひければ。修行者横手を打つて。一念無量劫假念無量罪疑なく候よ。愚僧加州白山に行暮れしに。一人の聖來つて。只今是に不思議あり。三業を靜め妙典を誦じ、見よくと宣ふ空の月かき曇り電光。天地須臾に鳴動して。鐵城聳え黑鐵の網猛火烈々たる火の車に。罪人を打乗せ牛頭馬頭の惡鬼轆をきしらせ。地黑鐵の俎に罪人を取つて

載せ。上に重ねる大磐石。阿房羅利膝を屈し腕をのべ。ゑいや聲して押す程に流るゝ血は夕陽に。油を搾る如くにて紙より薄く押平めたる罪人を。串に貫き焔にかけて炙らるゝ。叫ばんとするに聲出でず鐵丸咽に塞り。猛火眼を焼き焦す。フシ怖しなんども愚なり。彼の聖憐み給ひ錫杖を取延べ助けんとし給へば。錫杖の眞中ほつきと焼折れ御衣の袖燃上ると見えけるが。鐵城破れ罪人も。フシ惡鬼も忽ち消えにけり。地愚僧身の毛立つて恐ろしさ。詞はいかなる罪人にやと問ひければ。聖答へて宣はく。娑婆にては強盜熊坂が眷屬磨針太郎といひし者。一生の造惡無量の中。源氏の大将義經の母。常盤御前を害し剝取つたる一惡。千萬の惡に超過してかかる責を受くるなり。大津松本には彼が一子大津二郎といふ者夫婦。地藏菩薩を建立し父が菩提を弔ふといへども。人の恨みの報の罪念々に増進して。佛力にも叶ひ難し和僧大津二郎に告げしらせ。地今ぞ日蔭の義經に情をかけ。一事の善をも義經の爲に陰徳を積み。母常盤亡魂の恨をなだむるものならば。地獄變じて三禪の樂となり父が成佛疑なし。この錫杖をしるしに見せなほく疑念を拂ふべし。我こそ大津二郎が且暮念する六道能化。地藏菩薩と示現して其の儘見えすなり給ふと。懷中より焼折れし錫杖を取出せば。夫婦ははつと夢の心地スエテ涙に沈み居

たりしが。地稍あつて大津二郎。夫婦の中に子の育たぬ現世の果を見て親の未來を悲み。地藏菩薩の尊像を刻み佛果菩提を祈りしに。詞過ぎし盂蘭盆より御手にありし錫杖も失せ。右の御袖焼けふすほりしを不思議と存じ。舟の中にも身を放さず拜み給へと御厨子を開き。地錫杖を合すれば。フシ寸分違ふ所なし。地扱は我が親の地獄の焔に焼けるかと。悲しさも信心も五體にひつしと染渡り。フシ身を抛ちてぞ歎きける。旅僧も隨喜の涙を流し。詞菩薩の六度も元は慈悲。奈落の罪を御身に代へて救ひ給ふ告に任かせて。地今落人の判官殿ゆかりになりとも情をかけ。御母常盤亡魂の恨をなだめ給ひなば。父の成佛疑のあるべきか。愚僧は都を修行し下りには必ずと暇ある所へ大津二郎が下司の女あわただしく。詞申しく大名の御泊りとて。宿取衆が先へ来て内かたの忙しさ。主人夫婦は皆留守と斷りも。聞入れず地サアく早うお歸りと言ひちらしてぞ歸りける。この御本尊も此儘に打捨て置かんは勿體なし。京の佛師によき様に貴僧を頼み奉る。只今の物語冥途の父に逢ふ心。別も同じ御名殘御下りには必ずと。互にかへり三井寺の夕を告ぐる入相は。寂滅爲樂と響くなる諸行。無常や三重は是やこのフシ上る旅人地下馬知るも知らぬも大津の宿。フシ夕々ぞ賑しき。二郎夫婦立歸り見れば我が門の前。矢筈の紋

の幕打つたり。詞あれ見よ女房泊の大名とは梶原よな。親の爲義經様へ志つくさんと思ふ某。あだの敵の梶原に。地我が家を踏立てさせ這ひ躡はんは本意ならず。エ、貸すまい物といふ所へ。網かけたる牢乗物あたりを拂ひ。警固厳しく押立て亭主々々と召出し。詞我こそ梶原源太景季。鎌倉殿の上意によつて靜を召取り下向す。義經の子を懷妊して殊に臨月。女子なれば構なし。男子なれば産屋にて首を刎ねよとの御説。かたぐゝ大事の囚人。この家は間所廣く用心もよしといふ。下宿迄に氣をつけよと。地牢輿先に立てさせ草鞋も脱がず土足の郎等。出居も座敷も踏立て、フシ奥の間にこそ入りにけれ。地女房ぞつと身を顛はし扱すさまじや。身持な女は誰も覺えのあること。少しの事も氣に障れば大事の物。見る目さへ苦しきにその身になつて靜様。思ひやられておいとし。詞今修行者の物語を忘れてか。義經様のゆかりになりとも情をかけ。父御様の地獄の呵責を助けよとは佛のあてがひ。地日の目も見ずに消え失せし三人の子供が後世の爲もわるかるまじ。夫婦が命を捨て、も此の所を見放しては。佛にも背くぞや合點かといひければ。詞ヲ、靜御前と聞くより我が胸に染む。判官殿の奉公と思ふにこそ。親孝養の志いかにもさうぢやと。地夫婦心を碎く折節下女ども駈出で。詞牢輿の上藤悦びの氣がつい

て。うめき苦み給ふ聲あれ此處迄聞えておいとしや。お腰を抱いて進ぜたいお藥でもと立騒ぐ。地夫婦驚き奥の座敷を遙に見れば。大將梶原太刀引つそばめ。荒氣なき武士ども鎗長刀にて取廻し。産所のいたはり引きかへて。科人を拷問のフシ獄屋の様に異らす。いかに憎しつらしとて産は女の命の境。犬猫の子を産むも憂目は同じ憂目とて。憐むは人のならひぞがし。エエ無得心なる奴原と。憎いにつけても痛はしくフシそゝろ涙を流せしが。女房見る目も堪へがたくこれ産の道ばつかりは。詞男の合點いかぬ事女の身に覺えあり。それはく節々をすんすんに引放さるゝ思ひぞや。地あの上に男子にて眼の前にて首斬らば。母御も命つゝくまい。見殺しにする此の罪は地獄の火焰に薪なり。詞何卒思案あるまいか。ハテ思案とて何とせん。幸ひお事が産月。地おはれ只今産せよかし男子にても女子にても。隙間を見て取替へ殺さば我が子を殺させなば。死したる親の一生涯作りし罪を滅せんものを。生れねば詮方なしよつく我が親の。罪業こそは深からめとスエテ打萎れたる體を見て。詞これ五戒を一戒破るさへ罪深し。地御身の父御は殺生罪偷盜罪。常磐御前を殺し剝取り給ふ其の恨。積つて地獄の焰を住家とし。牛頭馬頭の獄卒に責め苛まるゝ現在の地獄を。見て來たお僧の物語地藏菩薩の御身を地獄の火

に焼焦れ助けんと思召す。大慈大悲の御告をよそになし。助けぬ子の有るべきか命を惜み身を庇うては。百日千日思うても同じ事。産所へ近寄つて。調若し男子誕生ならば。妾が胎内を切裂き。地この子を代りに立て給へと。いへば夫は泣出し舅の未來を助けんとて。胎内を切裂けとや三人生んだる子も育たず。四人目には母を害し親の後世を救はんとは。思ひもあへぬ思ひの闇、フシかきくれ。てこそ居たりけれ。地エ、日頃とも覺えぬ。義理によつて一言に妻子を殺すも男の役。地まして是は親孝行今にも若君誕生あり。新血の上に死血を流しやみくんと殺させ。親の地獄を救はぬのみか。現世にては判官殿の聞召し。いひがひなき大津二郎さすがあさましき盜賊の末なりとの御嘲。世上の人の爪弾きせんその恥が女房の命にかへらるゝか。今生後生にかへても此の女房にさ程名残が惜しいか。此方は何とも御座らぬと袖には落さず心には。零す涙の俄雨むら村雨の如くなり。地女房に勵まされ打領いて奥に向ひ。調御近習の侍衆ちと御意得たしと呼ばはれば。何事さふと立出づる。イヤ囚人靜御前臨産と見え候。産所へは男をよけ女ばかりにして。その人の氣を緩めてこそ平産もある物。荒男に取巻かれ氣血滞り。難産の上過も候うて。殿の落度となる時はお宿の主も迷惑。我等が女産の巧者下女どもも數多

あり。痛はり平産させ申さん此方へ預置かるゝ様に。御披露あれといひければ。地是は尤氣がついたりその通り申し上げ。苦勞ながら亭主、フシ頼み申すと入りければ。地しおほせたりと悦びて。俄にしつらふ産所の床。妻は我身の最期の床。生れくる人死にゆく人娑婆と冥途に逢坂の。清水を産湯末期の水、フシ哀れぞ。汲みて知られたる。地慳貪無慚の梶原も主が道理に聞分けてや。若黨どもに手をひかせオクリ漂ひ、立出で給ふ體。地女房見る目も痛はしく若黨どもを遠く拂ひ。床にかゝへなほらせて。調初産と申し御苦勞の上苦しいは尤なれど。高いも卑いも此處が女子の辛抱。地主夫婦を力にて只氣を強うくといさめられ、ア、一夜の旅の情とて頼もしの人々や。男子なれば殺さるゝと。思ふつらさに比べては産の苦患は數ならず。情には生るゝ子を。娘になれと祈つてたべ。ア、堪へがたやと苦しみ給へば。調是假令男子でもお命は二つあり。若君生んで源氏の二葉。榮行く末葉を見給へと。力をつけて人の身を千年の松と祝へども。我が身は何の秋の草、フシ先に枯れなん哀さよ。地一郎はつと心づき。調一家に二人の懐妊には相孕とて難産なり。地物は呪、こちよれと。靜の周圍に屏風を圍ひ。衣桁の棹を棟木と名づけ屏風の上に打渡し。サア屋の棟は隔つたり御平産程あるまじと。我が子の爲に用意せし

産衣ども取出し。主夫婦が誠ある心に解くる産の紐。屏風の中に初聲す二郎すはやとつと入り。聲立てさせじと口をおさへ抱上ぐれば南無三寶男子なり。ハア我が妻の最期近づきしと思へば胸に大磐石を打付けられし如くにてステ目も暗闇となりけるが。地莞爾と笑うて悦び給へ姫君なり。先づお命恙なし嬉しい餘り物音聞いて驚き給へば。産後は大事耳を塞いでまるらせんと。夜物の物にて額を包み屏風引立て出でければ。女房待ちかね何と和子か姫御前かと。問はれて夫は返答なくステどうど伏して泣き居たり。女もあつと胸塞がり先立つ涙をおし隠し。調ム、扱は和子かよい目出たい。我が子が若し娘なれば静様の子と偽り。地兩方命助かる男子なれば覺悟の通り。うろたへまいぞ我が夫とかひしく鉢巻しめ。布團の上におし直り胸かき明けてこれ。梶原に素振りでも見付けられては無駄事。早うくとすめられ夫も匕首するりと抜き。肌押し明くればはかなやな首に懸けしは親子安穩子安の守。子は死して生るゝとも母は息災延命と。祈りしは誰が爲ぞ今はあだなるこの守と。思へば目くれ手も顫ひ。フシ取亂。してぞ見えにける。夫の歎きに女房もつれて心は亂るれど。調是はいかう手が顫ふ。地帯にさはらず腹切破り。子を引出し美しう臨終させて下され。手を顫はしてお腹な子に疵つ

けて下さるなど。命待つまも子を思ふ夫はなほも消入る心地。あさましや不便やなよしなき男に縁を組み。舅の作りし悪業を嫁の身に引受くる。我は我が女房の胎内を切裂きて。生れぬ子を引出す。唐土の悪王孕女の腹をさく。その外には我ばかりこの匕首も生るゝ子の。守刀と心ざし然も此の頃さるゝと。研ぎたてしは何事ぞようもく是程に。因果の算用あひけるか佛罰も人罰も。一色は許しあれかすと。フシ口説き。歎くぞ。道理なる。なう釋迦如來は卯月八日。御母摩耶夫人の右の脇を破つて御誕生ありしと聞く。我も舅の後世の爲現世にては人の爲。胎内を裂かるゝは佛の縁とも。フシなりやせん。妾が別れは思切り。一筋に娘になれと祈つてたべ。思ひきつても女子のはかなさ双物の光ちららと。目にかつて口惜しい心も亂れ氣も迷ふ。物思はせて誰が爲ぞエ、曲もないサア早うと。恨の涙に氣を取直し目を塞ぎ。是只今と氷の双臍際。かほと突立て切裂けば齒をくひしぼる女の苦痛。男は悲む心の苦患血は瀧津瀬と流れ出で。目も紅の染絹をたぐり延すが如くにて。思はずわつと泣く聲と血汐の中の初聲と。亂れあひたる哀さは鷹にとられし雀の雛。父鳥母鳥あこがれてフシ泣悲むに異らず。地血を押分けて泣くゝも取上げ見れば南無三寶。調是も亦男子なり。地母は絶え入る息の下あさましや

男子か。首きられに生れしか母も血で死ぬ子も血で死ぬ。親子の爲に流灌頂。頼むくといふ聲も、フシ弱りゆくこそ哀なれ。地奥の方より手燭の影すは梶原よと。母を布團に押包み我が子は産衣に引き纏ひ。さあらぬ體にて待つ所へ源太つと出で。調靜が産は何とくといひければ。さん候此の如く男子誕生候へども。餘り見る目も痛はししせめて七八歳迄御育て候は。地廣大のお慈悲と顔をもあけず泣居たり。源太とかうの答もなく引寄せて指添ぬき。首かき切つて初髪つかみ指上げ。調是見よ亭主。水子なれども鎌倉殿の御敵一人は亡びたり。この首實檢に入れ靜が事も仰に任せ鎌倉より下知すべし。地それ迄汝に預けおく夜を日について急の道中。夜を込めて打立たと首桶先に押立てさせ。亭主が今宵の働き祿は重ねて沙汰すべしと。フシ供人引具し立出づる。地二郎は見送る兩眼に涙の玉の男子なれど。面容は母に似し形見にさへ別れしと。布團引退けゆり起せば早こときれて身も冷えたり。家の老若下女下婢スエテ夢ともわかず泣叫ぶ。地大津二郎は狂亂のエ、萬事は是迄後世も菩提も何かせん。妻の敵子の敵判官殿の御敵。梶原奴と刺違へ胸腹抉つて此の胸を散せんと。駈出でく。駈出でては駈戻り。走り出でしがアツアよしなや義經の。お爲といふも父の爲一念怒れば悪鬼矛を振立つる。親の

沈みし修羅道の劍の山劍の種と。思ひかへせば心の中も靜御前の。七夜の中は沙汰ばしするな密にと。亡驅送る弔に。親の悪心子の善心に。ひかれて同じ菩提心花あれば實を結び。仇は情に近江の海の土は。東の富士の山。善悪もとは一つごとと悟るも。孝の徳とかや。

義經道行 第四

次第 旅の衣は篠懸の。旅の衣は篠懸の。露けき袖やフシしほらん。フシ頃は如月。末つ方。判官都をおちこちの。道なき國は刑戮を。免れかねつゝ忍ぶ山。奥秀衡を木蔭ごとと。フシオクリさぞな憐む。山櫻。フシ花よりほかに。知られじと。御身を變ふる蘇民書札。地御供の人々は。伊勢の三郎義盛駿河の二郎清重。片岡八郎經春。皆山伏の姿にて。地越路の旅に迷へとや。乳母子の兼房が。マエテ鬢寒き白雪に。横雲暗き曉月の。熊井太郎忠元源八兵衛廣綱。空に充ちたる春の霜残んの星の四つ五つ。フシ六つを隠すも君がため。地龜井の六郎重清。備前の平四郎成春。都をよそに捨つる身は。フシ心ぞ先に山深き。鷲尾の三郎義久。常陸坊海尊。武藏坊辨慶は先達の姿となつて。主従以上十二人。一年平家追討のいと緋緘もいつしかに。スエテ九會曼陀羅の麻衣。兜巾篠懸法螺の貝。外には悪魔。地降伏の形を見せて心には。忍ぶ憂世の道狭き

フシ御旅立こそ哀なれ。關の此方の。音羽山。越えてあなたの嵐に咽ぶ。松の調も聞捨てよ。
 オクリ雁に、連立つ湖上の雲。昨日の雪を其の儘に。フシ花の吹雪の志賀の山。地けにも一榮一落
 を人に知れとや澤水に。オクリ上るも、下る妻雲雀鳥の聲々。木々の色。人に心をつけ顔に。流
 轉生死の海深くオクリ浮いつこがれつ行く舟の。後の白波水の泡オクリ消えて。結びて定めなき。
 皆是法の教ぞと。スエテ見上ぐれば。あれこそ日本天台山。地四明の洞を移さる。麓に山王二十
 一社。麓を並べ立ち給ふ。沖に霞みて竹生島。金輪際より夜の中に。スエテ出現したる靈地にて。
 胎藏界の辨財天フシハツミ假にこの世に。フシ鎮座なる。代々の昔を白髭の宮居貴く神さびて。龍燈
 の光増し。御殿を照らさせ給ひければ。君をはじめ十二人各あつと手を合せ。スエテ信心法施を
 奉り。地御經讀誦の爲にとて。フシ和邇の岬。堅田の浦よりお舟に召されて海津の。濱邊に。
 上らるゝ引フシ是より山路の。うき難所。眞野の萱原遙々と。餘吾の湖面見下せば。鹽焼かね
 ども世渡りの辛き業とて柯を切る。フシ柚山人の。板取や。袖に涙の春雨を凌ぎかねたる我な
 らで。誰に宿れと木の下ハツミ宿もとざさぬ。フシ世と。なせし。身は徒に。くみがみも時世
 に靡く青柳の。柳が瀬浮瀬つらき瀬の四十八ヶ瀬七里半。幾重の霞幾瀬の波越えても。末の泊

りとは。何處荒乳の山高く。ハツミ歩み惱みし御風情。太夫龜井片岡伊勢駿河。地いづれも目と目
 を見合せて。六十餘州の武夫の恐怖れたる御大將。二人いかなれば山田の案山子柴人にも。心
 おかるゝ御右様。遼遠東南の雲を起し。西北の雪霜に責められ。埋るゝ御身の果正八幡大菩薩
 は。いかに非禮を受給ふ神も偽ある世かと。鷲尾増尾常陸坊。篠懸の袖を顔にあって。フシ悲歎の
 涙せきあへず。太夫その中に武藏坊よしなの落涙や。神に偽あるからは。我等凡夫も空事せよ
 天も恐れず世も恐れず。鎌倉殿もなまくら殿。あら氣樂や面白や。是なる山水の落ちて巖にか
 かるこそ。嗚るは瀧の水。謠へや謠へ地方々と。辨慶にいさめられ上り登るや木芽山。峠
 遙かに西の空。フシ波は敦賀の磯に打つとよのいやうつゝとも。夢ともわかぬ理を。知らせ
 てみねの電をよそめにさこそ山伏のうつ。石の燧が。フシ城とかや。身の愚さにつまでか世
 に繋がるゝ牛が瀬の。絆を早くきれとぞ智慧の劔の礪波山。末は三國の浦傳ひは。ま。の眞
 砂を百千歳。地敷にとりしは昔にて。命の中に今日の日はや入相の。かねが崎散らさぬ花も
 花の香を。スエテ誘ふ嵐のおのづから。フシ花の。安宅に着き給ふ。地一木の松の下蔭に草刈童打群
 れて。落葉かく手の物語り。一昨日斬られし山伏は顔憎體に見えたるが。昨日斬られし山伏達

は愛敬ある面體。痛はしさよといひければア、音高し。よしなき山伏の噂して關守殿へ洩れ聞え。地咎められては恐ろしし。フシ言はじや聞かじと叫きける。地判官驚き武藏に目くばせし給へば。辨慶心得笈の中より扇數多取出し。詞是々汝等は此の邊の里の子か。それ／＼の仕業とて風を待つて木の葉を搔き。露を分けて草を刈るいたいけな子供に何かな取らせん。是は城殿の扇とて都の名物。一本づつとはらりと散らせば我先にと。フシ奪取勝して悦びける。詞扱この松は由ありけなり何といふ名木ぞ。是より奥州平泉の近道ばし知つたるか教へてくれよとすかされ。地扇になじむ風の子や童ども打解けて。詞是こそ北國に隠れなき安宅の松。是より奥の街道上道中道下道とて三筋あり。上道は北國大名の鎌倉の下り上り。地此處にては笠をぬけ彼處にては下馬せよと泊りも自由ならずとかや。下道は越後路の舟の上寺泊九十九里。乗つたり蒲原八十里。石動嶽彌彦の峯。白山風吹く時は佐渡が島へ吹きつけ出雲崎へ吹戻し。一年も二年も漂ふと承る。中道はこの道筋市振淨土歌の秋。親不知子不知比丘尼轉合子投。音に聞ゆる難所なれども道の程近しとは奥通する人の物語さりながら。詞此處に一つの大事あり。判官殿十二人の作山伏となり奥へ下り給ふとて。鎌倉殿より國々に關すわり。此の國の地頭富

樗の左衛門家直殿この處を承り。あの松林の端に亂杖逆茂木引廻し。關の戸堅く山伏を留め。繪圖に合うたる山伏は首を斬つて獄門にかけらる。色白に猿眼向齒少し出でたるは。判官殿とて一段高くかけらる。色黒く頬骨あれ。眼の光るは武藏坊辨慶。日本一の荒者と猶も厳しくかけらる。地一昨日三人昨日は五人その前とても毎日に。五人七人山伏の斬られぬ日とては候はず。詞旅の衆には語るなと近郷お觸強けれども。扇の御恩に物語る殊に一連十二人。地關所へかゝり給は一人も命はよもあるまじ。早々後へ歸り給へ。詞山伏達と物いふふり庄屋殿へ聞えては。地あら怖ろしやいざ／＼と。草籠かたけ木の葉の杷。フシさらば／＼と歸りけり。地牧童の物語聞くより人々あつとばかり一期の浮沈この時と。フシあきれ。果て、ぞおはしける。稍あつて判官扱は道すがら聞きしに違なかりしな。東海道北陸道舟路山路五畿七道に關をすゑ捜さる、義經天地に網を張られたり。遁れも果てぬ運命にてなまなかに身を苦め。恥をさらすも口惜し、佛神も捨果て給ふ義經を。主従の義を立つる方々の志。スエテいかなる世にか忘るべき。詞七生迄同じ世に生れあひて伴はん。義經が首討つて鎌倉殿の見參に入れ恩賞に預り。只追善には梶原父子が首討つて。墓の前に手向けてたへ是迄なりと御佩刀に手をかけ。御自害

と見えければ辨慶是はと縋りつき。詞十人の人々騒ぎ立ち。にせ山伏にて世を憚るも君を御代にあらせん爲。御自害あるからは關守は愚か。右大將頼朝公をも人とも蟲とも思はゞこそ。關押破り鎌倉に亂入り。梶原父子をさけ切にし。谷七郷を切りちらし鶴が岡の神前に。立並んで腹かき破り源氏の氏子守りめなき。正八幡のつら打せん。いざうつ立たんとはらりと立つ辨慶眼に角を立て。詞ヤア物に狂ふか方々。若き者ども騒ぐともよい年の兼房。血が枯れて智慧も枯れたるか。りきんで能くば去年の春なせ腰越よりは歸りしぞ。我が君も我が君。本意も遂けず御腹めし心を盡し身を碎く。郎等どもが忠節を水の泡となし一騎當千の武夫ども犬死せよとの御心か。よし思召し詰め給はゞ。武藏を始め十一人御手につけられ首をはね。其の後は兎も角も。地世に落ちてあさましや御心迄くらみしかとステ涙を浮め制すれば。君を始め奉り。鬼を欺く人々も、フシ皆々。袖をぞ絞らるゝ。漢の高祖は紀信が命を捨てゝこそ。楚の圍みをば遁れ給ふ。詞何れも是に待給へ辨慶一人關所に向ひ。南都東大寺の勸進と偽り。地某富樓那の辯舌にて關守富樫が心をなだめ。仕畢せて候はゞ悦びの貝を三度吹立て申すべし。それを合圖に駈付けやすく、關を越え給へ。若し仕損じて討たるゝか。擲取らるゝその時は名残の貝を只一

聲吹くべきぞ。辨慶が最期と思ひ回向して。是より都へとつてかへし深山の奥にも御身をかくし。御運の時を待給へ先を折るではなけれども。千に一つも仕畢するは難き事。詞かまへて人名残の貝を吹くとても。辨慶が不便な主從傍輩の義が立たぬなにとて。關所へ駈付け君の御身に過ちあらば。生々世々の恨みぞや。地吉左右を待ち給へと勇んで出づる辨慶も。心の中は二つがけもしや關所を仕損じて。この世の君を見納めかと思ぬ顔ながら振りかへる。判官も見送つて或は勇み或は萎れ肝を冷せる主從の。地獄の上に一足飛びのるかふぞるか吶の針。薄氷を踏む御心底。フシ思ひやられて痛はし。地君觀念の御目を塞ぎ日本國中あらゆる神。別しては石清水正八幡鞍馬大悲多聞天。關守が心に入替り武藏が心身安穩に。十二人の主從左右なく關を通してたべと。普門品陀羅尼品打上げく遊ばせば思ひく守本尊。氏神産神呼出し呼出し。コハリ般若心經金剛經或は。眞言中臣祓くりかけ。讀みかけ祈念ある谷の川音松吹く風。野飼の牛の聲迄も辨慶が吹く法螺貝かと。耳を敬て心を澄し只一時を待つ程も。千年を経る地心地して。遠山鳥のしだり尾の。フシ永き日西に傾けり。地日脚は二時過ぐれども貝の鳴らぬは氣遣しと。心を痛め給ふ所に山も響かす法螺の貝オクリ風に、たぐへて聞えけり。地すはやと

人々色めき渡り。一聲吹くは名残の貝。三度吹くは悦の貝後を聞けと耳を澄し。其方の空を眺めても。只一聲のあともなく、フシあつといふにもかひぞなき。地判官浮世は是迄と。駈出でんとし給へば兼房御篠懸にすがつて。詞は口惜しき御有様。辨慶が詞はや御忘れ候か。御身命全うして御本意遂げさせ給ふこそ。大將軍とは申すなれ。地生過ぎたる兼房御名代に關所に駈付け辨慶一所に討死せんと押しむればいとよ。大將の身を立て世に出でんと勵む事。全く我が身の爲ならず。附隨ふ者どもを一國一郡の主ともしたき願なり。屋島にて繼信吉野山にて忠信が。我が命に代りしさへなんほう今に残念なり。地辨慶に限らず十一人の郎等。一人にても失ひて義經存らへ何かせん。此處を放せと宣へば兼房も力なく。思ひきつたる龜井片岡伊勢駿河。備前鷲尾熊井廣綱常陸坊。一足もたぢろかじ關の戸を枕に屍を並べん。進めや進めヲ、尤と。大將にひつ添うて關路にかゝる勢は。子路が石門楚の鴻門閻魔の廳の鐵門も踏破るべく三重へすさまじし、フシ聞きしに勝る。地安宅の關二重の矢切二重の柵。貫の木海老錠しつと、下し。辨慶を高手籠手に縛め大將富樫が怒れる顔。義經はつとたまりかねしや飛びか、つて繩切りほどき。富樫が直中指通さんするその氣色。南無三寶と辨慶人目の隙に判官をねめつけねめ

付け心の中は早瀬川。もまる、波の川柳フシ空眠。して居たりけり。地義經番所につ、とより。詞東大寺勸進の山伏奉加つかずばつかぬ迄。この先達には何科あつて縛られし。粗忽の繩かけ本地本山より鎌倉殿へ訴へられ。僻事したる富樫殿後日の罪科笑止々々。地いで先達の繩解かんと立寄り給へば。番の者一度にはらりと取りまはす。左衛門聲をかけヤア、痴れたる山伏かな。詞この一卷はあの法師が。勸進帳となづけ天もひゃけと讀上げしを。奪取つて披見すれば是見よ。勸進の趣は一字一點もなき往來の巻物。實らしき聲にてそれつら、惟ればなんどと。詞佛を偽り人を欺く曲者。けに夫も理。彼こそ西塔の武藏坊辨慶。鎌倉殿の御下知によつて擲取つたる左衛門が僻事か。ム、ウあの先達を辨慶とは。色黒く背高く似たるを以ての證據ならん。地天下の關所に胡亂の判斷正しき證據承らんと。詰めかけ給へば左衛門からくと笑ひ。詞ヲ、天下の沙汰に非のいる掟あるべきか。辨慶が繪圖は見よと。地一軸さつと懸ければ面付眼ざし手足の作丈は六尺二分にて寫しもうつす辨慶が。左の臍の黒子迄ありくと寫せしは。遁れがたなき御運の末。フシうたてかりける次第なり。地義經今は詮方つき辨慶が圖のあるからは。定めて判官の繪圖も候べしもとの罪科は判官一人。繪圖に合せて擲取りあの先達

を助けられよ。サア出されよと思ひきつたる御容顔。調いや繪圖迄もなくさいふ御邊が判官殿よ。地搦めよ討てよとひしめけば。御供の人々すは事こそと各太刀に手をかくる。辨慶つゝと寄つて義經をかはと踏倒し。腰の番をどうくんと四つ五つ。踏付けくはつたと睨んで。強力上りのかす山伏。年かさ達を差置き最前よりの差出面。憎し〜と思ひしに。義經の繪圖に合せ似たる者を搦めよとは。おのれが似たらば何とせん。この法師も辨慶ほどはあらずとも。いでといは、五人三人かゝつても搦めらるゝ者ならねど。地おのれは元來孤兒の父もなく母もなく。一人の兄弟子に見放され漂泊ふ體。骨髓に徹り不便さに。行末安穩ならせんと關守をなだめの爲。鬼神といはれし人にさへ指もさゝれぬこの法師が。雜人原に組敷かれむざくと繩をかゝりたり。某がかゝらねば汝にかゝる此の繩。たとへ千筋萬筋も手足の繩は解けば解く。名にかゝつた一筋は子々孫々まで解けぬぞや。諸國を勸進し大伽藍建立の。大願を忘れたか罷立て強力奴。なう同行の客僧達彼奴引立てて歸つてたべ。調この兜巾襜懸は山伏たる身の主君なり。地主君を踏んだるこの天罰未來の無間はいかゞせん。全く汝は戴かぬこの兜巾襜懸の。主君をいたゞく許させ給へ御免あれと餘所に事寄せ義經の。御膝に額をつけ戴き〜

フシ聲も。惜ます。泣きければ。地義經はなほ咽せかへり御供の人々も。共に涙の人目の關。包みかねたる有様は。フシ目もあてられぬ次第なり。地岩木をむすばぬ富樫の左衛門御痛はしさ肝に染み。調源家無雙の名將武士の司の御身にて。富樫に腰を屈め給ふ御運の程の痛はしや。地かゝる君を苦むるはよつく我が身の武運の盡。子孫の末もそら怖しこの君を搦取り。喜見城の樂の恩賞も何かせん。助けてや通すべき兎やせん角やと。暫く心を碎きしが番所を飛下り辨慶が。縛を解いて捨て大聲あけ。調エ、烏澁がましき山伏ども。汝等判官辨慶と名乗らぬばかりに作りなし。この富樫をたばかれども鎌倉殿の御目鏡にて。お關所を守る某實否を知らであるべきか。實の判官辨慶にあらず汝等は。此の頃數多切つてかけたる山伏の法眷一類。その怨を報ぜん爲判官辨慶に人相似たるを選出し。左の毗に入黒子してそりや辨慶よと搦めさせ。鎌倉へひかれ此の左衛門を粗忽者不覺者と切腹仰付けらるゝを。見て腹癒んとしたくみ汝等が面に現れたり。地不敵者烏澁の者五十日も百日も。關所に繋ぎ憂目見せんと思へども。實の判官辨慶を穿鑿の邪魔となる。汝等留めて何かせんサア通れはや通れ。貫の木開け承るとくわつと開きし關の戸や。人々胸の闇の夜に。フシ月の出でたる如くなり。判官も辨慶もはつと許りに

嬉しさは。富樫が心に正八幡入替り給ふかと。頭を下げんとし給ひしがいや／＼この上こそは大事ぞと。詞少しも騒がすこれ左衛門殿。元より實の判官辨慶ならねば助けられても悦ばず。山伏道の作法にて申分はあれども。俗人に對し問答も無用。通して後悔めさるゝなど地心は先にいそげども。足許は悠々と方一町の番所の前。千里を歩む心地にて行過ぎ給へば下部の雜色。笈にあたつてからり／＼となる音に。詞ヤアこの笈には鎧あり留れとこそ。富樫おさへて扱巧んだり／＼。判官殿に似せんとて鎧迄入れたるな。この行先に井上左衛門上田の兵衛が固めたる二ヶ所の關あり。是にても亦判官顔して關守をなぶるは必定。地憎さにもくし次手判くれんすと。一札に印判するサア。詞是を持つては汝等が何方にて判官辨慶と騙つても。地いつかな咎むる者なしと笈に投入立歸り。辨慶にかけたりし繩取上げて押頂き。忠功武勇の賢臣に非業の繩をかけたらし。富樫が罪を弓矢神許し給へと懺悔の涙。詞武藏坊は振返り日暮までひまどつて。一錢の奉加もつかぬエ、吝い關守やと。はつたと睨んで心中には富樫の左衛門武運長久。弓矢の冥加ましますと人を祈るも君が爲。摩利支尊天五番神諸天善神毘沙門天。判官殿の陰身に添ひ御手をひいて奥州に。送届けて末繁昌と悦びの貝おつとり／＼。天も響け地も裂け

よと吹立て。／＼／＼關の戸に。虎の尾を踏み毒蛇の口遁れて越ゆる君も君。臣も臣たる鐵石の。その一心の矢先には向ふ。敵こそなかりけれ。

第五

地鳥の空音ははからねど佛神の感應にや。判官安宅の關を越え秀衡館に入り給ふと。聞くよりも大津二郎靜御前誕生の。若君諸共誘ひて陸奥さして草枕。朝立つ道の露深き。フシ青野が原に着きけるが。地御産後の長旅御苦勞千萬少御休息遊ばせと。火繩に煙草道芝の。オクリしばらく疲れを晴しける。フシ向ふの森より。地飛脚と思しき中間二人いそがしけに來りしが。詞なんと八内身共等ばかり無上に急いでもすまぬ事。煙草でもくらつて旦那の御出を待合はさうではあるまいか。地こりや一段よかんべい幸此處に煙草の同行。火繩無心申すべいと。間近く寄つて靜の顔不思議さうに打眺め。詞ム、こゝな男あちくつな連があるな。まだ十九か二十計むまか物の根元。むつくりやはりの吸付煙草白癩甘露の味がすべい。口あたりの好いまゝに吞過しめさつたら命の刻煙草。願ではひ吹の吸殻にならぬ様に。地山芋でもかつかぢつて。フシ用心しめせと打笑ふ。地二郎をかしくヲ、樂みは同じ事。詞貴殿方は女こそ連れられね見事な提重かた

けられた。地この陸奥の山々おつひらいた風景を肴に。食べつおさへつなさるゝなら楊貴妃を
 だいてねたにも勝らう。今宵は夜寒我等も餘座にかゝりたし。先づ提重下されよと手をかく
 ればア、く。詞粗忽すな若い者。食氣飲氣の類でなし。忝くも此の箱の中なは義經追討の院
 宣というて。地王様の御状むさと下には置かずといふ。地二郎も静もはつと驚き。詞ム、して
 してその院宣を。何方より何方へ御持参あるぞと尋ねれば。二人の奴口を尖らし。はて根問ひ
 葉問ひする男だ。おぬし京者ならば音にも聞かん。判官殿十二人の作山伏に様をかへ。奥州秀
 衡が方へ落ち給ふ故。頼朝公御怒強く。義經を討取れとの院宣を申下し。身等が主人梶原殿承
 り。夜を日について奥州へ急ぐ。何と位はおされぬものでないか。義經が雷でも秀衡が鬼神
 でも。院宣といふ道具落しに出逢つては動くものでをりない。義經が首が飛ぶは手間も隙もい
 らぬ事。地ヤア長咄に御先手の高提灯が是へ見える。さらばくくと立つ所を二郎隙さす抜打に
 天邊より縦割にすんど切つて切り据ゑたり。連の奴驚き狼藉者どつこいと。刀の柄に手をかく
 る抜かせも立てず兩膝薙ぎ。返す太刀にて首打落し。院宣の御箱を易々と奪取り。サア御頂戴
 御頂戴片時も急ぎ我が君へ。我等が土産は静様静様のおみやは若君様。若君様の御土産はこの

院宣。もはや何を買はいでも。此の上はなき三つのみやけ陸奥さしてぞ三重へ急ぎける。フシか
 くとも知らず。地御馬屋の喜三太静御前をやみくくと。梶原源太が手に渡し再び奪返さでは。
 存らへて何かせんと命を懸けて尋ねれども。その行方はしら波の古跡を今に熊坂がフシ物見の
 松に行きくれしが。地あの土手傳ひの高提灯ゆゝしき大名一頭。近付く馬上を能く見れば梶原
 源太景季なり。詞ヤア彼奴が夜道の急ぎの旅は曲者。地忍んで事を窺はんと。物見の松に攀上
 り。フシ身を潜。めてぞ居たりける。地程なく梶原打つて通る先供の徒士の者。二人の死骸を
 怪しみ提灯上げさせヤア。詞是は御内の八内團平斬られたり。一大事の院宣箱を奪ひしは山賊の
 業でなし。地ほつ詰めて見よ探して見よ。西よ東と騒ぎける景季馬より飛んで下り。詞ヤア静
 まれノ、苦しからず。心懸ある侍の智畧を見よ。判官のゆかりの者。院宣を狙ひ奪ふは必定と
 思案し。明箱を先へ持たせたり。實の院宣を中間原にかたけさせてよいものか。地實の院宣是
 にあり氣遣ひするなど。首に懸けたる錦の袋を差上ぐれば。郎等ども横手を打ち吳子孫子が謀
 も。是にはいかで勝るべき。智慧深き主君やと。フシ皆々あつとぞ感じける。地上なる松の喜三
 太智慧には我も負けまじと何かは知らず傍なる高札片手を延べてすんと引抜き。釘押しゆがめ

上より密とさし下し。源太が持つたる院宣の袋の緒にひつかけて。ちやくと梢に釣上げたり。景季大きに仰天し。詞手に持つたる袋がない。是は不思議千萬。地取落したかと膝の廻り草村分けてもあらばこそ。院宣を失うては判官よりも先づお旦那の首が飛ぶと。フシも下々迄も狼狽ゆる。地喜三太可笑さよい氣味だ。若黨がかたけたる弓の弦に打懸け。すつと引けばこりやどうだ。詞身も持つた弓がない。サア只事ではあるまい。皆用心と騒立つ。地鬚奴が一貫錢首に懸けたる青ざしも。いつの間にやらなう悲しや。是がなくては明日から拳固取何で食ふべい。地今朝迄は小豆餅今からもとの鑓持だと。フシ尻餅ついて泣き居たる。源太暫く思案し。詞ヲ、思付いたり。此處はかの青野が原熊坂が物見の松。地この所に憩へば。懐中の物も失ふと。傳へしが實にてありけるな。往還の妨といひこの景季をたぶらかすは。推參千萬樵夫を召してこの松を。根から伐つて捨てさせよと大きに怒つてひしめけば。喜三太もたまりかねながしの枝にすつくと立ち。ヤア、詞やかましい蠅蟲奴等。盗みは此方の商賣とらるゝは其方の油断。身の過はさし置きこの松を伐らんとは。地あたゝかな梶原片端掴み殺さん爲。熊坂の長範が幽靈。フシ今爰に現れたり。主従一人も残さず地獄の釜へ同道する。觀念せよといひければ。梶原かつらくと笑

ひ。ヤアぬかすなく。熊坂の長範が幽靈なれば。頭は入道の筈なるに。剃下頭の長範とはいか様曲者。騙事いふ舌の根引抜かんとねめつくる。地喜三太ちつとも動ぜず。ヲ、不審尤。娑婆にては入道なりしが冥土にては釋迦如來の御弟子。阿難迦葉そのほか五百の羅漢に紛るゝとて。還俗仰付けられ今の名は熊坂の長左衛門。四も五もくはぬ幽靈。地手なみを見せん待つて居れと。いふより早く飛んで下り無二無三に切つて入り大勢を左右にうけ。青野が原の花薄花を亂して三重。戦ひける。地思ひ設けし喜三太が。死物狂の切先に十六人斬伏せ。三十餘人に深手を負せ天晴源太と組まばやと。提灯も皆打破れ眞暗闇の青野が原。大手をひろけて廻りし所に梶原は曲者奴。組留めんと手を廣げ互にほうど行當り。詞わけなしに引組んで。ゑいやゑいやともみ合ひしが喜三太は旅疲。馬ざくり足ふん込み漂ふ所を。源太すかさず兩足かいて。大地にどうど打付け乗つかゝり。ヤア、曲者を源太が組留めたり。地下り合へやつと呼ばはる聲討洩らされたる中間我れもくと駈付け。詞下が旦那上が旦那か名乗り給へと。いはせも果てず喜三太ヤアうろたへたな。下なるが梶原組伏せられたといふより早く。源太が髻をむすと取つて引退くる。主を知らぬか馬鹿者の狼狽者と。地叫べども聞入れず踏伏せ捻ぢ伏せ叩伏

せ。フシなんなく繩をぞかけたりける。喜三太起上つてテ、いしくも仕つた。褒美には汝等が素首おとす念佛せよと。地切つてかゝればこりやどちや。扱は旦那を括つたか。熊坂の長範の盗人におひうつたと。フシ皆散々に遁けうせけり。詞喜三太景季をひつ立て。今殺すは易けれど判官殿への御みやけ。太儀ながら道中急けと引立つれば。景季齒嚙をなし。エ、下郎奴に誑られし奇怪千萬。殺さば殺せ一寸もにじらぬと。どうどすわれば太刀振上げこりや。是ぢやが動かぬかと。地刀のむねを首筋にひいやりハアウ動きますくと。一足二足歩み留ればまた冷やりハアウ歩みますと。拜みますと。ますほの薄。秋踏分けて宮城野や陸奥。さしてぞ三重へ急ぎける。フシかくて判官。地富樫の左衛門が深重の仁心にて。關所々々を恙なく打越え。奥州平泉に御下着あり躑躅が岡に野陣を召され。秀衡が方へかくと案内ありければ。三男泉の三郎忠衡を御迎として参らする。詞忠衡謹んで實に六十餘州に武士多しと申せども。父にて候秀衡一人を御頼みあつての御下向。地一家の面目末代の龜鑑。何事か是に如んと悦び存じ奉り。詞かねて新殿を構へ高館殿と名付け待入り奉る。御供の人々も安堵すゑられ候べし。假令讒者日本に蔓るとも。父秀衡に相従ひ五人の兄弟入替へ。御訴訟申す社ならば鎌倉殿も遂には

御和睦候べし。若しそれにも御承引なくば。恐れながら君を大將軍と仰ぎ御軍配に従ひ奥州者の鏑矢を。鎌倉に射込むか一つ。また當國に立籠り鎌倉勢を引受け。目ざましい軍仕るか。いづれの道にも判官殿を大將にて。秀衡一家を敵に持つ。頼朝公の御寢覺も心ようは候まじ。地末頼もしく思召し早御入りと申し上げれば。君を始め御供の人々秀衡の厚恩今にはじめぬ事ながら。父義朝と思ふぞと。フシ御悦びは淺からず。地かゝる所へ大津二郎若君靜を誘ひ漸くこの所にて追付きしが。靜は君ぞと見るより人目も恥ぢずなう殿様。詞是若君様生んだぞや。あの人は大津二郎とて熊坂が眷屬。磨針太郎の子なれども志を深くして。連添ふ妻の胎内を切裂き我が子の命を御身代。梶原に首討たせこの若君の安穩に。御對面あることは皆あの人情なり。嬉しい事悲しい事一年積る胸の中。何から先へ語らうやら。扱もくおゆかしやと。フシ嬉し涙はせきあへず。判官夢とも辨へ給はず。扱は汝は大津二郎といふ者な。詞幼き時は壬生の小猿とや。地靜は梶原に召捕られ大津二郎が。宿にて男子誕生し其の夜に首を討たれしと。詞諸國にての取沙汰聞く度に怨めしく。某昔牛若といひし時。母を害せし熊坂が一類と聞けば猶口惜しく。打洩らして無念なりと只今迄も思ひしに。神妙の心入親磨針が怨迄晴れたるぞ。この子

が爲には汝は親若に代つて義經が一禮なりと宣ひてスエテ御手をつかせ給ひける。何事にか大將の下郎に手をさけ給ふべき。高きも卑きも子に迷ふ。フシ哀れは同じ哀れなり。大津二郎は頭を下け。斯く有難き御詞下さるゝも。皆女房が命をくれたる貞節。地犬死は致さぬ段。草葉の陰にて嘸悦び申すべしとフシ不覺の涙に咽びしが。詞ヤ一大事を忘れ候と。青野が原にて梶原が下人に出逢ひし有様詳しく語り。地院宣の箱奪取り候と。御前に差出す判官大きに驚き給ひ。辨慶開けと御説の中よりつゝとより。詞是が我が君追討の院宣とや。平家を亡し木曾殿の狼藉を鎮め。天下太平に暮さるゝは誰が陰ぞ。實がいれば仰くと恩知らずの法皇殿。何の院宣引破つて紙屑買に賣つてのけん。地紅の總ねち切り蓋を明くれば何にもなし。詞辨慶箱を打拂ひ底叩き。あきれ果つれば大津二郎ハツたばかれし是迄と。腹を切らんとせし所にヤア待て。死ぬるなくと。地聲をかけて喜三太繩付の景季を引立て。大汗になつて馳來り御前に跪き。詞ありし事ども一々細に言上し。是ぞ實の院宣と錦の袋を奉る。地ヲ、出かしたく源太奴が分に能はぬ智略だて。此處にて討つてや捨つべき高館へや引くべきやと。御評定のその間に辨慶篋の中より子供土産の人形の。金風折若君に着せ參らせ。サア御世嗣の若君のお仕置はじめ。

お目通にて討つて棄てよといひければ。大津二郎つゝと出で。彼奴め故に我等夫妻の胎内を切裂き。赤子を害せしその恨あはれ拙者に下されば。千町萬町の恩賞に勝るべしとぞ願ひける。詞ヲ、仔細あるまじ心任せに計らふべし見物せんと御説ある。有難しと飛びかゝりやい梶原。平産さへ苦しきに汝故に腹たち裂きし。妻の苦患思ひ知れと。地太刀を逆手に胸先よりぐつと刺せば目を白黒痛いかく。痛い。痛いたい。綱をあらふが如くにして。兩方へ切りさばき。是迄は妻の恨。是れから我が子の怨ぞと。太刀取直し首打落し。サア本望は達せしと跳上つて悦ぶ聲。君萬歳と勇む聲源氏の惠。北南。西から東に陸奥の千引の。石も動きなき國もうるほふ民うるほふ。年もうるほふ閏年五月五月は十分に治まる。御代こそ久しけれ。

七行大字直之正本とあざむく類板世に有といへども又うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくならず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直之正本にあらず。故に今此の本は山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫て直の正本の

しるしを糺せよとの求に従ひ予が印判を加ふる所左の如し

竹本 筑後 掾 本竹 教博

正本屋 山本 九兵衛 版 印

大阪高麗橋壹丁目

山本 九右衛門 版

相模入道千疋犬

(七行九十二丁本)

近松門左衛門作

序詞 孟子梁の恵王に語つて曰く。庖に肥えたる肉あり。野に餓孳あるは、獸を率いて人を食はしむるの君。民惡んぞ與せん刑罰を省き稅斂を薄くし。仁政を施さば民進んで。堅甲利兵をも碎きつべしと云々。治亂の道の一筋も二つに分れて京鎌倉。北條九代の武臣前の相模守。平の朝臣高時入道崇鑑こそオロシ、猛威四海を。呑むとかや。地後醍醐の天皇第四の皇子成良親王。十五歳にならせ給ふを征夷將軍の號を蒙らしめ。鎌倉に据ゑ置きて天下の主と名ばかりにあるか無きかにもてなし。其の身は遊興、歡樂、恣に奢侈を極め。天道をも恐れず人望にも背きしかば。下萬民の恨み上一人の逆鱗安からず。此の入道を滅すべしと。後醍醐の天皇笠置の岩屋に籠らせ給ひ。大塔宮山門に旗を擧げ楠正成。赤阪の城に立籠る由六波羅の注進。調櫛の齒を引くと雖も入道事ともし給はず。討手ばかりを差上せ奇物を愛する餘。鬪犬を翫び大小名に相

觸れ色々の犬を集め。地月に六日の犬合せ日餌には魚鳥の味を調へ。金銀珠玉の頸玉綾飾を着たる犬。鎌倉中にあぶれても殿くべからず追ふべからずと。旅人は下馬し農民は。鋤鎌捨てて人も皆フシ犬躰ひとぞ成りにける。フシ既に暮れ行く。彌生の空。花の名残も止らぬに。フシ四季を分たぬ樂みは。地闘犬に如くはなし臨時の犬合せを興行し。將軍の宮を慰むべしと御迎の使を立てければ。御座の間の御用人五大院の右衛門宗繁。嫡子十郎宗房は御犬預りの總奉行。御前去らずの出頭殿しけに立廻り。如何に伺候の人々。今日は我が君より將軍の宮を御振舞。御犬に對していつくよりも禮儀厚く。作法紊され候なと我は顔にぞのめきける。地將軍成良親王御心にそまねども。相模入道に背かじと青侍少々御供にて。御館に入らせ給ひける相模入道座をも去らず。對々に褥を並べ扇を上げて。よくぞくはへくと招かるれば。出仕の大名誰あつて頭を下ぐる人もなく。將軍無念の御顔容スエテ立煩ひておはします。詞中にも武藏國の住人安東左衛門入道聖秀。座を立てて御前に。跪き額を地に着け。恐れながら御座席の御案内と。地先に立つて褥を上座に引直せば。將軍時の御面目。フシ御座に。直らせ給ひける。地五大院の右衛門居丈高になり。詞ヤア尾籠なり安東。君を始め誰あつて構はぬ所。御邊一人

して持立いやらしし。尤將軍位高しと雖も是は畢竟餅の型。今天下の主日本國の主君といふは我が君相模入道殿。主君を差措き地に鼻着けて三拜は何事。將軍にさへ地に鼻つけば御犬への禮は頭を土へ搦込むか。總じて關東の諸大名より犬献上せらるゝに。終に御分が狗兒一疋差上げず。御犬合せといへば何時とても不興顔。見苦しき仔細面君の御遊が氣に入らぬか。此の五大院親子が出頭して御犬を集むるが氣にくはぬか。サア口があらば御前で申せと脛を張つてぞ申しける。安東ちつとも騒がず。ヲ、問はずとも申さんと思ふ所。凡そ下人被官を接待すにも。客ぶり亭主ぶりといふ事は生ある者の役。鎌倉殿より將軍の宮を御招待罷り出でて請じ奉るは是御奉公ならずや。元より犬の御遊氣にくはねば御邊が取捌き猶以て氣に入らず。君は四海を手に握り六十餘州の武士の司。御遊とならば笠懸犬追物責馬などこそあるべきに。舞馬闘鶏に國を失ひし亂國の端。不吉とや申さん無道とや申すべき。我等が目には墓原に死骸を争ふ如くにて御遊とは見え申さず。國土の弊諸人の苦しみ。狗彘人の食を喰へども制する事能はずといふ。聖人の詞當れるかな。地都は合戦眞最中軍兵の御觸ならば。此の安東も手勢五百や七百は只今でも承らん。犬を持たねば善悪は。猶知らず。詞御邊は又犬の目利犬博勞。武士の本意は

知るまじと詞を放つて申さるゝ。ムウ武士の本意知つたか知らぬか試みよと。太刀の柄に手をかくる。地大將驚きそれ止めよ。兩方鎮まれ〜としきつて制し押鎮め。宗繁は身を捨てて主命を重んじ。安東は道を守つて諫をいゝ兩人兩輪の忠臣。必ず遺恨あるべからず。詞誠や安東には男子なく娘一人ありと聞く。禪門が仲人せん宗繁が一子。あの十郎宗房に妻せ。一家の因頼み入る今日より十郎に。三萬町加増し禪門が子分とすべし。地然れば娘は相模入道が嫁なるぞ。是に不足はよもあるまじと宣へば。安東は心底に大慾不忠の詔ひ侍。縁を結ぶは心外ながら天下の主の嫁なりと。退引させん工面の上意。心にそまぬ有難さッあつとお請を申さるゝ。詞かゝる處に六波羅の早打衣摺の助房。鎧の袖を汗に浸し御白洲に謹んで。詞扱も笠置の軍味方御利運。城を一時に攻落し天皇は落失せ給ひ。大塔宮尊雲親王大手の櫓にて御腹召され候を則ち御首打落し實檢に入れ候と。御前に差上げ地大息ついたる其の有様。大將を始め列座の諸將。當家の運は萬々歳と。ッ悦びどよみ給ひけり。地將軍御無念肝に徹し飛びかゝつて入道と刺違へんと思せしが押鎮めて打しをれ。天皇は我が御父大塔宮は我が兄なれども。あさましき御心や候。詞今天下安全に治る事皆入道殿の仁徳。政道正しき故なるに御謀叛道に背き。十善

の位を去り刃に命を落し。天の責を受け給ふ。地我是を餘所に見んも世の譏り遁れ難し。高野山に登り出家して大塔宮の御菩提。父天皇の罪業を。滅し度う候とスエテ誠しやかに宣へば。詞入道笑つて膝立直し。年にも足らでうまく〜と此の禪門をたらさんとや。別心なくば助け置かんと思ひしに底の知れぬ性根かな。高野に登り出家するとて鎌倉を遁れ出で。軍勢を催し我に敵せん魂鼻の先に顯れたり。高野迄もなく近邊に能き山あり。如何に宗繁桐が谷の林の奥に押籠め。殿しく番を勤むべし。地早々と引つ立てさせ。上方の軍味方勝利。町人百姓三日三夜酒宴して悦べと。鎌倉町々相觸れよと簾中に入り給ふ。賑ふ民の鎌倉山。明日の嵐は知らねども今日の花とぞ。三重へ榮えける。ッ花は彌生よ。地娘は十九廿迄智選みせし一人姫。父の安東寵愛に名を繪合と付けたるも。空蟬夕顔若紫明石の君に押續き。雙なしとの。ッ心かや。地今度上意を以て權付の祝言。父が心にそまぬ上姫もはつと驚きて。癪の固まり胸先に氣を塞ぎたる氣病を。先づ養生の爲にとて箱根の湯本に湯治ある。腰元下婢五六人侍には里見義助。年若なれども才覺者。乗物の先はい〜。立派に手を振る男ぶり。簾掲けて姫君も。地腰元衆も目を放さずとも持つならあのよな男。ッ星月夜にぞ着き給ふ。地何とかしけん姫君ア、又

眩暈が来た。待てよ／＼と宣ふ聲。それ／＼お輿立てませと。腰元立寄り額を押へ輿より下し参らすれば。地六尺徒士衆しる／＼と、フシ遙か木蔭に隠れける。地女房達聲々に。詞これ義助殿。外の衆はともあれ。此方は常々お側近うも召さるゝ身が。此の御氣色を見捨て急な御用もあるもの。外様衆と同じやうに。地御前よけるは何事と言はれて義助きつと跪ひ。詞いや只今迄はお部屋住み。御祝言極りて當代誰あらん。五大院の十郎宗房公の御前様。地主ある花様花のお側へ立寄るは。鶯などの花車な鳥。詞拙者しきは鳥の中にも春の花に嫌はれ。夏山に吠えまはる。名さへほとゝ義助なれば遠慮致すといひければ。地女房達打笑ひ。詞ム、ウ姫君様の御祝言。法界格氣かこりや可笑しい。慮外な事言はずともこれ。お樂上ける随分綺麗な水一つ。それお乗物にお茶碗ある。地あいと答へて取出す袋の紐の長き世を。結びしめたる互の戀。末は夫婦となれ染付の。ハア、これ腰元衆。詞此のお茶碗はひゞきがある。聲殿は格氣深いけな。穿鑿あるは定のもの。大事の嫁入御寮地わしが割つたと御意なされな。斷つて置いたごと姫を後目に睥め付けて。茶碗の錦波の綾星月夜の淺井の水、フシ汲み上げ御前に参らす。地姫君茶碗は手にも取らず顔つく／＼と打眺め。詞何やらぎす／＼當言ぢやの。祝言とやら嫁入とやら

すき好むと思つてか。此のお腹の痞を見や。地月代刺つて大小指いたいといし痞が胸先に。なづんで物を思はする。此の水も先づ下に置いて。嘘か誠かは見やと。襟から手に手を懐へぢつと引入れ引締めて。それ其の痞むつくりと高い手に觸るか。其の茶碗のひゞきは誰が入れた覚えがあらう。割れてぞ末に石うるし、フシ離れはせまいと宣へば。地女房達は氣を奪はれ。こちとは男に事缺け茶碗ひゞき入れる者もない。ア、見る目も辛氣な皆此方寄りやと。氣を上げ氣を揉み茶碗と茶碗。身をすりぬかのぬか働き隣オクッ、羨むばかりなり。地かゝる所に御靈の宮の方より中大名と思しきが。御印押立て打つて来る。あれは御用の役人と覺えたり。出會うてはむつかしと先づ乗物に乗せ参らせ。女房達も乗物昇く六尺は手を振るやらあわてふためき行く所に。金柱の四方輿眞紅の總付五色の布團。狐斑の犬を乗せお徒士足輕いかつ聲。詞こりや／＼お犬のお通り。乗物据ゑて下馬致せ。地下りぬか／＼。下りずば其奴乗物撲ち割り引摺り出せとどつと寄る。義助飛びかゝり二三人かい掴み取つて投げ。詞狼藉千萬身が主人は女中なれば。貴人高家に乗り逢うても乗打ち御免。なんぞ畜生に下馬とは此の男が供するからは。天地が翻筋斗するとても如何なく思ひも寄らず。地お輿参れといふ所に犬奉行齋藤文治利行

聲をかけ。御ヤア／＼うぬは誰が家來で理窟ばる。忝くも上意によつて我々さへ。徒歩跣足にて御犬のお供する。是が眼にかゝらぬか。二言と吐かば元首ぶち放す合點かときめつくる。イヤサ首討たるゝが悲しいとて畜生に下馬罷りならぬ。犬奉行の刀などで聊爾に人の首落さるゝ物でもなし。物は試しサア落さるゝか落して見よと。地兩足ぐつと踏み伸し兩手をフシ組んで立つたりけり。地お犬に慮外の曲者は討棄との上意。それ遁すなとひしめけば繪合乗物轉びおり。御尤々々あの者の存ぜぬ事。自らが乗物下りお禮致す上からは。地いざお通りと土に手を突き給ふを見て。義助は無念の齒を喰ひしぱり。胸を擦つて控へたり。御チ、よい合點。是は此の頃の犬合に疵を受けたる病犬。養生のため暫く此處にて休むる。地其の間は往來の人止太儀ながらお待ちやれと貴人高位を敬ふ如く、フシ法に過ぎてぞ見えにける。地父の安東鶴が岡の下向通。かくと聞くより横切れに走り付き。娘繪合の腰のつがひどう／＼と踏み付け。向へかばと蹴倒しすつくと立つて。御ヤイ此の聖秀が一生に人間は言ふに及ばず。一切の物懸にかげし事なけれど。畜類に頭を下けたる奴。手が穢るれば臍で蹴るより外はなし。安東入道聖秀が娘などが。犬に下馬してのめ／＼と宿所へ歸らんと思ふか。七生迄の勘當罷り立てと睥め付

くる。地姫は涙に伏し沈み我とても無念には存ぜしが。乗打すれば家來迄助けぬと。嚴しき咎めに前後を忘れし不調法。勘當は御免あり其の代りに手にかけて殺してたべ父上と。スエテ縦り付けば又蹴散らしはつたと睨み。御己れ今迄の身と思ふかや。君の御仲人にて五大院の右衛門宗繁の嫡子。十郎宗房に縁組仰付けられ。殊に宗房を鎌倉殿の子分になされ。安東が娘は相模入道が嫁なりとの上意。なんほう有難く存ぜしに。地諸人の見る前犬畜類に下馬をして。天下取の嫁になるべきか。五大院殿とは縁切れたり。エ、大事の夫を持ちぞこなひ。親も身に過ぎた大事の聲を取損ふ。言語道斷の女め娘でなし親でなし。生涯の勘當ヤイ義助。御己れが在所は上野の國新田と聞く。武士の名所なれば生國も香しく。心ばせに見所あつて姫に付け置くかひもなく。五大院殿へ言譯なし暇をくれた地立つて失せうと急ぎに急いたる顔色に。頭をうなだれ腰屈め、フシ惜々として立出づる。地繪合も義を思ふ親の詞のはし／＼に。心ありとは聞分けても勘當との一言が。耳にも身にもしみ／＼とスエテかきくれ歎きおはせしが。なう嫁入は元より好まぬ事。男子の勘當を餘所に聞かさへ悲しきに。まして女子の我が身の上勘當受けて何とせん。母様の今はの時。繪合が事は父親が預つた受取つた。地心安う往生あれと死に行く人

に御契約。母様は嬉しげにそれさへ聞けば成佛と。笑うて臨終なされし事よもや忘れはなされまい。勘當程の憎しみは身に於て覚えなし。さりとは許してたべ。供の者ども情ない。詫ことしてくれぬかと。土にかつばと平伏して聲も。惜まず泣き給ふ。地父もうろく涙にてやれ母が契約忘れはせぬ。是非勘當を受けまいとなれば。父が切腹する迄と太刀の柄に手をかくる。ア、地これなう勘當受けませう。未來迄も勘當して自害を止つて下されと。スエテ縄り付けば。ム、詞然らば只今よりは。親でなく子でもないが合點か。地如何にもく親でなければ自らも娘でなし。詞然らば他人そこ立去れ。狼狽へて長居せば此の刀此の腹へ突つ込むサア地なんとと押退けられあいと泣出す目もくれて。親の名残の悲しきに未來をかけし夫の行方。心一つを跡先に急ぎかね止めかね。先を見送り跡見返り聲の限りを泣き別れ。供の侍下部迄。御痛はしと泣き叫ぶ。フシ目もあてられぬ次第なり。父もせき來る涙を包み。詞これく齋藤文治。五大院の右衛門に此の方より使者を以て申すに及ばず。御邊則ち犬奉行もと犬より事起り。娘勘當致す上は縁ふつと切つたる由。急度相達し給はるべし。エ、地恨めしい此の犬のゆるゑ大事の聲を取損ひ。近頃残念々々と口には言ひて心には。犬同然の佞臣につながる縁の頸玉を。我が

身にぬけて犬にかけ義を守つたる武士のオクリ信の道こそゆゝしけれ。地齋藤文治跡見送り。詞聞かれたか方々。さて偏屈なる古流者。詔で立つ當世。犬を禮拜してなりとも立身するこそ利發者。地誰が褒めもせぬ義を立て。身の損知らぬ大痴漢と一度にどつとぞフシ笑ひける。地かゝる所に編笠目深に引き被ぶたる若者。間近く寄つて笠かなぐり。詞拙者は以前御覽の如く。安東左衛門入道聖秀が家來。犬について主人に扶持を放され候。少切米の奉公人。身上の敵を取らでは諸親類の存する所。尤世間も立ち難し。然れども鎧の柄をも握る者。犬を相手には仕らず。差向ふ相手は相模入道殿。随つては御出頭犬の預り五大院の右衛門。是に恨を散する迄は事延引。地先づそれ迄の手合せと。いふより早く抜討に。犬の胸中フシ眞一つにぞ切つたりける。すは狼藉者それ逃すな。小疵を付けて叩き伏せ搦め取れといふまゝに。文治は二間柄の十文字刀を捲いてはね落さんと。上下に振つてかゝる所をはつしと弾いてつと入り。印付の金物より斜にかけてぞ切りける。若黨足輕中間犬牽抜きつれく討つてかゝる。眞中に割つて入り面も振らず。三重切りまくり。地刀の刃はさゝらと成り物うち折れて失せければ。からりと捨てて大脇指眞甲に差しかざし。暫時が間に十七人手負八人切出したり。詞文治寄つ

て死に狂ひに味方損すな。御屋形へ注進し加勢を乞うて搦むべし。地其の間は礫を以てあひし
らひ。遠責せよと草を引き。砂を掴み投げかくれども見向きもせず。星月夜の水に口潤し。顔
の血洗ひ刀を逆手に振りすゞぎ。のつたる切先踏直し相手ほしけに鬢かき撫で。手足の筋を揉
み和らけ。フシ悠々として控へたり。地斯くと聞くより十郎宗房捕手の七組七十餘人。百人組の
篝の役。熊手鷹口肩けさせ眞黒になつて駈付け。詞安東が下人狼藉者とはあの者な。彼奴が主
人安東某を聲に嫌ひ。娘を勘當し縁組を切つたる條奇怪千萬。郎黨めが犬を害せし重罪。搦め
取つて急度殿科に行ふべしとの上意。彼奴は死武者大方にては敵ふまじ。地大梯子を五六挺横
に垣楯しよりを付け。四方よりしめ寄せ組手を入れて組ませよ。承ると大梯子。投伏せし八
方圍んで押寄せしは。フシ遁れつべうはなかりけり。詞あら事々し今は何をか期すべき。清和天
皇の後胤新田義貞が弟。脇屋次郎義助と本名乗つて切つて出ようか。地いやく天下の大事
爰に限るべからずと。袖引きちぎり鉢巻締め。力足踏んで待ちかけたり。詞捕手の一番輪違九
郎二番能登の彦六。三番糟谷の與次、山甚藏、狩野五郎。地敵一人に捕手は五人。組まんとすれ
ば切拂ひ討つにも組むにも易からず。周圍に大勢聲をかけ。そこを討てそこを組め。やれ組め

やれ組め組んで取れと力を付くる関の聲半時許りぞ。三重へ揉み合ひける地難なく三人切殺され
二人は半死半生エ、喧しし。詞宗房に見參せん。怪我すな其處退けと飛出でんとする所を。握
の與一熊手を取伸べ鬢に引つかけいと引く。南無三寶と折れたる刀取直し。鬢ふつと切る
所を。篝の者ども鷹口熊手。おつ取りし襟に引つ懸け帯にかけ。裾を捲いて打倒し打倒して
は差上げ。あけつ下しつ二三度四五度宙に上げて喚きしは。祭の提燈さす如く。フシ無念なり
ける有様なり。詞宗房大きに悦び。殺すなく犬の繩にて括し上げよ。地承るとどうど下し大
地へ打付け。踏付けく八重無盡に縛め引つ据ゑたり。繩取引立てずんど立ち。詞エ、冥加知
らすの畜生ども。汝等が主君と仰ぐ相模入道が先祖。北條の四郎時政は。頼朝公の家人にて代
代源氏の被官。元を忘れ天理に背き。一天の帝を苦しめ奉り。民を惱し奢を極め。畜類を愛し
人の命を軽んじたる。地其の恨み幾何ぞや。相模入道に近付き一刀刺いて。天下の恨みを散ぜ
んと欲する所無念やな時知らず。犬に劣りし蠅蟲に搦められし奇怪至極。詞サア相模入道が前
へ引出せ。睨み殺して捨てんに何事かあらん。義助を縛ると思へども此の繩却つて天道より。
入道を始め汝等親子一族恥辱の繩にかゝらん事。地あれ見よ天に日月星辰あり。地には堅牢地

神あり八百萬神七千餘座。神あればこそ社あり神あらば善惡の。罰利生なくてあるべきか。神に預けし縛り繩かゝるも義ありかゝらぬも。義助が運命天にあり。引くと思ふな供せよと左右の繩取引つ立て。く、四邊を蹴立て先に進みし其の勢。文王の羨里の繩。越王の智謀の獄屋敵に取つて恐れあり味方にあつて頼みあり。最も仁義の勇者かなと見る人感じ聞く人慕ひ。會稽山の峰の月輝く。時をぞ待ちにける。

第一

地文王の固は方七十里民猶是を狹しとす。愚將の地には廣過ぎたる。鎌倉の體たらく相模入道いよ、犬を寵愛あり。方八町の犬圍矢來を由井の濱面。普請成就の其の日より大小名の献上犬。御朱印地の社司法師御機嫌にあづからんと。我劣らしと引き參らす唐犬和犬數千疋。蜀山の日を迎へ梢に吠ゆる聲。暗く。犬奉行の總目附五大院の右衛門が一子。十郎宗房假屋の權柄威を振ひ。其の外犬醫者犬扶持の役人。犬に敵する輩は刑罰に行はれ。人の命は塵より軽く。犬を重んじ尊む事。フシ主人貴人の如くなり。地安東入道が郎黨里見義助。犬を斬つたる罪科とて。共に犬牢に押籠め。犬同然の犬扶持に命も腕も繋がれて。十日の見る所十手の指す身

の恥辱。繪合姫の行末迄思ひやる方泣く涙。絞り盡せば血と成つて兩眼ひしくるばかりなり。直ならぬ世の道暗く。歪みながらも頭押。家役神役にかけて犬扶持を運ばする。其の日過の町人百姓親や妻子は餓ゑても。權付なれば身代ありたけ。フシ抱いて跪ふ犬圍。詞是は稻村の百姓今日親の年忌に當り寺へ上げのお齋米。先づさし措いて持參仕る。地出家の代に毛の禿けた。はけ犬様へ供養願ひ奉る。フシ南無阿彌陀佛といふもあり。私は跣の月女房去り暇に臼を取つて失せ。手前にはやうく、杵一本の振廻し。搗く事ならねば黒米の握飲黒犬様へ差出す。下拙めは尾羽を枯らせし素浪人。槍長刀馬鞍迄飼ひかふ犬に喰上げられ。のめく、腹もきらず食。御犬なれば浪々の身恥かしながらいふもあり。次は京町白粉屋の白犬扶持。富士見町の鹿子屋からは斑扶持。唐物町の唐犬扶持。傾城町のすいけん扶持色里のむく犬扶持。新町古町三百餘町築地宮地に至る迄。或は五疋十疋分米穀魚肉山の如く。毎日々々持運ぶはオクリ無益に、亦夥し。ハルフシ唐の大和の。名筆も。地心の底の暈取をえやは寫さん繪合姫。長地父上には不興を受け夫は我のゑ犬牢に頸玉ならで首綱の。かゝる因果を佛神に。祈る其のかひ。フシ嵐の音に。聞けば最期も近付くとや。二世の契りに互の顔見度い見せ度い念力一つ。男童の頬被。人

目包むや風呂敷に。破籠小竹筒をちよつこりと肩にかけたるしどけなさ。酔はねど態と酒の酔
 歌思ひ忘りよはく通ひサツトセイ。通小町の百夜が一夜逢ふか逢はぬかあひく枕ヨイヨナ
 ヨイヤサ フシよい姿。詞ハア爰はどこぞ由井の濱とはいふかひもなき。妹背の中を辛や隔
 ての犬圍ひ。地犬の聲々忍ぶ夜の憎さも思ひ合さるゝ。戀の關路の悲しさよ恨めしの海面や。
 波にも男波女波あり松にも雌松雄松あり。松ともいはぬ磯の松やい其處な松の木。詞なんと女
 房が無い。あればこそ高砂住の江の岸の姫松年を経て。相生久しき諸白髪。我も白髪の神か
 けて誓ひし人はあれくく。地あの竹垣のうちしをれてやおはせんと飛立つばかりゆかしさ
 の。フシ餘りて脆き。涙の玉目に包めども宗房が。それと悟らば恐ろしと暫したためらひ居たり
 しが。詞エ、なんの大事か男に遣つた此の命。地顯れてから死ぬるが高咎むる迄と役所の前
 足早に行かんとす下部ども立騒ぎ。詞ヤアく御前が近い。頬被は慮外者下れくく口々に咎
 められ。役に當つてお犬様の飯持つて来たが何ぢやくくとフシ酔うた振して行過ぐる。地宗房
 つつと寄つて頬被ひつたり。詞なま若い女の面に似合はぬのふづ者。犬扶持持つて来たらば。
 是に置いて帳に付け歸れくくと言ひければ。いやくく。此の飯は常の犬には喰はさぬ。

とつくりと目利して。私が氣に入つた犬でなければ喰はさぬ。此の前私が小さい時。伊勢參宮
 した其の道で。牝犬と牡犬とが戀をして。其の牡犬はがんまくなわやく者。四邊の人が立ちか
 かりそりやぬけ参りく。是がほんの抜参りと笑ふやらわめくやら。可愛や女子犬が。恥かし
 さうに迷惑がつた顔付。エ、あの牡犬は。女子を術ながらする。我武者な憎い奴ぢやと思つて
 今でも佛おちかひに立つて。男犬といへば憎うてくくどうもならぬ。それで此の飯も牡犬には喰はさ
 ぬ。女子犬の可愛らしいを。私がつくりと見立てて喰はする。ほんに思へば其の時の牡犬の
 顔が見度くば。すつきりこなさんの面ぢや。見れば見る程似たわいの。さつても似たり。こな様
 も何處ぞで抜参りしさうなお面ぢや。似たり地似たりと顔のぞけば。流石の宗房もてあつかひ。
 エ、鈍な女め。此奴喰ひ酔うたと見えた。皆々構ふなくくとフシ幕の内にぞ入りにける。地姫
 君飛立つ嬉しさの現か夢の浮橋の。繪合あこがれ参りたり我が夫なうと犬垣に。縋り付けば義
 助も戀しゆかしの妻の顔。これはくくとばかりにてスエテ泣くより外の。事ぞなき。稍あつて義
 助我ゆゑ父の勘氣を得。劔の林に分入る如き此處迄慕ひ誠を盡し。契を守る志。情の禮はなか
 かなに申さぬこそましならぬ。詞某とても御情に絆され理に迷ひ。不慮の難儀に身を苦め犬と

呼ばれ。地かく生きがひなき存命後れたり腰拔よと。世の人口も口惜しく舌喰うて死なんすと百千度思ひしが。いやく十善の君の勅命を帶せし義助。六十餘州とつり換への一命。今の恥辱は日月の蝕の如く時に當ればりなしと。命を繋ぐ犬の食天の助くる飲食と心中に押戴き。昨夕迄は、フシ食せしが。地警固の者ども寄り合ひて語り叫く聲を聞けば。詞大倉が谷に行馬を構へ。義助を引出し唐犬責に行ふとや。例少き非法の罪。無念とも口惜しとも。斯く迄惡逆無道なる平家は榮え。地誠を守る源氏の末氏神にも見放され。諸神諸佛も捨て給ふと浮世の望みふつつと切れ。今朝より食事を斷つて水をも飲まず。最期を急ぐ身の成る果。今生は畜生道來世は又餓鬼道と。牢の格子に額を當て。無念涙の忍泣き姫も盡きせぬうき涙理。せめて痛はしし。ア、遁れぬ運驚くべき道にもあらず。是迄の夫婦ぞと思ひ諦め片時も早く立歸り。父聖秀の怒を宥め。如何なる人にも身を任せ思ひ出す日もあらば。念佛頼むとばかりにて。フシ其の後詞もなかりけり。地姫君わつと叫び入り。人に添へとは誰が事よも眞實ではあるまいが。詞なぜそんな事いうて下さるぞ。親に替へて添ふ男佛の罰も厭はうか。ハテ死に來た娑婆世界。氣弱い事言はずとも生々世々迄女夫ぞや。かう胸が据るからは怖い事も急ぐ事何にもない。地コレ

此の一包は手づからの煮炊き物。何卒近寄り参らせ度く。犬扶持に準へし志は届いたり。此の破籠小竹筒にて御疲勞を晴されよ。死ぬると覺悟極めた上斷食して何になる。現世から餓鬼道の縁に引かれ給ふかや。未來は必ず一蓮托生。一日女夫よ夫婦よとて添うた事は無けれども。てしほにかけし食物拵へて参らすれば。世帯したも同然一生の思出も此の一時に晴るゝぞと。涙ながら風呂敷あけ小竹筒の蓋を假の膳。椀取り乗せる其の風情。宗房假屋の物見よりとつく見すまし。下人引連れ顯れ出で。すかさず寄つて姫君をはたと蹴倒し。詞ヤア鶴鶴の分として。鵬鳥を嘲弄すと最前よりの概略。給合とは推量したれども實否を見んため。馬鹿になつて窺ふ所に。正眞も正眞札付の繪合姫。忝も鎌倉殿仲人迄なされしに。己れようも身を嫌うたなあ。うぬが親めも此の宗房を聲に嫌ひ。世間のいひわけにうぬを勘當した。あの犬めに心中立しやらくさし胸わるし。さはさり乍ら此の食物犬扶持とあるからは。法に任せ喰はせうが人でもないあの犬めに。膳立は無益なり。地畜生の喰ふ物は先づ此の様にと椀折敷。土足にかけ踏碎き蹴散かし。ヤア誰かある雜桶に摺み入れ。安東がのら犬に喰はせやつと下知すれば。犬飼ひどもはしたなく砂諸共拾ひ寄せ。打込んで犬垣の首穴に差付け。來いくく喰へく

と呼びけるは、ッシ傍若無人と謂ひつべし。地義助顔出しえせ笑ひ。詞ヤイ女童に面當か。さもしい根性實に汝には似合ひたり。なに某を犬とな。ヲ、まつた某が眼には高時一家汝等を。犬にたかる蠅と見た蟲と見た。過分の所領を費し田地を損ふ蟻蟻に同じき己れ等。誠ある弓取の詞を交すもけがらはし。これ繪合姫此の食物を食する事。五大院が如き理に暗き。愚人はさぞおかしかるらめ。御身が切なる志手づから炊ぎし一飯を受くるが誠の夫婦ぞや。相模入道が七五三も天に背けば此の犬の餌に劣つたり。地是見給へと犬垣の首穴に顔出し。器に口を差入れ甘露々々と舌打し。世を非に見たる顔色にも包み兼ねたる涙の色。姫は二目と見もわかすわつと絶え入り身を悶えスエテ流涕こがれ泣き居たる。夫婦の思ひぞ哀れなる。詞宗房からくくと笑ひ。泣口には物喰ふと譬に違はず今日限る命にもひだるいを堪へ兼ね。恥面かいても喰ひたる畜生とはその事。ヤイ女あの態を見ながらも思ひ切る氣は無いか。おこといへば身が奥様いやと言へば三寸繩。地手短にサア返答いやか應かか詰め寄れば。姫君むつくと起直り。詞ほんにさうぢや誤つた我が心一つにて親を助け身を助かる。今迄の不届を御免あらば地兎も角もと寄るかと思えしが宗房が。腰刀奪ひ取り一打にと斬付くればひつ外し取つて伏せ。早繩かけ

てしめ上げしは、ッシ瞬く隙もなかりけり。詞エ、一度ならず二度ならず仕損せし無念やと。地牢の内外地踏躑ふみ顔を見合せ齒を鳴しスエテ歎かひもなかりけり。地かゝる所に上使として村岡與一、慌しくかけ來り。詞明十六日御遊覽の犬合今日の晴天に御覽あるべきとの御事に。君ははや大倉が谷へ御成ぞや。早速犬ども引かるべし。并に安東が手飼里見義助犬御見參に入れられよと上意の趣相述ぶる。地宗房畏つて承り其の役々に觸をなし。大總小總五色の總金銀珠玉の首繩俄に飾り引出す。地中に悲しや義助は繪合姫諸共ひつ立てられ。數千の犬の跡や先。現世も未來も戀路より。責められ責むる煩惱の犬も泣くく引かれ行くあはれ。果敢なき三重次第なり。地頃は元弘三年曲水の時なるに。闘犬兩陣に控へさせ一族の大小名。御内外様の人々大床に座をつらね。又は庭前に膝を屈して見物す。地時至れば兩陣より綾錦を飾りたる。犬ども數多引出し、ッシ一度に繩を切放し。圍の内へ追込めば行違ひ入亂れ。喰ひつ喰はれつ吠ゆる聲梵天を驚かし。河伯も棲家を躍り出で坤軸碎くる有様に。左右の列卒は金銀の采振立てノ圍をたき入替へく。三重合せけり。地或は急所を噛み切られ其の座に死するも數多し。又は尾筒を喰ひ斷られ足を損し逃ぐるもあり。血は流れて混々と屍は積んで壘々たり

勝負の扇指上げれば列卒の者ども圍に入り。犬を前後へ引分くる。フシ前代。未聞の振舞なり。
 地高時入道興に乗じて數盃を傾け。詞ヤア〜宗房。彼の安東が手飼義助犬を引出し。唐犬に責めさせよそれを肴に飲むべしと。地惡逆無慚の上意の旨承つて。二人の囚人御前近く引据る。詞此の女めは安東が娘給合姫。御説を背き某を嫌ひ家來義助と密通し。剩へ御犬小屋の番所を偽る大罪人義助めと同罪赦し難しと申し上ぐる。入道如何なる所存にや。安東が娘ならば重ねて詮議もあるべきなり。地先づ下郎めを行馬に入れ夕日朝日と名付けし。名犬に喰ひさいなませて見物せん。とく〜とありければ義助兩眼くわつと見出し。詞ヤア下郎とは舌長し。忝くも清和天皇の後胤。八幡太郎義家に十七代の嫡孫。新田小太郎義貞が舍弟。脇屋次郎義助とは我が事なり。エ、人畜知らずの相模入道。蹴鞠の様な頭を振り天下の政道預かる身が。萬乗の君を遠島に遷し。宮々を無體に押籠め奉る天罰知らずの國盜人。我々兄弟是を歎き命を君に奉り。萬民を救はんため假に安東が家來となり。汝が頭を望みしに。地運盡きて搦められ天下に比ぶる一命を。犬に喰はれて犬死するも君聖運の至らざる所ぞかし。見よ〜魂魄立所に天の犬と成り。我を行ふまつ其の如く引裂き捨てんと大聲上げ。眼に朱を打散らし。フシ怒りの。

涙凌じき。詞入道大きに驚き。扱は義貞が弟義助かや。愚人夏の蟲飛んで火に入るとは彼奴が事。地はやく〜罪に行へと詞の下より義助を繩かけながら。行馬に入れ。其の様勝れて逞しき唐犬二疋同じく行馬へ入れんとす。姫ははつと氣も消えて。是は如何なる行ひぞや義貞殿。御一族。此の内にはおはせぬか助け給へ入道殿。犬を斬りしも自ら故義助殿に科はなし。犬は愚か手裂きにも此の身を代りにあの内へ。入れてたべ人々と。躍り上り飛上り叫び。歎くぞ道理なる。時刻移れば武士ども引繩切つて追立つる。唐犬は明星をうつす眼の光義助を追廻し隙間を見て喰付かんと左右の牙を研立て〜飛びかゝる。義助も目を放さず畜生ながら平家の方人。一疋なりとも蹴殺し萬民の苦みを助けんと。右手へ廻つて喰付けばちやうと蹴返しひらりと退く。左手へすかさず吠えかゝればくるりと廻り躍り越え。心を配り働けど名犬二疋に喰立てられ。朱に成つて大童手は縛られて働かず。犬の急所に喰付き。〜争ひしは危かりける。
 三重次第なり。フシされども義助。地早業の達人隙間を窺ひつけ入つて。急所を右手の足下に踏まへ五臓の力を百足に。踏みしめて働かせず。残りし唐犬矢を射る如く來る所を左手の足にて撥ね返す。返せばもぢつて足首をかんじと噛む。喰はれながら其の足を咽へぐつと踏込めば

願裂けてさしもの犬フシ忽ち息は絶えにけり。地義助疲れし聲を上げ。詞コリヤ高時。人に代へて寵愛の犬を殺され。吠面ほえらかまへる心地よき。右手に踏まへし今一疋殺さぬは所存あり。ヤイ犬め。己れは最期の思ひ出に名を付けて得させんよつく聞け。己れが毛色赤き故平氏を名乗つて。相模守高時入道と改名せよ。君を始め民百姓汝ゆゑに苦しむる。地報いを知れ相模守。思ひ知つたか入道と。踏付けく踏殺し立直つて高時を。ちやうと睨んで立つたるはフシ人間業とは見えざりけり。地宗房を始め伺候の武士案に相違の其の勢舌を捲いて口ごもる。高時飽く迄難言せられヤアく手ぬるし宗房。しやつに頼けた叩かすなそれく若宮の神主より。献上したる白石こそ秘藏第一の名犬。放しかけて喰はずべし。早うくとあせらるれば。急ぎ御前へ引出す其の様に抜群して。骨太く逞しく岩をつくねし如くにて。總毛は白く白石とフシ名付けしもけに理や。地姫は身を揉み聲を上げ。慘や辛や胸慾や何で殺すも同じ事。腹を切らして侍の。屍の恥を雪いでくれヤレ。情を知れ武士と。返らぬ事の悔み泣き。ステエテ理過ぎて哀れなり。詞ヤア喧しい女郎め。己れが辛いは心から人が何の辛からう。情ある宗房が仕業を見よと白石を。義助に放しかけ。餘り手際が見事ゆゑ今一働ひとたらき御所望と。割竹取つて叩き

立て犬に力を合すれば。地義助今が最期ぞと思へども兩眼は。犬を守つて狙ひ寄る上下すはやと見る所に。白石後に飛付いて義助の高手小手。縛喰切り振解き。かへつて前に膝を折り尾を振り首をうなだれしは。誠に若宮八幡の。源氏を守り給ふぞとフシ思はぬ人もなかりけり。地義助心に信をなし有難しく。神力合せて千人力と行馬を跳ね越え躍り出で。椽えんけだ一本引きはづし當る者を幸に。雍伏せく高時を眼にかけて追ひかくれば。白石二人に引つ添うて寄付く者を引つ咬へ。八方へかけたてしは神變奇妙と。三重いつつべしフシ武道油断の。地大小名狼うろたへ太刀を抜く間もなく。恐れて犬を拜むもあり。嚙まれてはつと逃げ散りしフシ見苦しかりし有様なり。地義助今は是迄と立返つて繪合の縛解いて立つ所を。詞十郎宗房遁さじと一文字に斬付くる。きりゝとかはし裏へ抜け上巻あけまき掴んでくるくく。一振ひとふりふつて打付ければ微塵ぢんになつてぞ失せにける。地此の勇猛に威を吞まれ又向ふ者もあらざれば。長居は恐れ此方へと繪合姫を肩にかけ。心靜かに行く道は楚王やし虞氏よ(本ノママ)を伴ひ。百萬騎を追散らし人なき原を行くとかや。それは唐土虎臥す野邊是は神國犬の徳。神の恵と白石が。跡に續いて尾を振るく古き昔も新しき。今も例は只一人。詞力あり智謀あり男よし氏もよし。地よし心義

第三

助が。忠義は元より天の道すぐなる神の御心に叶ふぞ。誠なりにけり。

地天は文人の才の盡きん事を恐れて。常に零落して蓬生に居らしむとは萬の道に當れるかな。上野の國の住人新田太郎義貞は。清和源氏の正嫡弓矢を取つて東路に。一と指折り誰あつて新田に續くはなしと雖も。平家の權に世も狭き僅か一郡を安堵して鎌倉の勢に。押しまけらるゝ柳の枝。フシ風に従ひおはせしが。地先朝後醍醐の天皇より。相模入道追伐の給旨を蒙り。すはや源氏の花咲く世に阿武隈川の埋木の。春待ち得たる此の時と。元弘三年卯月下旬執權舟田入道を先として。新田殿の十七騎と天下に名を得し一騎當千大廣間に群參し。詞好む所の鎌倉攻め沼田の庄を要害とし。利根川を前にあて陣を張らんといふもあり。津張の郡に打つて出で上田山を切塞ぎ。越後源氏の御一族。待揃へてや攻寄せんと意見評定區々なり。地義貞元より天命を重んずる智勇の大將高棚に注連引廻し。給旨を安置し重代の白旗に。正八幡を勸請しスエテ三度拜し奉り。詞方々の軍評定其の理ありと雖も。地味方は勅命に應ずる義兵。敵は天道に背く賊兵恐るゝに足らず。各給旨を頭に當て。一文字に乗入つて谷七郷を攻破り。相模入道に

腹切らせん若し運盡きば鎌倉を枕にし。朝家の爲に討死し武勇は子孫を悦ばしめ譽は屍を清むべし。先づ今日は簇に供へし正八幡の御酒を戴き酒宴して。休息あれそれく舟田承ると。瓶子おつ取りお酌に立ちければお次に謠ふ一曲は。男勝りの女の聲々ウタヒ御酒をすゝめて盃を。とりふなれや梓弓。やたけ心の一つなる。武士の女房ども御祝儀迄にと。フシ立出づる地地紅地黒の襦袢や衣裳は同じ體なれど。上座下座の次々は面々連合々々の。フシ知行高とぞ見えにける。詞義貞御覽じゃ珍しい女子ども。先なは瓜生判官保が女房唐琴な。久々にて見損じたり残りは誰か見知らねど。定めて譜代の武士どもの妻ならん。今次にて謠ひしはお事等か扱扱聲がらといひ祝儀面白く満足せり。近日鎌倉進發につき。女ばかりの留守便なく殊に刃を争ひ生死を運に任ずる戰場。面々夫の身の上をさぞ案じ氣遣ふらめ道理々々。地追付け目出たく凱陣せん。門出祝ひ見立てよと宣へば唐琴進み出で。詞ア、恐れ乍ら大將様とも覺えぬお詞。連添ふ夫の身の上を思ひ案ずるは軍ばかりに限らぬ事。常々の出仕にも若し御機嫌に違はずか。御前の首尾はどうかかかかかと退出の顔見る迄は心の落着く事もなく。地傍輩同士の參會にも酒は過ぎぬか口論などはあるまいか。暑氣寒氣も當らぬかと。折につけての氣遣。ちと夜が更

くれば若し手かけでも圍うて無いか。どこの誰ぞと寝てではないかと。雲間の夜の當もない物案じ。是は女子のフシお定り。地此のやうに思うては軍のお供は。一日もやられさうもない物なれど。詞サア爰が自然と大將軍の御威勢。下知についてこつちの男天下に蔓る功名して。地武者の手本にせんものと度々の御陣立。氣遣の氣の字もなく。勇み進んで見立てしが此の度の鎌倉攻は。肝心と頼み奉る大將様のお身の上。一本立の様にしてお氣遣とも危しとも。井戸の端に子置いて。風に取り付いて天上するより危い事。此の御思案も無うふかふかと鎌倉攻。大將のお身軽々しう大事とも思されぬ。是と申すも自體奥様が無い故と。詞いうて此の軍用意に取交せて。御祝言の関の聲にさし合せ。三國一も諺はれまい。地兎に角危いお身の上やとフシ恐れけもなく申しける。地義貞お氣にさはれども態と座興にもてなし給ひ。詞ム、一本立とは心得ず。是見よ足は二本にて馬上なれば四本立。チ、出來たく。汝等が夫の足は三本あるとの自慢か。義貞が馬には足五本にはよもや敵ふまいぞと宣へば。地畑六郎左衛門時能が女房中川つつと出で。詞申し殿様。女なれども皆御譜代相傳の者の妻。諫言申すがお氣に入らぬかひやうまづいたる(本ノママ)お詞。總じてお旗の下に附く。軍兵の足も手も則ち大將の手足なれば。

お身さへ全うましませば。お足には事缺けず一本立の大將と。氣遣致す其のいはれは。御弟脇屋次郎義助様。地鎌倉案内検見のため。安東入道聖秀が徒士若黨となり。なされもつけぬ持奉公。雨降り風吹き雪霜にも徒歩や跣足の供使。様々の憂き御苦勞不慮の事にて犬牢に入り犬責にまで逢ひ給ふ。義助様なればこそ踏破つてお歸りは。一眼の龜が浮木に逢ひ。海月の骨に逢ふ例。詞お家中の悦び御知行の百姓は。筆食壺漿とやらでお迎ひに出で。地追手が搦手か一方の大將軍は義助様サア。天晴源氏の勢と勇んだ壺がぐわりりと違ひ。何のお憎みお恨みか。フシ御對面さへまします。今度は大事の鎌倉攻遠國の御一門召寄せらるゝ折柄。天にも地にもたつた二人の御兄弟。御仲不和では鎌倉の間えと申し味方に五分の弱味。詞御祝儀は申し納め軍の習ひ。若し討死遊ばさばサア。大將が無いわもう仕舞々々と。子供のまゝ事する様に手を叩いても仕舞はれまい。地木草の名花も一本立は危しと枯れぬ先より枝を挿木取木にするはかけ替への用心。ましてや御論旨を戴き官軍の總大將。蜈蚣の足程あるとてもそれは端武者も同じ事。詞鎌倉を踏崩す源氏嫡傳の御足が。片々缺けたによつて一本立の大將様。地ハア憚りな出るまゝばつかりお爲大事と存じまし。何やらすばくくくと。六郎左衛門聞かれたら

フシ叱られませうと申しける。詞義貞すんど居直らせ給ひ。扱は出陣の祝儀に事寄せ弟義助が訴訟よな。汝等が夫栗生篠塚畑巨理。入代り立代り様々訴訟しつれども。某片端利害を説いて言ひ聞かせ二言と言はず退つたり。血を分けし弟疎んずべき様なけれども。案内忍びで候とて安東入道が下人となり。何事をか仕出せし。但犬責にあうて命からしく逃歸りしが手柄か。地彼安東は敵方にても名ある弓取。五常を守る老武者。殊に相模入道が悪逆を見限り果てしと傳へ聞く。是ぞ幸義助が才覺を以て。味方に従へ連れ來るか。但鎌倉の内通して裏切さする約束か。何でも味方に利を得んと。明暮待ちたるかひもなく。詞漸う犬の頸玉通れ。繪合姫とやらん安東が娘を連れて立歸り。のめくくと兄に見參とはよつく義貞を見立てしな。先祖八幡太郎義家より以來。敵方の娘に戀慕し其の色に絆されたる軍法は當家代々其の例なし。地兄弟の對面は先づ此の申分立てて後の事さつ御氣色。變つて仰せける。地巨理新左衛門が女房。鈴鹿といふ目口かわきの髮際者。未座を立つてしやなくとお側近くも憚らすゑいと。詞私は御内の巨理新左衛門が女房。餘りがらく喧しう口きくと。名さへお鈴と申すからは申し過しも御免なりませ。最前唐琴申す通り殿様程の名將なれど。奥様お持ちなされぬ故。肝文の鹽梅を御存じ

ないが玉に瑕。弟御義助様のお心をつくつくすもじ致すに。大抵大概なみや通例の氣配り氣兼ね氣扱であらうか。繪合姫とのもじやくもすつきり軍法智略の元。サア何故と御意なされ。先づ奉公にお出でなされても新參の初々しく何處へ取付く島はなし。殊に主人安東は音に聞えた堅い和郎。こくく缺ける搔餅親爺煮ても焼いても陳臭い三年米。少切米の徒士若黨取入る爲になめ過ぎた。諂だては猶ならず。子に絆さるゝ親の習ひ子の氣に入つて取入るも因果と。安東に男子はなく。褻にも晴にもたつた一人の繪合姫。地繪にかうというても男ぎれは覗かせもせぬ奥娘。詞殊に主と下人と是に取り入りままと女夫になるといふ戀の智恵は。ほんに凡夫凡人文珠でも叶はぬ事。萬事急な仕損ひの始。そりりと雨垂で飛石に穴のあく様に。地日頃お側つきくの腰元衆によう思はれ。詞ア、けな人ぢや氣の和かな男ぢやと。お姫様の御前向の評判が先づ第一。自體義助様手書きなり繪書きなり小細工は利いてあり。打囃しごされ。歌連歌ごされ。仕残しのない御器用人常にちよつとお供に出て。お乗物が立つとても冬なれば風の當らぬ所を見立て。春先夏の時分は花でも柳でもある様な。小涼しい景の好い所を見立て。立てませいくと六尺押しつけ棒の端取つて。小利口けに立廻れば。ハテ彼奴は利口な男ぢやと

いやともお乗物からお目が行かねばならぬ。腰元衆にも片最貞のない様に笠の紐つけてやる。灸箸削つたり鐵漿楊枝削つてやる。是義助殿此の張箱張り直いて、何ぞ繪書て下されぬか。地おつと心得竹の筥持つより早くしやんと張立て。思はくらしい判じ物筆に任せてさらくさつと。垣に瓢箪百合の花に揚羽の蝶。お腰元より姫百合に吸付くと姫君判じ付き給ひ。詞エ、く、萬事に器用な好い男ぢやな。其のくせ女房もありそもない。氏神様のほで戯謔どこぞに縁が結んであると。地辛氣のあるぢやうお心がもだつきそめ。詞此の團扇に繪書かせよ此の扇に歌書かせよ。立つにも義助居るにも義助。是義助殿お姫様のお氣むつかしいと御意なさる。何ぞお慰みはあるまいか。地あるともくさらばお氣に合ひに青竹一よの節に。心をこめて竹の切り節の溜り水。零る、く、露も零る、お庭の籬の草花盡し、薄根笹を挿交せて御前へ出せばお姫様。サア又義助が命を取るか扱も生けたり亂れたり。折らば落ちなん萩の露。拾は、消えん玉笹の露と譬へたは。光源氏ははどうぢやい。菊や桔梗に色を持たせ朝顔のあつさりと。小百合葉のさつと開けた體。地あの人の氣立が花に顯れた。なまめき立てる女郎花男山から来い、と。薄尾花が招寄せ。君と我ぬる常夏の花。日頃二人が忍草。戀も情もありたけこたけ言はねど花が夕顔蔓。詞なう

局俺が心はこみぢ小萩になつたわいの。いつそ殺して死人花にして貰ひ度い。それ義助呼んで来いそりや召します。こはく御前へはひ出れば。ハテ大事ないつつと寄りや。まだくすんど近う寄りやと。一寸寄り二寸寄り三寸四寸つひ六寸。いつその事思ひ切つてぐつと寄つて抱付いて。それからがこつちの物。どう遊ばせがどうしくされ。お姫様が女房ども。義助變じてこつちの人。地取つていけ、命も身上も取つていけ。田もやらう畦もやらう海もやる川もやる。望みなら親の首でも切つてやると。くさり合つた御夫婦合安東入道を味方につけるは愚か。男のいとしい勢には。父入道に附髪付けて。義貞様の若衆にせうとお使でも。それは矢よりも早い事。サア何と義助様の濡事は。軍法智略の根元根本ではあるまいかと。地頭を振る舌振る今富樓那。フシ鈴振るやうに言ひければ。地尤にも面白く、フシ皆々。あつとぞ聞入りける。地義貞智慮ある大將。女の詞に女の情を察し給ひ。然らば繪合が才覺にて。父安東を味方に從へ連れ来れ。其の時夫婦に對面し。義助には搦手の大將せさせんぞと宣へば。篠塚伊賀守栗生左衛門が妻詞を揃へ。詞御説にては候へども彼の姫は父の勘當。義助様は一旦の下人。兎角君より味方に頼み思召し。御判の墨付印を添へて賜はれかし。地それを力に繪合姫のいひしな。

安東味方に参る事フシ案の内とぞ言上す。地ヲ、天晴汝等は。音に聞ゆる勇士どもの妻女程ありけるよと。即座の一筆天運に盡き果てし。鎌倉を振捨て義貞が麾下に來らば。一方の旗大將恩賞は忠によつて大國を申し行ふべしと。御判の廻文新作の白旗一旒。是を姫に渡すべし鎌倉攻の日限近し。はや疾くくと宣ひて。御座を立たせ給ひければ。五人の内儀一同にはつと頭を下け髪の。いふも愚かの名大將當つて碎くる御仁心。長地慮外申すと思されん何を申すも御兄弟御仲和睦の御願ひ義助公の御悦び。姫君のお嬉しがり。面々夫の大慶いうてく言ひ張つて。引きは返さぬ梓弓武士を男に持つた役。追付け味方の勝鬨の忍いくおうくお嬉しと。五人につこり笑顔の艶もウタヒ共に白旗を靡かして打連れ。御前を三重へ立ちにけり。地安東入道聖秀は義貞の弟脇屋次郎。名を變へて奉公し鎌倉殿に狼藉。娘を連れて立去りしは必定安東が。知らず顔の引入れと何處ともなしの世の噂。相模入道の憤懣に所なく。地病氣と披露し出仕を止め門も閉ぢたる八重葎。一筋残る細道も世を裏門のフシ杉の扉。地明暮の鬱散は相傳の家の子。蟻井の新五同新六相手變れど主變らず。碁盤を友と先手後手中手の石の黑白や。夜晝徒然を晴さるればスエテ餘所は花やら紅葉やら。度々の軍の古疵に土用八專覺る外。世上の善惡見ず知

らすオクリ明かし暮して在します。地義助夫婦は譜代の衆の内儀達の訴訟にて。兄義貞の墨付印の白旗受取つて。夫婦誘ひ又鎌倉に忍び入り窺へば。父安東は我々故御前を憚り遠慮とて。表門は差込めてッシ堀より。高く夏草の。茂りていとど。野とならば。鶉とならんと詠じけん。古歌は述懐我は又スエテ父戀しやと音をぞなく。詞これ此の裏門の向ひこそ父上の御居間。あの見越しの柿の木は自らが。生れし年の實生とて常々父のざれ言。娘儲けるしるしに柿の種が育つたと。御秘藏の一本地同い年の柿の木は。お目も詞もかゝるべし勘當の身のあさましさ。親の家さへ忍ぶかと涙ぐみ立ち給へば。地義助も打惜れ。詞あれ何やらほちく鳴る音は雨ではないか。ア、待たしやんせ碁石の音。例の御好の碁が始つた相手は新五か新六か。今迄は自らが碁を遊ばせばお側に居て。地濱拾うたり造つたり二十三十と數へしも。餘所に聞きなす碁石の音濱の眞砂の數々の。お懐しさとばかりにて忍び。兼ねたる涙なり。地父は斯くとも白石擲んでぐわらりと投げ。ハア、又負けたく。ヤイ新五新六。碁勢弓力は格別といへども。今聖秀が老の身には碁勢なかく敵はず。口惜しや弓力も嗚あらん同じ手にて三番負けた。某が心だめし此の角かける一目を。親石と志し次に打つを子と定め。親子の石さへ生きたれば盤中

は我が地なるに。親子の中を切られては残る石に勢いはいなく。弱い基に負けたなア。人間もまつ此の通り始より子といふもの。持たねば持たぬ覺悟あり育てし親子の縁切れては。地不祥萬事ふしやうばんじに亘る事譬へば此の基二目にて。残る手石百八十死石と成る如し。若い汝等よく聞き置けと基によそへたる我が身の上。包む心の奥の手は。陸目をかめに見えて哀れなり。地兄弟主人の心を察し。ヤ詞お詞について存出し候。御勘當の繪合姫義助殿諸共。本國上野に落付き給ひ候由。然るに兄の義貞鎌倉追討の繪旨を蒙り。軍用意と承る。義貞義助と此方とは敵味方。敵の妻となり給ふ姫君なれば恐れ乍ら我等體迄敵味方。天晴健氣あつはげけいけなる姫君様とや申すべき。但し是非もなき事とや悲むべき。御所存如何と申しける。安東ほくく打領うちりょうき。ヲ、今鎌倉殿の惡逆帝みかどを傾け奉り將軍の宮成良親王を取つて押籠め。其の身の奢おごりに萬民を苦め三惡揃ひし三つ鱗うろこ。地滿つれば虧くくる此の時節鎌倉殿の病の神とは。新田義貞當家の滅亡程あるまじ。代々御厚恩の大名は多けれどもすはといふ時。詞御命に代り眞先まつきさきかけて討死せん者。赤橋本間長濱父子鹽田鹽飽しほだしあけ。かう申す安東ならで鎌倉に一人も覺えず。娘繪合も此の人々に縁を組み。共に忠義を勵まんと思ひしに。地大惡人大倭人の五大院の右衛門宗繁と。鎌倉殿の御仲人子々孫々迄弓矢の恥辱たる

べきを。まんまと遁れ義助を見込み夫婦と成り。志を立てたるは我が子ながら出来したり。ういやつとは思へども。上を憚る勘當に今は親子の縁切れて。老の力も盡き果て軒の燕の羽影はねかげにも思ひ忘る。フシ隙もなし。地子は左程にも思はぬかせめて遠目に姿ばかり。見せたとして何の科しなに成る。エ、詞憎いやつく。いよく子でなく親でなし鎌倉殿への聞えといひ。向後娘が噂無用。地生けうが死なうが聞き度うないと。叱るも啣かち目は涙。ハア詞流行風邪引いたけなと。地鼻打ちかみて紛らかす。心を汲みて兄弟は。顔を見合せ次の間へ。フシ泣きに立つこそ哀れなれ。地夫婦門外に耳を欬そはだて慥まことにあれば父御の聲。折こそよけれ先づ御身ばかり案内し。機嫌を取つて見給へ我も跡より首尾によつて推參せん。義貞の使なればとていかつがましよう無いやうに。只密ひそかにノと草の茂みに忍び給へば繪合姫。親の住家のなつかしさ勘當の身の怖いも半分。胴も顛ひたひ手もわなく。フシ烈しく門を敲かる。地蟻井の新五何事かはと出で向ひ。詞主人安東は仔細あつて籠居の砌。夜中といひ慌あわしく何方いづかたよりと咎むれば。ヲウさういふは新五か。大事な者ぢや繪合ぢや。爰そつと明けてたも勘當の訴訟や何やかや。取交とりませて長い事外から話せば人も聞く。地サアこれ早う明けていなう。明けてくと敲く音聖秀驚き。娘の聲と

聞くと等しく覺えず庭に飛下りしが。詞怒れる聲にてヤア明けまいぞく。地必ず門を開くなとつれなく聞かせ差足して。門に立寄り扉の隙間覗けば曇る宵月の。影にしをれてしよんほりと見すほらしけに立つたる様。可愛や生れし親の家閨も踏まれぬ身と成りしか。他人の軒の雨宿も是へといふは世の習ひ。ありとは見えて箒木の母もなき子を寄せ付けぬ。父が因果は何事ぞ世間武道の義は立てども。恩愛情の道缺けたり何樂みの娑婆世界と。思へばせき上げくしてフシ不覺の。涙こぼるれど。詞猶あらゝかに。勘當の身として不敵なる女め。いふ事なければ聞く事なし狼狽へ居らば夜廻りに括らせ。撲ち殺すが歸らぬかと情なげに言ひ放す。地お聲も稀に飛立つばかりなう父上様かいの。括られうが殺されうが命を捨てて参りしは。詞勘當り御訴訟ばかりでなし。新田太郎義貞殿より御使に参りたり。地則ち御文も是にあり先づこゝ明けて早うお顔を見せてたべと。堀に縋り戸を敲きスエテ泣きこがれてぞ口説かるゝ。地安東はつと涙を抑へ。詞ム、ウ新田義貞は。主君鎌倉殿と敵對我とても其の通り。珍しいお使者門開いて通せと元の座敷に地直る間に。扉を開けば夢心地前後も分かず走り入り。父上なうとばかりにて縋り付くを取つて突退け。地莞爾ともせず座を改め。新田殿のお使者御口上の趣。承らんと三

つ指突いて述べければ。地姫はわつと伏し沈みスエテ暫し。いらへもフシ涙ながら。お髭も頭も長々とお顔も細り給ふゆる。子の身では悲しうて口上も申されず。詳しき事はお文にと白旗諸共基盤に置けば。地聖秀取つて封はね切り押返し繰返し。とつくと披見しくつくと打笑ひ。詞扱源氏には珍しき事が流行るよな。天運に盡きし鎌倉を振捨て。義貞の味方に來れ一方の旗大将とし。猶忠功によつて大國をも申し沙汰すべし。其の印として白旗一旒遣す旨を書かれたり。地今聖秀が年寄つて強弓彎かれず。行歩心に任せねば馬上の達者猶叶はず。何を見込に懇望せられん是不審の第一。詞新田も數代弓矢の家聖秀如きの武士は。小竹杷にて掃く程あるべし事缺けがましい頼みの使是不審の二つ。よし又某北宮駒が勇力。孫子吳子が智謀あるにもせよ。御厚恩の鎌倉を捨て旗大将が忝い。大國がほしいななどとて義貞に降参し。狭間潜りの名を取るべき安東と見られたか。左様の腰抜け義貞が味方に頼まんいはれなし。是亦不審の三つなうお使。梅檀の林に入る者は染めざるに其の衣香しといへり。習はうより慣れよと世話に云ふは何と聞く。犬や猿の畜類も教ゆれば藝をする。女なれども此の安東が胤ならずや。腹の中より武士の法目に觸れ耳に聞き馴れて。斯様の使するものか義貞たつて頼むとも。右三箇條を

言ひ立てて辭退せば。義貞も感心し一家中は舌を捲き。流石安東が娘ぢやと。何故褒められてはくれをらぬ。地勘當したる親心子の善い悪いも何事も。氣にかゝらぬと思ふかや。明暮側で見ると手放して置く其の氣遣。己れやがて子を持つてたつた三日別れて見よ。氣が違はうぞと聲を上げ哀を責め理を責めて。返事はないはや歸れと涙を嗜む目を見張り身じろぎもせぬ顔色は、フシ只木。像の如くなり。地姫は猶しも涙に沈みお氣に背いた自らを。昔に變らぬ親の慈悲思ふにつけて。不孝の罰の勿體なや。つきつめたお氣と知り乍ら此の使致さねば。連合義助殿兄弟の對面叶はず。殿御大事と一筋に跡先わかず参りし事。昔より平家が源氏に従ひ。源氏が平家に靡いて名を顯した例もあり。義貞の味方と申せども十善天子將軍の宮の御味方。地此の白旗が参るからは正八幡に御加勢すると思召し。一味同心の御返事此の上の御慈悲と。膝許に手を合せ平伏し口説き給へども。返答もせず彼方向く。ア、詞ほんにさうぢや。今年は東塞り。願ひ事は叶はぬ筈と立直り。明の方は萬よし好いお返事をと伺へば。くるりつと彼方向く。ハア恵方が違つたさうなとて。地彼方へ廻れば身を背け。此方へ廻れば身を捻ぢたり姫も今は詮方盡き。詞エ、あんまりな父上様。親子の中さへさほど義理を立て給はば。義貞はあか

の他人なり。悄悄と立歸りいなせの返事致されずと。言はれうか言はれまいかお身になつて知り給へ。地夫義助の弓馬の道女房ゆゑに捨てさせて。死んでも恥生きても恥とても御返事ない上は。手討にしてたべ父上と。こほるゝ涙を押拭ひく。襟くつろけて看かき上げ。首差伸べて泣沈む。フシ心の。内ぞ道理なる。地安東思案や極りけん。ヲ、詞いへばさ。返事なしとて悄悄と手振では歸られまい。日本一のおい返事して取らせんと。碁盤にとつかと腰掛くる姫は悦び。ヤア地よいお返事なされうとや諸願成就お嬉しやと。躍り上つて悦ぶ間に押肌脱いで文すんぐに引裂き捨て。白旗たぐつてくるくゝと弓手の小脇にかい挟み。指添おつ取り稻妻光ると見えけるが。肋骨にがはと突込んだり。なう悲しやと繪合姫二人の郎黨抱き付き。刀を奪ひ取るひまに義助門に斬入つて。詞是ぞ昔の義助存じも寄らぬ御切腹。不足の腹か但し義貞書中によつて。地無念の自害候か。フシこれは。くゝとばかりなり。地安東息をほつと吐き。始より御邊も來り給ふとは。推量申すに違ひなし。扶持を分けし間こそ若黨義助。只今は源氏の大将新田小太郎義貞の御舍弟。脇屋次郎義助殿不足の腹かとの御不審。主君相模人道殿。代々過分の所領を賜つて。榮耀身に餘れば天が下に不足なし。老いさらほひたる瘦入道義貞味方に

頼まんとて。旗をも預け給はる段。是以て無念の義にあらず。此の文に書かれし如く主君鎌倉殿。惡逆超過し奢十分に餘つて。家の滅亡只今とは天の鏡に明かなり。此の時を見て聖秀が數代の恩賞。忠義を水の泡となし。源氏の味方に降らんとは。詞生きながら釜で煎られ車裂。身は醜ししげになるともあつとはえこそ申すまじ。又義貞の志も無にならず。所詮返答入らざるものと思ひ切つては候へども。なう男も女も弓矢の家に生れて。斯様の使仕損じては其の身一生の不覺ぞと。使者の顔ばせ見るにつけ痛はしとも悲しとも。地地幾程もなき命何かせん數ならぬ。一命を引出物一分立ててやりたさに。お使者の爲のフシ自害ぞや。詞入道存らへあるならばたとへ義貞。何萬騎にて寄せたりとも一方をつつ支へ。八方に下知をなし陰につほみ陽に開き。蜘蛛手輪違ひに切つて廻らば。恐らく能い兵千騎は斬つて棄つべきに。今むざくと腹切るは主君鎌倉殿の御損。義貞の爲には生中味方につけんより餘程の得分。地地是もお使者がいとほしさ義貞の御前首尾よく。女ながらも大事の使者仕了せたり出来したり。天晴武士の娘やと言はれてたべお使と。スエテ咽せ返りノ。ヤア詞詞忘れたり。平家譜代の安東が最期に源氏の白旗を。手に觸れては賢臣の本意ならずと。地地小脇に挟みし白旗押しまろめ。腸はらわたに。摺り付け摺り

付け血紋ちしぎに染上げ。誰かある筈に立てよ承ると。地地蟻井兄弟とかくしつらひ指上ぐれば。染めし雫はとくくと落つるも同じ血の涙。泣くくと御覽候へと左右を抱へ痛はれば。頭かぶを上げて莞爾こと笑ひ。詞詞一帯いったいの白雲夕日はくうん紅くれなるに染み。秋色錦しゅうしよくを翻ひらして光彩くわうくわい天に輝けり。此の赤旗を押立てて鎌倉殿の討死に。三途の川の先陣は安東入道聖秀。今生は功なくとも未來みらい億劫いふく芥子かひこ磐石いはん。二君に仕へぬ我が心あの旗見よや。地地赤いわく赤いわの聲も次第に弱り果て。目も眩くらめば兩手を上げお使者はどこに。なうお使者くと撫で廻る娘も正氣正體なく。こゝにくと手に取付きもう一生の限りの時。娘と言うて下されとわつと叫べば抱き寄せて。サア詞詞今が四苦八苦義理は今生一旦にて魂たましひ去れば恐もなし。勘當赦した我が娘ぢや安東が秘藏子よ。親は平家夫は源氏うぢ氏は二つに染分けし。地地血汐の旗を白旗と洗ひ返して源の義貞を。親として義助に睦しく。子孫を守り立て此の親に。無駄腹切つたと言はするな義助殿頼み入る。さらばくと合掌し。フシ眠るが如く息絶えたり。地地家内一度に聲を上げ悔み歎けば繪合姫。親子の別れ義助は主従の縁縁鞆ハルツメ天に悶え地に焦れ泣叫びても返らぬ道。父の最期の只一言ひとことのそれを形見と亡き跡に蟻井兄弟髪押切り。死骸を抱き行く道は今や限りの娑婆世界。死出の山路の山彦は。答へず問

はず色則是空にたゆたふ赤旗の。只一本を四本旗夫婦頂く露涙。同じ血筋の形見の血汐流れの末の末迄も。餘所の濁に濁されぬ蓮の玉を武士の。心の玉に磨き添へ後世迄。清く照しけり。

第四

地後醍醐の天皇第四の宮。將軍成良親王は相模入道の計らひにて。二八の春の藤紫御髻を恐れもなく。桐が谷の牢屋形に押籠め蜘蛛手逆茂木。籠に殿しく關を据ゑ。奴隸下部に至る迄男の通ひを禁制し。鶴澤といふ琵琶法師盲人は苦しからじとて。御伽に付け參らせ谷の水音山嵐。身に知る秋の哀れさも。ッ火宅を出づる縁なれや。地父天皇の現世の爲吉野の城にて失せ給ふ。御兄大塔の宮の菩提の爲。此の草庵に讀み捨てし六百卷の大般若。夜晝別かぬ讀誦の聲スエテ心も澄みて殊勝なり。介錯の鶴澤ぶらくくと眠りこけて大欠伸。ナウ調退屈や氣が盡きた。此の世の事さへ見ぬ旨。先の世は猶見えぬと。べんべんだらりの大般若。お氣の盡きるに六百卷のつい數取。六字詰の念佛それも當世粹になり。それやを立つる坊主衆も。ぬはいくぬはいだく。まだ洒落れて後はぬいくなどとやる世の中。叩き鉦より琴琵琶さらばお眠り醒さんと地琵琶取出し一聲一曲奏でける。平家然るに平家。代を取つて。廿餘年。太政入道の悪行。一門

の身に報い。保元の春の花。壽永の秋の紅葉葉の。ちりくになるぞッし哀れなる。地此の一曲に親王驚き給ひ。詞ヤアノ鶴澤。今汝が謠ひしは。古へ平判官康頼が作りし平家といふ物よな。今の時に合すれば氏も同じ平家にて。入道も同じ入道奢も悪行も皆清盛に變らねば。滅亡も同じく遠かるまじと危くも笑止なり。地さり乍ら相模入道かくと傳へ聞かれなば。丸が所望したるかと思はれ又此の上の憂き目や見ん。只鎌倉は千代萬歳。天に口あり地に耳あり。重ねて平家無用ぞと御氣色變れば鶴澤首を長うして。御前を立ち羽づくろひ親王は經の間の机にかきせ。三思へ給ひけり。歌雪になりたやヤレサテ箱根の雪に。解けて流れてヤレサテ三島へ落ちて。三島女郎衆のヤレサテ化粧の水にナホス我は鎌研ぐ。ッ砥石の水に。地柴刈る鎌の埴生の御所近邊の賤の女ども。狂女と思しき女房を中に取巻き聲高に。詞これ作太の喚しよ。其方から申し上げや。いやおこほの姉が公儀者ぢや。よいやうに申し上げや。エイうそ恥かしいどれからなりとも申しやいのと。地どよめく聲に鶴澤内より腹立聲。詞あたやかましい柴刈ども。御代が御代なれば賤しい己れ等。覗く事もならぬ御殿。はや出てうせうと喚きける。お道理お道理其の譯存せぬ我等にてはなけれども。地此の上藤は旅の人行き暮れて宿はなし。狼狽へ給ふ

おいとしさ。何も後生とこちの内に寝せられたれば申し。因果と其夜から狐が憑きしやべるやら狂ふやら。小豆飯でたらしめても六杯七杯してやつて。退きさうな顔もせず。山伏殿のいらたか數珠。青松葉もなんともせず。手に餘つてせう事なく。地此の山の親王様お位は神同然。歌とやらお書きなされたお筆の跡を戴かせて。御祈禱遊ばせば生靈死靈瘧疫病瘡瘡麻疹。鬼缺啞ころかな。調いかな病でもほんに拭うて取つたやうに。またや再び跡方なく。谷七解が親王様のお蔭を仇にも存ぜず。地關所の番衆に斷り申せば女子の通ひは苦しうないと。許しを受け参りたり此の狐退くやうに。何なりとも頂かせ御祈禱頼み上げます。正眞の御慈悲と。フシ皆々手をぞ合せける。地鶴澤顔をふくらかし。調ならぬ。如何な日も病揃への願ひ事。お慈悲ごかしに取次させ。糶の一合も其の禮とていつくれた。貰ひ度いではなけれども。地人は心きたない奴等。フシならぬと叱りける。調お道理。言はれて出すはいな物なれど。是はおんざの秋茄子。地嫁にも喰はさぬ志此の西瓜は私が手作の黒實。黑豆豇豆も少分ながら。お夜食の奈良茶のため出来初穂の黍園子。見つきはさもしい物なれどほんに願が落ちますと。有りもせぬもの口先で。そこらに並べ置く體して狂女をそつと捨置いて。各めませ差足

し。フシ皆々麓に歸りけり。地猶々慾に目の見えぬ鶴澤俄に追従笑ひ。へ、へ、へ、調エ、在所衆は律儀な。取揃へていはれぬ事是に及ぶ事かいの。親王様は立てうと伏せうと俺次第。先づ其の黒實殿冷してくれう。喚達々々皆何處にぢやと。地あたりを撫で廻り。ヤア爰にか手が悪いと。狂女の膝に取付けば坊主頭をくるくる。耳を掴んでくる。鼻を掴めばくつさめ。くつさめ村雨氣違ひ雨振廻されてコレ何しやる。調是は俺が頭ぢや。地黒實ではおじやらぬと取付けば取つて突退け。調アリヤ。それ。惚れた男があれそこに。地堅い顔してゐなさんすと。宮のお側へ行く所をどつこいやらぬそりやならぬ。調惚れたとはあたたかな。狐が惚れて跡が役に立つ物か。親王様はお位といひ出家のお身。女子の香もお嫌ひ好きな坊主を抱いて寝よ。地爰へくと撫で廻る。女大きに嘲笑ひ。ヤア調しやらくさい。蛸坊主。位々とやかましい。位倒れの宮様に惚れたら何ぢや。人であらうが狐であらうが。戀に高い低いはない。假初ながら自らも稻荷の鳥居越えたれば。地神の位具つて小宮の主といはる。身。王は十善神は九善。一善足らぬそのぜんを据ゑに來た女房を。喰ふまいとは胴慾な。調精進であらうが出家であらうが。箸取らして男に持つと。地猶止らねばいやこりや据ゑる膳

を嫌ひはせぬ。喰手は爰にと引留むれば。地あちらへ潜りこちらへ抜け。手に廻らねば途を失ひ。壁に取付き柱を抱き。とほつく所をつつと抜け。御座の一間へ走り入り御經机引つたくり詞今から後生は早いぞえ。サアござんせ抱いて寝よと。肌もあらはに物の氣のッテあらぬ姿ぞ恥かしき。地親王あきれし御顔ばせ。詞賤の女どもが頼みし狐憑とは此の事か。大方にては立去るまじ。丸が秘密の神道加持。地神おろしして拂はんと柳の一枝折りかざし。天地四方を再拜の。日本國中の神々を爰に請じ奉る。伊勢石清水賀茂春日と。稱へ給へば飛びかゝり。御手の柳もぎたくり日本國を一日に。駆廻る神通の狐。神おろしはこつちの得物と柳葉を振り立て。振り立て御口うつし口眞似の。スエテ其の神おろししどもなき。

神おろし

168
 そももく。私は首だけこなさんに惚れて可愛のいの字の伊勢の。いかいたはけの手管の大盡。末社々々の末社坊主が。傍に月よみ日よみ隙なく心のたけを。小オクリいふに。いはくの數々は。ほんに一萬虚空藏。戀の根本二神の。教へ始めし濡繁昌。色に打込む國々は。スエテ先づ王城の祇園町。戀に身を賣る稻荷前オクリ我が友。狐畫狐人にも神にも粹不粹。わけのよい加茂のるい

加茂。わけいかづちの臍つかみ。サイモン上下に宮作り高いお山は二座三座。跡詰めたがる愛宕山長床坊の長枕。貴船は木屋町のほさんすオクリ男。山には新八幡。鼻毛千本朱雀の全盛。寶寺かや槌屋のおかね。打出しつき出し新造禿。伏見がもとへ御幸の道中。越後町には茨木住吉。いばらが取付き。ひつ付き。吸付き。フシ四國九國の。船玉様には打つて付けたる臺八重山名も高き屋に。登詰めたる。揚屋最初の天王寺。オクリとく様。く。聖徳諸譯。吉野に座持。フシ御見なりたや大和の客様フシ人ごとのゆひ。伯耆の大臣丹後に成合としく女夫。よいこのくゆひ小妓達。伊豆の國には箱入千兩。そこさんこさん。お湯殿奉公出羽の國には羽黒の妓衆。白齒の振袖ちよつと彼方へ鹿島。かい取り上着の伊達こき。總じて日本六十餘州の神々達も。色でかためてござんする。コハリ天に織女地に結ぶ。三千世界六萬恒河の鱗女夫々々はあるものを。シヤほんにあたナホス。胸慾な敬つて。白すとしやべりける。地親王兎角うるさやと後の障子押明け。逃出で給へば遁さじと共に續いて追ひかくる。鶴澤も心得て捕へてくれんと大手を擴け。めつたつかみに飛廻る僅かに狭き庵の内。爰にかくれ彼處に逃げ。追出されて柴の戸やしばなく鳥の木隠れも。無き隅々のかくれんほ。フシ物騒がしき風情なり。地親王も今ははや隠れ給ふ

に所なく。讀みかけ給ふ大般若蓋の明いたる櫃の中。上にはお經打被^かき息をつめてぞおはします。狂女うそく尋ね廻つて般若櫃に目をつけ。ヤア詞爰ぢやくくと明いたる方は氣もつかず蓋せし櫃を押開き打返し。ハア地是にも君はましまさぬとッ又引つ返し尋ね行く。地親王櫃より遁れ出で又もや歸つて尋ねんと。捜せし櫃に入替り心かしくおはします。鶴澤も顛ひく庵に歸つて親王様。宮様は何處どこにぞ私わたくしを隠して下されと。顛ひく經箱に行當り。女の恐るゝ大般若忝しと始の櫃に隠れ入る。狂女も尋ぬる詮方つき蓋せぬ櫃が訝いしく。詞立歸つて經引退け引つ立て見れば座頭の坊。ハア、地許せくと駈け出づるを直すに抑へて無理無體に。押込めく蓋合せ。櫃の捻錠しやんと卸し腰打かけ。サア邪魔なやつめを片付けたと。スエテ溜息。ついてぞ休みける。地親王顯れ出で給ひ恐ろしけなる御聲にて。己れが振舞狐にあらず狂氣にもあらず。本性正しきつくり者仔細ぞ有らん。眞直ぐに申せとはつたと睨んで宣へば。女飛と下り頭かづぶをさけ。涙をはらくと流し。地御痛はしや勿體なや御顔ばせと申し般若箱に入り給ふ。御心の働き迄御兄大塔の宮様。般若寺にての御計略に。よくも似させッ給ふぞや。地我等全く狂女には候はず。詞大塔の宮の御乳人。村上彦四郎義光よしてが妹やよ梅と申す者。

君は知召されずや。吉野の城にて兄彦四郎我こそ大塔宮と名乗つて。御身代りに腹切つて宮を落し奉り。地今は紀州熊野に御安泰にて在おします。此の事知らせ参らせ度く女は苦しからぬと聞き。賤の女を語りひ狂女と偽り参りしが。詞此の座頭めに知らせじと慮外は御免候べし。いつ迄斯く安閑としてましまさん。御父天皇様は名和の又太郎が計らひにて。伯州船上みなに臨幸なる。山陰山陽中國九州味方の大名雲霞の如し。地大塔の宮の御方へは熊野の新宮本宮。紀の路河内の武士ども聞傳へて馳集る。金剛山には楠正成摩耶が城には赤松籠り。備後に高德櫻山山野には新田の義貞。給旨を受けて總大將足利尊氏千壽王。一家を盡し我が君を今やくと待つ時節。言ひがひなき御心出家の功德も衆生のため。此の合戦も民の爲何れか勝かり劣るまじ。急がせ給へと理をつくし詞を並べし諫言は。あつばれ名ある義光がッ實妹ぞと知られたり。地親王安堵の御氣色。扱は大塔の宮の御首とて鎌倉に來りしは。お事が兄彦四郎の首なりしか。不便みびの者の最期やな。汝は又女ながら兄に劣らぬ忠節。かゝる味方を持ちながら逆臣に犯されおはします。父天皇の御聖運。あさましきよとばかりにてスエテ御落涙はせきあへず。地かゝる所に麓より番所の大將大場の前司。家來引具あし慌あしく戸を敲き。詞今朝柴刈が伴ひし狐憑の女

一人暮くに及べど下山せず疾い々出でよ出いでよいとひきける。地ち誠まことに諸天しよてんの計はかりらひにや宮みやはやよ梅うめが上かみ着きを被かき御ご髪かみさつと亂ごしかけ、すつくと立たせ給たまふを見て。ありや狐きつねめよ出いてうせうと喚わめけども態わざと動うき給たまはねば。エ、詞ことばしぶとい骨こつ頂たかめ追お出いせい。地ち暈ませ化はされなと狩か立たて狩か立たて追お下くだろし。思おもはず遁にれ出いで給たまふいし御ご運うんの程ほどこそ目め出いたけれ。ヤ親おや王わうは別わか條じょうはおはせぬかと奥おくに入いつて見み廻まわせば。地ち思おもひも寄よらぬ以前いぜんの狂くる女に親おや王わうの装ま束と着きして坐ましたりけり。詞ことば弓ゆみ矢や八はち幡ばんばかされた。それ親おや王わうを追おつかけよ。先まづ其そのの女く曲せき者もの括くれよ縛くれとどつと寄よる。地ち既いに危あやく見みえける所に大だい般若はんにやの櫃ひつ動うき出いで。忍しのいやうんと力ちから聲こゑ經きやう櫃ひつ徹てつ塵ちんに踏ふ碎くき、ぬつと出いでたる大だい坊ぼう主しゆ皿びんのやうなる目めを開ひらき。女にを圍かこうて立たつたるは、フシ心こゝろ地ちよくこそ見みえにけれ。詞ことば大だい場じやう大だいきに仰あや天てんしヤア座ざ頭とうめが目めを明あいた。此こゝ奴やつも似にせ者もの二人ふたり共ともに遁にすなと。しきつてか、れば睨にらみ付けてえせ笑わらひ。ヤイ大だい場じやうの大だい馬ば鹿かめ。忝かたじけなくも某たがは源げん氏し嫡ちやく々の嫡ちやく流りゆう。新しん田でん殿でんの郎らう黨たう名な張ちやう八はち郎らう爲な勝しやうといふ新しん前ぜん座ざ頭とう。古こへの景けい清せいは。鮫さま魚ぎよの鱗うろこを眼まなこに張はり頼たの朝あさを欺あざきたり。予よも其そのの如ごとく作つくり目めのまんまと二ふた杯はい目めくはせしに。加か減げんがよいやらようこしめすこれやよ梅うめ。扱あ々あ其その方は手て柄がら者もの。某たが義ぎ貞ていの下した知ちを受けあつたら頭かたまを剃かり丸まるめ。いかぬ琴こと瑟せき稽き古こして。歌うた投な節せつでやつて見みても。いきか

ねた番ばんの者もの。狐きつね憑つで化はすとは出い来たきた。正しやう眞じんの狐きつねも跳は足あし。地ち宮みや様さま助すけけた返へん禮らい其その方かたは此こゝの座ざ頭とうが助すけくると。尻しつひつからけ櫃ひつの蓋かき脇わきに挟くんで立たつたるは。樊はん噲たいが鴻こう門もんにて項かう羽うをフシ睨にらみし勢せいなり。詞ことば大だい場じやう怒いかつてヤア物もの言ことはすなと。大だい勢せいどつと崩くづれか、つて攻せう寄きする。どつこい海うみ蜻せみ蛉あひのひよこくめ等ら。どりや暇いとま取とらせんサア來きれと。地ち蓋かき取と直ちよくし一ひと討うちに五人ごにん三人さんにん打うち拉ひけば。やよ梅うめ元もとより心こゝろ利きき六百ろく卷まきの大だい般若はんにや。追お取とり、投な付けくれば經きやうの箔はく紙し背せ圍いに。光ひかりり渡わたつて劔けんの如ごとくさしもの大だい勢せい怖おそぢ恐おそれ。谷やへこけ落おち岩いわ角かくに。フシ多くは討うちたれ逃にげ散ちつたり。地ち八はち郎らう勇ゆうみ立た歸かへり。又また智ち恵ゑが出いたやよ梅うめ。いざ宮みや様さまに追お付けいて新しん田でんの方かたへお供ともせう。旅りよの案あん内ない合あ點てんか。チ、く、チ合あ點てんぢやがッてん。かい取と前ぜん小せう妻さいきり、桐きりが谷や。氣きなやつういやつ伊い達たつなやつ谷や々々。越こえて三さん重じゆう追お付けきて。

親王道行

ハルフシ伴ばんふ月の。影かげ迄いたも。君きみが御ご身みを守まもりめ。彼かの日ひの神かみの御ご護ご。スエテ夷い狄てきの雲うみに蔽おほはれてギン。涙なみだがちなる御ご目めの内うちに。位ゐ備びはる天てん皇わうの末すえの半しやくや落おち人と。雨あめ夜よの星ほしに隠かくれ行いく八はち郎らうは沙さ門もんの姿すがた。親おや王わうもやよ梅うめも。稚ち兒にと見みせたる。フシ山やまかづら。ハルフシ山やまの額ひたひに。立たつ霧きりは笠かさの。かさ

なるかさなる笠の。違へくして三つ輪違へ。一二の丸や三の丸。ホオクリあなた。こなたの關の戸を。通れ越えさ給せひける。オクリ御有様こそ。危けれ。フシ江南離別の夕の雨。關山宮の朝の霜。とくく落ちて谷川の流れ別る、谷々や。長地やつく、二つ指折れば二八の姿十六夜の有明残る薄霧の。籬の萩の朝しめり。秋は夕と誰が言ひて。フシ鳴立澤に氣をとめし。西行法師の旅衣。肩にかけたる油團には。情の種や戀の種。和歌は心を種として。三十一文字重ね文字。牛の角文字直な文字。戀し都の垂乳根も又同胞も何國。くいづこに我を戀ふらん。子は子なりけり。フシ梁の。契を返すつばくらめ。歸るや嵐戻るや時雨亂れ。くいて。行く空の雲井の外に。九重を忘れ草さへうら枯れて。浮世の罪に責めらる、フシ鬼の醜草。名にも似ず。あいあいらしき松蟲鈴蟲。フシ機織着せて。野分身にしむア、さぶこさぶ。猿の衣借つて着しよ。木の葉小猿が抱かれていこか負はれていこか。何地離れて汝も亦。待乳山とは。フシあれとかや峯に時雨の。白髮絲かけても同じ黒髮山。御父帝の御齡。壽をへてしらま弓やがて軍に勝間田の池の。玉水掬びあけ。フシ頼をかけて。生品の。大明神を伏拜み。安房や上總や伊豆相模。蒼海漫々渺々として。汐風さつと散しがきなる文詞。大磯小磯のたはれ女が。歌伊達をするが

の富士鹿子。よいかのく。よいく鹿子の小袖胸高に着なして。小袂高に着なして。思ひ染め鹿子。浅黄鹿子の紅鹿子。堪りませぬと三國一の。フシ名山の。名を力にて行く道は頼みありける三芳野の。田面の雁も夜となく晝は人目の厭はれて。晝顔葛。眞葛人に知られて来いくと。碓の音の呼聲を。人里ありと生中に聞く甲斐が嶺のかひもなき。信濃袖の糸太く。ハツミ身を刺す。如く秋の風。颯々蕭々として金鐵皆鳴る敵に赴く兵の。枚を含んで進むといつし古人の詞折に觸れ。フシ御心勇む。御袖は萩が花摺り草摺に。千草の錦色々の鎧草とて小手指原。御身も廣き武藏野や霞が關の此方なる人間の。渡りに三重着き給ふ。地名張八郎謹んで。調さて鎌倉には君落ちさせ給ふとて。上を下へと返すにて候はん。跡より追手かゝると思へば氣も急いで道ばか參らず。此地の所に待受け追手の二組も三組も駈散らして。行先御心安くゆるゆる御下向候べしと。いひもあへぬに大場の前司。小具足の雜兵甘騎ばかり息をばかりに馳せ付け。詞ヤア似せ盲の青坊主。己れ韋駄天の足を持つたるとて。足跡連れてぬくくとそも逃しやるべきか。尋常に宮を渡せ。地力味だてひろいたら。四つ足をぐいくと。引抜いてくれんず。フシはや渡せとぞ罵りける。詞名張けらくとえせ笑ひ。人事いはば目代置け。たつた今

追手がな來いかしと言つた舌も引かぬ中。此の名張が四つ足をぐいぐいと抜かうとや。口程ならばなぜ桐が谷で抜かなんだ。いで其の腕打折つて取らせんと。側に立木の本口二尺ばかりなる。えてに榎を諸手に取つてえいんと引抜き。地や根があつてやかましと。土打振ひ一間四方も蔓りし。根をつま切つて捨てたるは。牛房の髭を筆るより。フシ猶易くこそ見えにける。地追手の中より色眞黒に目ばかり光る大男。小躍りして飛んで出で。榎の梢むんずと掴み身が名は音に聞きつらん。鎌倉に隠れなき島戸の四郎といふ大力。名張八郎が力立すると聞き。雑兵に紛れ向うたり。地島戸にかう掴まれて動かされれば動かせと。梢を掴んで突つ張りしはいづれを覆いづれを腕ともわかざりけり。地八郎力張るともなく扱面は黒けれど。力はまだ青いやつ。己れ動かば動いて見よと。地根元かろく振廻され。風に揉まる、梢の寝鳥よろりくと成る所に。残る雑兵枝々に我もくと掴み付き。聲をかけて引止むる。地ホ、ウもうよいか一人づつはむつかしし。一時に入間川ふんながして捨つべきぞ。地しつかと取付け放すなと廿餘人縄つたる。大木片手にかろくと二三町こそ引摺りけれ。大場あせつて。地エ、此の間に親王を奪ひ取らんと詰寄れば。地やよ梅が懐中の守り刀を抜きそばめ。親王一期の御安否と思

召し切り給ふ。御相好の威に押され心おくれせし所に。後を見れば追手の加勢と思しき武者。千騎ばかりぞ打たせたる。地大場大きに力を得。鹽田殿か長崎殿か早うくと扇を上げて招く間に。軍兵どつと打寄せたり。大場飛びか、り宮の御手をしつかと執り。やよ梅をひつ立て。地これく將軍の宮成良親王。此の女は所縁の者儘に取つて渡し申す。扱新田が郎黨名張八郎にあぐんで候。加勢のしるし名張めを討取り給へといひければ。地大將馬を乗放しく、神妙の働き御太儀く。名張めは此の方受取つたりさり乍ら。名張が事は追つての沙汰。先づ御邊を遁さずそれ搦めよ承ると。踏付けく、高手小手に締め上ぐれば。扱は各二心か是は如何にと仰天す。兩大將打笑ひ。如何に外様の端侍なればとて。當代鎌倉にて長崎鹽田を見知らぬか。我こそ源氏の大將新田太郎義貞。舍弟脇屋次郎義助。地將軍の宮御迎ひなりと宣へば。南無三寶猫に乾鉢預けたと。フシ投首してぞ居たりけり。地時に名張は島戸を梢に括り付け振肩けて立歸る義貞兄弟御前に跪き。只今の行啓何としてかは存すべき。昨日の暮程天狗山伏虚空をかけり。將軍桐が谷を遁れ落ち給ふ軍勢牽し。迎ひ奉れと國中を觸れ通る。魔力人力加つて神力佛力添ふ上は。地鎌倉追伐義貞が掌に候と宣ふ所に。コハリ新田の一族大館次郎宗氏。子息孫次郎幸

氏。二男彌次郎氏明。三男彦次郎氏兼。コハリ堀口三郎貞満舎弟四郎行義。岩松三郎經家里見の五郎義胤。江田の三郎光義桃井次郎。地直義。コハリ田中大井羽川鳥山。紀の五左衛門足利の千壽王。額田一の井山名大島信濃源氏ナホス甲斐源氏。都合其の勢廿萬七千餘騎。家々の旗さし連れさし連れ甲の星を輝かし、フシ鎧の袖を連ねたる。忠臣の義氣天に満ち。武勇の功地を震ふ。呂望管夷吾再來して三軍の帥を司る。懸河の辯の滔々と流れて絶えず入間川。岸の松風萬代を調べ合せ出合せ。迎ひ合せて大將軍。生捕を先に立て本國に。供奉し參らする。

第五

地 寬裳羽衣の一曲に漁陽の鼗鼓地を動かし。烽火萬里の許の後に。戎翟の旌旗天を掠む。新田の軍兵六十萬七千餘騎。元弘三年五月廿二日。稻村。山腰越藤澤化粧坂。小袋坂十間坂五十餘箇所を攻破り。鎌倉に乗入つて関の聲矢叫びの音。も翻り、フシ山も裂くる如くなり。地相模入道錦の直垂に緋威の鎧を着し。床几にかゝりおはすれば。出頭第一の五大院宗繁。大將の側に吸い付いて。人馬の馳違ふ音。関の聲の度毎に。びつくりく唇うるみ膽礫色。瘧病の様にならなき聲。詞これ我が君あの音がお耳へ入らぬか。御思案は只今。名を取らうより得を取

れとは武士の道。君一人恥を捨て給へば。萬人の悦び義貞に降参なされ。地味方の大勢助け給へ。あれくも其處へ敵が来たさうな。サア落ちなりとも逃げなりとも。どうぞ御思案く。エ、のつとりも時によると。地立騒ぐ所に長崎次郎高重。蓑毛の如く矢を折りかけ。鏝元迄血になつたる太刀振り肩け。白絲の鎧朱になつて立歸れば。そりやくそ敵よと大將の。床几の下に、フシ踊り屈むぞ見苦しき。地長崎廣椽に手をかけ。詞御運命今日に極り。敵はや諸方の持口を攻破り。味方には赤橋本間鹽田櫻田大佛。鹽飽同苗爲基など宗徒の大名。地諸手の大將残らず討死仕る。某も敵の大將義貞兄弟に組まんと。笠標かなぐり捨て。數萬騎が中に亂れ入り十方に分身し。萬卒に當つて八十餘箇度駈合せ。そるなる黨の奴ばら。四五百人斬つて落し候へども。詞義貞が連や好かりけん終に兄弟に駈向はず。上の御事氣遣しく引返し候。地一先づ笠井が谷の御菩提所東勝寺へ入らせ給へ。相構へて高重又歸る迄卒爾の御自害あるべからず直に打つて出で。寄手の奴輩高重が切先に。逃迷ふ有様。冥途の道の御物語に仕らんと。詞すずしき武者振は。フシ類なうこそ見えにけれ。相模入道齒嚙をなし。詞エ、無念や義貞が弟義助め。當春犬牢にて打殺し棄てんもの。後悔千萬かひもなし。我と思はん味方は義助めに微傷

なりとも負うせよと。地言ひすて床几を立ち給へば。五大院も續いて立つて行く。長崎聲を
 けこれ〜五大院殿。御邊莫大の御厚恩いつ報せんといふ事。只今の御言葉義助と刺違へん
 思はずか。サア同道せんといひければ。詞尤なれど天下の主の御生害に追腹の無いといふも後
 代の恥辱。冥途の旅の御供に御側は離れず。さらば〜と行く處を猶引留めて。冥途の旅の御
 供に誰か一人も残るべき。地年來君の御氣に入り。諸大名に勝れて威勢を振ひしそのしるし。
 此の度見物申さん。一働き所望々々と手を取つて出でければ。詞ム、扱は某後れたりと思つて
 か。詞いで一軍して敵味方の目を覺し。武士の手下にせんものと廣言息も引かぬ間に。追手搦
 手鬨の聲。ハア、悲しや桑原々々世直し〜。腰抜けるやら太刀抜くやら。勝ち誇つたる源氏
 の勢。本家は今日を限りの軍。命をかるんじ義を重んじ。花を飛ばせ紅葉を散らし。喚き叫ん
 で 三重々 戦ひける。地義貞の天運龍神も感應にや。コハリ稻村が崎三十餘町俄に干潟となりけれ
 ば。栗生篠塚畑巨理。乗入り〜小町口の大門。若宮小路の櫓門。銅の門鐵の門。二十餘箇所
 ナホス切破り。大將相模入道に、フシ出合はんとぞ攻めたりける。地副將軍脇屋次郎義助大音あけ
 詞鎌倉方の宗徒の弓取八分は切取つたり。地未だ五大院の右衛門宗繁。其の行方知れ難し。一

歳我を犬責にし法に過ぎたる振舞。憎し憎しと思ひしに何處へか落ちつらん。雲の裏へも分け
 入つて。彼奴を提げ引張り斬りにして見せよと。フシ苛つて下知をなし給ふ。地名張八郎爲勝敵
 を鬪つて遊ばんと。腹巻に肌襦袢。股引菅笠太鼓どん〜どんどん〜鈍な敵の。あまい
 奴ばら爰へ来い〜。こいと練りとて人も菊やが。名譽名物。こりや〜〜買をなら今
 ぢや〜。こりや〜小萬や小女郎や小糸。器量のよい子や。氣立のよい子が赤前垂に。紅の
 襷でしんとろもんどろ。かけて腰の廻りに繻子の帯を。やつくるりつと十文字に巻いて。雪の
 肌。白い顔してとろりしんとろり。練りやりましたを買をなら天満。是は名將名物給とて。
 ちぎつてちぎれず嚙んでかまれません。手に付き齒に付き。につたにた〜新田給とてこれがこつ
 ちの名物給ぢや〜。こりや〜ヤリヤコリヤ唐の咸陽。日本の鎌倉。踏んで紛にする唐白給と
 て。是も新田の名物給ぢや〜。相模入道蛸の入道。天窓へしこむ。壺入給とて。是も源氏の
 給の名物。奢ものめが。くわつくわと光つて。消えて流る。蠟燭給とて是はそつちの名物給ぢ
 や。味方色よし。敵の勢は。運つき給とて。是も軍の名物給ぢや。平家弱味源氏勝杵。是は
 こつちの味増揚給とて。鎌倉勢を。腰につけるが。巾着給ぢや〜。煙管の雁首細首元首給首

鎌首。換よなら今ぢや。こりやそりやく／＼かゝれやかゝれと太鼓を鳴らし團扇を上げ。フシ踊り跳ねてぞ勇みける。地打漏されたる敵の軍兵。憎い名張が侮りだて。いでもの見せんとどつと寄る。ヤア地言葉が甘ければ舌について。只紙らんとは命知らず。地名張が手練の名物。棒飴一本舐つて見よと。荷ひ棒をおつ取りのべ。たゞ伏せては首引つちぎり。捻切り討切り八方無隅。ねりつめ／＼三重へ追ひまくり地走り返つて心地よし。さり乍ら大將相模入道。悪人五大院の右衛門討取らぬは残念なり。サア詞先途の大事は此の度と。飴箱の蓋取りければ。地手飼の白石尾を振つて飛出づる。詞こりや汝は鶴が岡のつかはしめ。義助公の御命を繼ぎし神變の名犬。畜類ながら忠恕の性あり。城中にかけ入つて。五大院の右衛門を追出せと詞言ひ含むれば心得て。牙を鳴らし身震ひし。堀を飛越え堀を越え手負死人を蹴散し。土を蹴立てて駈廻る長崎次郎遙に見て。生中の兵五十百斬つたるより。此の犬こそ能き敵よと。追かけ出づれば名張ずんど駈塞がり。詞御邊親子兄弟は。鎌倉にて鬼神と言はるゝ兵。某が名物飴。舐らせぬも口惜しし。死出の山坂咽濕せと。持つて開いて打つ太刀に。眉間より胸板迄。フシ立割にこそ割付けけれ。地すはや長崎討たれぬと寄手の大勢城中に。乗入り／＼塵にぞ

三重へ攻崩す。地五大院の右衛門宗繁。主人相模入道を高手小手に縛め。新田殿兄弟の御馬の前に畏り。詞我等由なき此の大悪人を主と頼み。勿體なくも源氏に對して尾籠の働。恐れても餘りあり罪を申し開かため。相模入道を斯くの如く縛め降人に出で候。一命御助け下されば。生々の御慈悲と存じ奉る。定めて此の繩智略の空繩と御疑ひ候はん。地誠の心を御目にかげんと。入道を取つて伏せ首搔き切つて差出す。五逆十惡天命のフシ歸する所ぞ恐ろしき。時に白石一文字に吠えかゝり。五大院の右衛門が首の骨ひつ咬へ。くるり／＼くる／＼と振廻し。ふつつとフシ喰切り捨ててけり。地朝敵神敵一時に滅び果つるも源氏の武運。新田の威勢輝きて。帝重祚ましますば。將軍も還補あり。武士は弓矢を袋に入れ。干戈を箱に治むる御代。農民は作り取り。商人は賣買もやす／＼豊に明かに。道ある君は萬々歳國民。徳にぞ靡きける。

娥歌がるた

近松門左衛門作

(七行八十四丁本・十行三十五丁本参照)

序 夫婦は大倫なり。關雎は樂んで淫せずといへり。敷島の我が御神天の浮橋に立ち天の御柱をめぐり。飛び來る鶴鶴の鳥にならひし妹背の道。人に教へて人の種八百萬代も盡きしなき。人皇八十代高倉の院の御宇。太政大臣清盛公の嫡男小松の内大臣。平の朝臣重盛公のオロシ賢徳四海に。輝けり。地 武藝文學に長じ給へば。源平の武士重く敬ひ申す上。御妹の姫君中宮の。宣旨を蒙り女御に立たせ給ひ。安徳天皇の國母として建禮門院と號し奉り。公家のもてなし世に越え家門さか行く常盤木の。蔭に靡くや都人フシ賢人と。仰ぎ奉る。地 頃は養和元年九月九日中官の御方より。御祝儀の御使戸無瀬の局が折にあふ。地 菊の着綿置綿に。白髪交りの下髪もフシ 千代を深めて匂ひけり。地 重盛公座を立つて御口上承らんと宣へば。詞 先づ今日の御目出たさ千歳の秋を重ね菊。盛りについて山々の紅葉も嘸と。御覽せられ度き思召候へば。毎年の如く北山の茸狩。御催しあれかしの御使なりとぞ述べにける。重盛公聞き給ひ。是より申し

上げんと存ぜし所。來る十三夜名残の月を北山にて御覽あり。一三日も御逗留あるやうに計らひ申し上げられよと。地 御返答ありければ局悦びお嬉しやく。中宮様にもさぞ御機嫌お側次次の。若い女中達なま年寄りし我々迄。詞 春の花秋の紅葉一年に二度の。地 稀の行啓の事なれば此の御遊を待ち兼ねしに。はやくお返事申す爲お暇申し参らす。木々の錦野邊の蟲打續き日和は好し。月も一入御機嫌と下が下迄のお嬉しさ。お侍衆其の日は何れも御苦勞すもじ致せしと。挨拶辯舌流る。瀧の。戸無瀬は御所にぞ歸らる。詞 重盛公主馬の判官盛久。越中の二郎兵衛盛次を召され。秋に一度の茸狩の御遊路次警固山の掃除。御假屋に至る迄例年の如く。随分疎略なきやうに賄ふべし。扱中宮は花鳥に御心を寄せ給へば。假屋の前に庭籠を組ませ四季の小鳥の品々を。放ちて御覽に入るべきぞ。地 はた又此の頃門脇殿より賜りし山雀。輪をくゞり水を汲み。人の手に従ひ様々の藝ある由。重盛是を愛せんも大人氣なし。中宮の御慰みに参らせん如何に齋藤龍口。使者の用意仕れ委細は女中迄。披露の文を認めん猶口上もあるべしと。フシ書院の一間に入り給ふ。地 瀧口は昨日今日前髪取つて十九歳。お小姓立の使者男衣紋繕ふ出立の。器量見に來る姫ぐるみ。山雀の御使御所を。指してぞ三重上りける。フシ